

東アジア人文情報學研究センター
東方學資料叢刊 第19冊

伝ウマル・ハイヤーム著
ノウルーズの書
(附ペルシア語テキスト)

訳注・校訂
守川知子・稲葉 穰

京都大學人文科學研究所附屬東アジア人文情報學研究センター

2011

前言

本訳注書のもとになったのは、2001年から2002年まで行われた会読形式の研究会の成果である。以下、簡単に本書刊行の経緯を記して前言にかえたい。

2001年春に稲葉が京都大学人文科学研究所に着任した際、イラン留学から帰国していた守川知子氏から、なにかペルシア語史料を会読する研究会を行わないかとの提案を受けた。その際守川氏が選定したのがこの『ノウルーズの書』であった。そこで守川氏と稲葉に加え、当時京都大学大学院文学研究科（西南アジア史学）に所属していた二宮文子氏の3名で、毎週1回担当を決めて翻訳を行い始めたのが夏前のことだった（途中、当時文学部西南アジア史学科の学部生だった高橋良平氏も参加した）。それから1年余をかけて一通り読み終えた後、守川氏が大英図書館所蔵の写本を調査、将来し、これを文字起こししたものを付して、訳注を刊行しようとの計画を立てた。準備自体はすぐに始まったのだが、間もなく守川氏が北海道大学に職を得て多忙となり、かつ京都から物理的に離れたことで作業が間遠になってしまった。しかしいつまでも放っておいても具合が悪いので、このたび東方学資料叢刊としての刊行に応募し、無事承認されて、ここに出版の運びとなった。

刊行へ向けての準備作業の過程で、守川氏と稲葉は、研究会開催時の訳原稿をほぼ全面的に改稿し、また分担して新たに注を書き加えた。さらに守川氏は前述の如く、大英図書館所蔵写本からの校訂テキストの作成、および写本の調査に基づく文献解説執筆を行った。このようにそもそもの研究会の段階から、原稿作成に至るまで、終始一貫して主導的役割を果たしたのは守川氏なのであるが、訳文、注釈等は協働して作成したため、責任の所在を明確にするためにも、両名の名前で刊行することにした。

本資料叢刊の名前にも冠される東方学とは、中国、東アジアにとどまらず
広くアジア世界の歴史文化を包含する学問領域であるが、その重要な対象の
一つであるイスラーム文化圏において、アラビア文字を用いて書かれた文献
の訳注が、本シリーズにおいて刊行されるのはこれが初めてのことである。
本書がそれに相応しい内容のものとなっていることを、訳者両名はもちろ
ん願っているのだが、真にそうであるかどうかは読者諸氏の判断に委ねるしか
ない。

2011年2月 京都にて

稲葉 稜

目次

『ノウルーズの書』解説	i
第一部 『ノウルーズの書』訳注	
序文.....	1
『ノウルーズの書』の始まり.....	3
アジャムの帝王達の慣習について.....	20
大モウベドの来訪とノウルーズの祝賀.....	28
金とそれに関する事柄について.....	31
指輪とそれに関して知っておくべき事柄.....	38
大麦の苗とそれに関して知っておくべき事柄.....	44
剣とそれに関して知っておくべき事柄.....	48
弓矢とそれに関して知っておくべき事柄.....	54
筆とその特性とそれに関して知っておくべき事柄.....	61
馬とその能力およびそれに関して知っておくべき事柄.....	68
鷹とその能力およびそれに関して知っておくべき事柄について	77
ブドウ酒の益とそれに関して知っておくべき事柄について.....	81
美しい顔の特性について.....	92
参考文献.....	99
索引.....	103
第二部 رساله در تحقيق نوروز ペルシア語テキスト.....	Ⅰ

『ノウルーズの書』解説

守川知子

本書は、ペルシア語の著作『ノウルーズの書』を訳出したものである（原題は『ノウルーズ・ナーメ (*Nawrūz-nāma*)』もしくは『ノウルーズの真実に関する論考 (*Risāla dar taḥqīq-i Nawrūz*)』）。

「ノウルーズ (*Naw-rūz*) 」とは「新しい日」という意味のペルシア語であり、われわれの暦の「元日」に相当する。ゾロアスター教的世界観にもとづくイラン・ペルシア世界の元日（ノウルーズ）は、昼と夜の時間が等分となる春分の日（西暦の3月21日ごろ）である。

イランでは古来、この春分の日を新年のはじまりとする独自のイラン太陽暦を使用しており、現代でも、太陰暦のイスラーム暦（ヒジュラ暦）とは別に、「ノウルーズ」を起点とするイラン太陽暦が国の公式カレンダーとして用いられている（岡崎 1987; *Elr*: “NOWRŪZ”）。イラン太陽暦では、1年のはじまりは太陽が春分点に入るまさにその瞬間であるため、毎年4分の1日分ずつ新年の時報が鳴る時間は遅くなる。新年が訪れる瞬間には家族や親戚が集まり、新しい年のはじまりをそろって祝う。ノウルーズが近づくと、人々は大掃除をし、衣服を新調する。またノウルーズ前後の2週間ほどは「ノウルーズ休暇」となり、年始の挨拶回りやお年玉が配られるなど、日本の正月と同じような風景が見られる。ノウルーズがイランの人々にとっていかに重要な日かは、このようなことから知れよう。そしてこのノウルーズを祝う習慣およびノウルーズを元日とする太陽暦は、農事暦としての重要性とともに、イランのみならず、中央アジア、アナトリア、コーカサスにおよぶ広い地域において歴史的に用いられてきた。現代でも、これらの地域にある国々では、ノウルーズは国民の祝日となっている。

『ノウルーズの書』について

まず、本書について簡単に紹介しよう。『ノウルーズの書』は、イラン古来の暦法であるノウルーズの縁起を語った作品である。内容は、イランの王たちが暦法としてノウルーズを定めた理由がまず説明され、ついでその暦法が歴史的にどのように展開されたのかについて語られる。その上で、古代イランの王たちのもとのノウルーズの儀礼が述べられる（浜畑 2004も参照）。本書によると、古代イラン（主にサーサーン朝が想定されている）のノウルーズの祭典では、王の御前には、ゾロアスター教の司祭によって「金」「大麦の苗」「ブドウ酒」「指輪」「剣」「弓矢」「筆」「馬」「鷹」「グラーム」がもたらされていた。本書では、これらの品々がどのような理由から王にとって必要なものと考えられたのかが、ひとつひとつ説明されている。本書の論理では、これらの品々はすべて、その「属するものの中の王」とみなされるがゆえに、帝王にふさわしいものとなる。たとえば金は熔解する鉱物の王であり、大麦は穀物の王であり、馬や鷹はそれぞれ四本足の動物と鳥類の王である。さらにグラームは、アラビア語で一般的に「男奴隷」を意味する語であるが、ここでは「見目麗しい少年」の意で用いられており、「美しいもの」を1年のはじまりに目にすることは縁起がよいとされる。このように本書は、ノウルーズの起源と、その縁起や縁起物について簡略に述べた書物であると同時に、その背景を説明するにあたって天文学や医学、鉱物学、動物学、農学、歴史学など、当時の学識を総動員した百科全書的書物ともなっている。

本書の内容について述べる前に、まずペルシア文学（イラン文学）史上における本書の意義に触れておきたい。

これまで本書はウマル・ハイヤームによって著されたと考えられてきたが、本訳注では著者は不明であるとの立場をとる（詳細は後述）。執筆者は不明であるものの、本書が著されたのは、およそセルジューク朝時代（1038-1194年）のことと想定される。執筆年の上限は、セルジューク朝の第3代君主マリクシャー（在位1072-92年）の没後であることは確実であ

る。なぜなら本書の記述のなかに、「帝王（マリクシャー）には十分な時間がなく、置閏法は完成されないままとなった」（本訳注18頁）という一文が見られ、それによって、著者の執筆時には、マリクシャーが没していたことが明らかとなるからである。執筆年の下限を定めることは困難だが、本書の記述の特徴として、モンゴル時代以降に見られるような華美な文体ではなく、きわめて簡素な文体であること、セルジューク朝に先行する王朝の逸話を多く含み、アラビア語を多用せず、アラビア語を用いる場合でも逐一ペルシア語に翻訳し、逸話を織り交ぜながら、読者にわかりやすい話を紡ぐといった、11世紀から12世紀にかけてのペルシア語およびペルシア文学の特徴をよく表していることが指摘できる。同様に、本書の中に、アッバース朝初期に作成されたと考えられる「マームーン天文表」が「今でもまだ」利用されているという一文があること（本訳注17頁）や、「我々の時代の商人」から聞いた話として、10世紀中葉に活躍したズィヤール朝のマーハーン・メフ（967年没）の名を挙げること（本訳注78頁）などは、10世紀からさほど離れていない時代の書物であることを示唆している。さらには、本書後半で「彼ら（テュルク人）こそが世界の主」との表現（本訳注76頁）があることにより、本書が執筆されたのは、13世紀のモンゴルの侵攻以前と考えることが可能となる（モンゴルによるホラズム・シャー朝の崩壊は1220年、イラン地方でのイル・ハーン朝の成立は1258年）。セルジューク朝は言うまでもなく、テュルク（トルコ）系の人々がスルターンとして君臨した時代であり、これらの点および後述する諸作品間の関連性により、本書は、マリクシャーの没年である1092年以降の比較的早い段階、11世紀末から12世紀にかけての時期に纏められたと判断される。

以上のような年代比定を踏まえ、本書ときわめて密接な関係にある書物として、セルジューク朝スルターンのアルプ・アルスラーン（在位1064-72年）とマリクシャーの宰相であったニザーム・アル＝ムルク（1092年没）が著した『統治の書 (*Siyar al-mulūk / Siyāsāt-nāma*)』が挙げられる。この書は、君主マリクシャーの要請によって、君主たる人の心得がペルシア語で書き著されたものであり、モンゴル時代以前のペルシア語散文作品の中で最も有名な

著作のひとつである。

本書『ノウルーズの書』が、この『統治の書』を参照して書かれていることに疑いはない。本訳注では、『統治の書』の記述をもとにしたとおぼしき箇所について、同書の対応する文章を脚注で紹介しているが、それらを見ても、いかに本書の著者が『統治の書』の内容を十分に理解していたかは明らかである。ところで『統治の書』は二部構成（第1部は1～39章、第2部は40～50章）になっており、その完成年はニザーム・アル＝ムルクの死の前年である1091年だと考えられている。ただし、第1部は1086年ごろには完成しており、ニザーム・アル＝ムルクはその後、当時活発化していたシーア派、特にニザール派の活動に危機感を覚え、正統イスラームの護持を主君に訴える第2部を書き足した。『ノウルーズの書』は同書の第1部のみを典拠としており、第2部の中身との関連性はまったく見られない。『ノウルーズの書』の著者にとっては第1部しか手元になかった、あるいは第1部のみが手に入る環境にあった、と考えるなら、本書が『統治の書』第1部が書かれた直後に執筆された可能性も出てくる。それと同時に、『統治の書』の第1部に描かれるような理想的君主の姿を追い求める当時の知識人層の思潮のうちに本書があったこともまた、その内容から指摘できよう。

君主の心得を述べた『統治の書』は、ヨーロッパ中世の用語法にならって「君主鑑 (mirrors for princes)」と呼ばれるジャンルに属するが、ことペルシア語によって著述されたものとしては『カーブースの書』（1080年ごろ）が先行する。本書と『カーブースの書』との間に直接の関連性は見られないが、本書の著者は、後者の書名に冠されているシャムス・アル＝マアーリー・カーブース（1012年没）の逸話をいくつか引いており、時代的には若干離れるとはいえ、シャムス・アル＝マアーリーやズィヤール朝に近い情報源を有していたことも指摘し得る。

ところで本書を「鑑文学」の一種とみなすかどうかは、一読の際には意見が分かれるかもしれない。他の同時代の書と比べ、本書には「次のことを知るがよい (be-dān ke)」という定型句はまったく見られない。また献辞も見られず、誰のために執筆されたのか、本書の中では明示されていない。しかし、『ノウルーズの書』もまた、古代の帝王たちの慣行・習慣を受け継ぐこ

との重要性を縷々語っており、ノウルーズの儀式に用いられる縁起物の品々がそれぞれ所属するものの中の「王」であるという論理からも、本書が当時の王に向けて、君主（支配者）たることの心得を説く目的で書かれたと考えることができよう。その意味では、本書もまた「君主鑑」の系譜に連なるものであり、君主のための教養・啓蒙書の一種であると言ってよいだろう。

一方、本書が後世の書物に与えた影響は、現在のところ、ほとんど確認されない。その理由として本書が、特別な暦法およびその儀礼としての「ノウルーズ」というテーマをただ扱っていること、そこにはイスラームに基づく法学や神学といった理論的要素がほとんどなく、当時としては「異教」であるゾロアスター教的世界観が展開されること、さらにはこの時代にペルシア語やアラビア語で書かれた鷹や馬の書、弓矢の書などとは異なり、実用書としての有用性が低いことなど、その内容の特異性と簡素さが挙げられる。実際、天文学上の太陽の運行や、医学・動物学など自然科学を扱った書物は種々あるが、「ノウルーズの縁起」について語った現存する書物は、あとにも先にも本書のみである。このことから本書は、ペルシア語文学史上、他に類例を見ない非常にユニークな一書なのである。

著者について

本書の著者は、これまでウマル・ハイヤーム（オマル・ハイヤーム）とされてきた。

ウマル・ハイヤームは、厭世観あふれる『四行詩集（ルバーイーヤート）』の作者として名高く、またセルジューク朝のスルターン、マリクシャーに仕え、数学や天文学の著作が多数残されている。しかし最近の研究では、詩人のハイヤームと、数学や天文学に秀でた科学者としてのハイヤームは別人と捉えられるようになった。数学や天文学に秀で、セルジューク朝のマリクシャーに要請されて天文表作成に携わり、ニザーミーの『四つの講話（*Čahār Maqāla*）』（12世紀）などに名前の挙がる人物は、正しくは、ウマル・ブン・イブラーヒーム・ハイヤミー（‘Umar b. Ibrāhīm al-Xayyāmī）という名前であり、ニーシャープール出身であった。もう1人、同時代に、詩

人として知られるウマル・ブン・アリー・ブン・ハラフ・ハイヤーム (‘Umar b. ‘Alī b. Xalaf Xayyām) という人物が存在し、若干の詩が伝えられているという。ヒジュラ暦8世紀(西暦14世紀)ごろには、このふたりの人物が同一視され、新たに「ウマル・ハイヤーム」という、詩人にして自然科学者である人物が産み出されたのだ、と近年では主張されている (Ṭabaṭabā’ī 1991参照)。

「ウマル・ハイヤーム」という名のふたりの人物がいたことが事実であるとしても、実際には本書は、実在が疑わしい詩人のハイヤームの著作でもなければ、自然科学者として実在したウマル・ハイヤミー (1048-1131年)の著作でもない。ノウルーズという「暦」に関連する著作であることから、科学者のハイヤミーの作品である可能性は否めないが (Розенфельд 1961)、翻って、本書の序文を検討するなら、この点もまた退けられる。

本書の序文を見ると、「ウマル・ハイヤーム」の名は、ベルリン写本の冒頭部にしか現れず、加えてその表現は、

賢人たる師、当世一の哲学者、学者たちの長、賢人たちの王であるウマル・ブン・イブラーヒーム・アル=ハイヤーム (‘Umar b. Ibrāhīm al-Xayyām)——彼にアッラーの慈悲があらんことを——は、次のように語っている。

思うに、私は、十全なる知においては、言葉以上に高貴なるものや気高いものは何ひとつ見出していない。なんとなれば、たとえ言葉以上に偉大なものがあつたとしても、至高なる真理(神)は、[結局]使徒——アッラーが彼を祝福されんことを——に言葉をもって語りかけられたのであるから。

というものである。これに続く文章は、

また、アラビア語では、「まことに時をともに過ごすに最良なものは書物である」と言われている。

である。このアラビア語の文言は、10世紀前半のアラブの詩人が編んだ韻文の一部である (*Dīwān al-Mutanabbī*: 319)。この文言も含め、これ以降の話を

すべて、「ウマル・ブン・イブラーヒーム・アル=ハイヤーム」が語っている内容に含めるならば、確かに本書は「ウマル・ハイヤーム」の書となろう。しかし、上述の部分で、他人の詩句であるアラビア語の内容までをも大学者である「ウマル・ハイヤーム」の言葉とすることは理にかなっておらず、加えて彼の発言は、あくまでも「言葉」の重要性を述べており、ノウルーズの重要性を語ったものではない。これらの後続く、本書執筆の動機は一人称で語られるが（全編を通じて本書では一人称が散見される）、それを含めて本書のすべてを、この「ウマル・ハイヤーム」に帰すことに妥当性があるとは言い難い。

また、後述するように、ロンドン写本は確かに不完全な写本であるものの、現存している部分についてはベルリン写本よりも文意が通り、より原本に近いと考えられる。そのロンドン写本では、上述の冒頭部はまったく現れず、「ノウルーズの真実に関する論考」とページの上端に小さく書かれているにすぎない。

本書が天文学者のウマル・ハイヤーム（ウマル・ハイヤーミー）の書ではない、と考えるさらなる理由として、本書の中で、わずか16日の差が生じている隣の地域の暦に対して「その詳細は私にはわからなかった」（本訳注18頁）と述べている箇所が挙げられる。当時の大帝国の君主から暦の作成のために招聘され、実際に新たな暦を算出した当代随一の天文学者が、隣の地方の暦法の状況がわからない、ということがあり得るのだろうか。

これらの点から、また先にも述べた「簡便である」という本書の記述の特徴から、本書の著者として天文学者であるウマル・ハイヤーム・ニーシャープリー（ウマル・ハイヤーミー）がふさわしいとは考えにくい。一方、本書の中で著者自身の名前は一度も言及されていない。それゆえ本書は著者不明の書物であるとしか言いようがないのだが、しかしながら本書はこれまで広く「ウマル・ハイヤームの書」として知られてきたため、本訳注では便宜的に「伝ウマル・ハイヤーム著」とした。

ところで本書の執筆年を考える際、上述のウマル・ハイヤームの名前のあとに、「彼にアッラーの慈悲があらんことを」という死者に対する祈祷句が

きていることから、本書が科学者ウマル・ハイヤームの没年とされる1131年以降の作品だと考えることは可能だろう。もっとも、ベルリン写本にしか現れないこの箇所（『ノウルーズの書』という書名も含めて）が、本書の実際の著者の手になると考えてのことであり、写本が2つしかない現況においては、この点についても本書の訳注者は留保する立場をとりたい。

さて、この無名の著者の学識については本書の内容から判断するしかないが、アラビア語の知識が多少なりともあり、医学や天文学をたしなんでいたことは間違いなからう。イブン・スィーナーやザカリヤー・ラーズイーなど（当然ウマル・ハイヤームも）、医者や天文学者の名前を具体的に挙げており、それらの書物を参照した形跡が見られる。また、鉱物の話や医学的知識、馬や鷹などの動物学の知識も有していたものと思われる。ただし、本書の書きぶりからわかるとおり、それらの知識は基礎的なものにとどまっており、著者が何らかの分野に秀でた超一流の学者であったとはみなし難い。むしろニザーム・アル＝ムルクの『統治の書』を詳細に参照していることから、著者はどちらかと言えば政治・行政畑の人間だったのではなかろうか。ノウルーズの祝祭を執り行うことの重要性が「帝王の務め」であるとし、さらには帝王の務めを立派に果たす意義を具体的な事例を挙げながら説くなど、本書は君主たる人物への忠告・進言に満ちている。また古今の文献学的知識を活用し、特に「書記 (kātib, dabīr)」の心得に通暁していることから、書記としての教育を受け、それにふさわしい素養を備えた人物の姿が浮かんでくる。これらの点を勘案するなら、本書はテュルク系の「新参」支配者であるセルジューク朝のスルターンたちのために、イラン・ペルシアの伝統である「帝王学」の一端を訓育するという政治的な意図をもって書かれた可能性が生じよう。

内容および時代背景について

本書の内容で重要な部分をいくつか挙げておこう。

本書では「アジャム」や「イラク」という言葉が頻出する。この中で「アジャム」は、明らかにペルシア語話者およびそれらの人々が住む地域を指

し、多くの場合はイスラーム以前のイランの帝王たちが治めた地域を指している。なかでも重要なのは、史実としてはサーサーン朝、伝説としてはピーシュダード朝やカヤーン朝から続くイランの伝統的な王たちの支配領域を「アジャム」と呼んでいることで、とりわけサーサーン朝（226-651年）のことを指し示す場合に「アジャム」という語が用いられていることには留意したい。

実在の人物として本書で名前が挙がるのは、アッバース朝のマームーン（在位813-833年）やアミーン（在位809-813年）、ターヒル朝の初代ターヒル（在位821-822年）とその息子アブドゥッラー（在位828-844/5年）、ブワイフ朝のファフル・アル=ダウラ（在位977-997年）、ズィヤール朝のマーハーン・メフ・ヴォシュマギール（在位935-967年）とシャムス・アル=マアーリー・カーブース（在位977-981, 997-1012年）、ガズナ朝のスルターン・マフムード（在位998-1030年）、といった王たちである。特に、ブワイフ朝（932-1062年）やズィヤール朝（927-1043年）、ガズナ朝（977-1187年）の君主たちはすべて10～11世紀に「アジャム」すなわち「イラン」とその周辺の領域で活躍した人物であり、その地域はイスラーム以前のサーサーン朝の領域と完全に重なり合う。

この「イラン」や「アジャム」と対比される地理的概念としては、「イラク」が挙げられる。著者の用語法から判断すると、この「イラク」は、現在のイラクとほぼ同じ地域を指しており、それはアッバース朝カリフの政治的権限が、軍人出身の大アミールらやブワイフ朝によって大きく削がれ、カリフの実効支配のおよぶ範囲がバグダードを中心とする地域に限られた時代、すなわち10世紀頃の地理的概念であると考えられる。

さまざまな点でイスラーム社会の転換期となったこの時代におけるイランもしくはペルシア的要素の顕在化については、古くから多くの指摘がある。そもそもイラン東北部のホラーサーンから始まったアッバース革命における、非アラブ系ムスリム（特にペルシア系）の役割の重要性はつとに指摘されているところである（Shaban 1970; Daniel 1979; Zakeri 1995; Pourshariati 2008など参照）。アッバース朝時代になると、当初の平等主義的イスラーム共同体（ウンマ）の理念は、拡大するイスラーム社会と、そこに内包されるこ

ととなったさまざまな人や文化伝統との接触の中で、もはや現実性を持ち得ず、一方で多様な社会的ユニットを統合し、導く統治者としてのカリフの權威は、他の一般ムスリムに対して超越的なものとなる。やがてそのカリフを取り巻く政治的支配層もまた一般民衆の上に卓越する社会階層を形成するという過程を経て、イスラーム社会は高度かつ複雑に階層化されていった (Marlow 1997; Crone 2004参照)。特に10世紀以降、ブワイフ朝やガズナ朝など、拡大したイスラーム社会へと参入した多様な人々がこの政治的支配層を構成するようになると、イスラーム的あるいはアラブ的な系譜とは無関係の統治者が世俗の支配権を握るという状況が一般化する。このような社会の現実を是認し、それを正当化するための議論の1つの柱は、彼らがいかにイスラーム的社会正義の実現に尽力しているかを示すことであり、もう1つの柱が、たとえ預言者の系譜に属さずとも、神の意志に従って公正な統治を行い、民を教導することは可能である、という主張であった。この後者の論拠として当時好んで用いられていたのが、サーサーン朝の名君として知られていたシャープール1世 (在位240-270年) やホスロウ・アヌーシルヴァーン (在位531-579年) らの逸話だった。かくして、アラブ・イスラーム的世界観の束縛を逃れ、旧来の価値や伝統に立脚するような「王権」観は徐々に市民権を得ていき、その1つの帰結として、本書のごときサーサーン朝の君主の存在や、ゾロアスター教の儀礼を前面に押し出す書物が著されたのだと考えられる。

本書が執筆された時期、イスラーム世界東方の覇者はテュルク系のセルジューク朝であり、前述のごとく本書の「馬の章」の最後に「テュルク人こそが世界の主」という表現があるのはそのことを指している。そのような状況下、セルジューク朝の君主の目に触れることをも期待して執筆された本書においては、セルジューク家が祖先とみなしていたアフラーシヤーブ王の逸話を織り込むことで、テュルク系支配者の統治の長い伝統を示し、あるいはザッハークを倒したアフアリードゥーンがその後、3人の息子に領土を分配し、それぞれがイラン、トゥーラーン、ルームを支配するようになったものの「テュルクとルームとアジャムの諸王はみなひとつの血筋から発しており」、「すべてアフアリードゥーンの子孫なのである」 (本訳注14-15

頁)と主張するなど、上に述べたような非アラブ系支配者による統治の正統性を強く意識した記述がなされている。帝王の末裔たる者は、たとえ「トゥーラーン」からやってきた「テュルク人」であろうと、イランの地を支配するにあたって古来のイランの伝統と慣習を受け継ぐ義務があり、それを果たすことによって正しい支配者たり得るのだという、著者の(あるいは当時の知識人層の)理解と主張をそこに読み取ることはまったく困難ではない。

以上のような時代背景に鑑みつつ、本書の興味深い点をいくつか挙げるとすると、1つはまず、「暦」にまつわる箇所であろう。本書では比較的详细に君主による置閏の話が述べられるが、そのことはもちろん、為政者にとっての「暦」の重要性のゆえである。特に太陽暦は農事暦として重要であり、税の徴収は「暦」に基づいて行われるのが常である。

イスラーム時代に入り、公式な暦は1年354日(または355日)の太陰暦(ヒジュラ暦)となったが、実用的な太陽暦として、イラン地方では比較的長期間にわたって、サーサーン朝末期に改定された「ヤズダゲルド暦」と呼ばれる暦が使用されていた。「ヤズダゲルド暦」はそれ以前に使用されていたゾロアスター教の世界観が反映された太陽暦を改良したもので、1年は12ヶ月、各月30日の360日に5日を足し、それぞれの月や日は、ゾロアスター教の神格の名にちなんでいとされる。過去の暦については史料間の矛盾もあり、ほとんど明らかにされていないが、11世紀のペルシア語の著作では、実際にヤズダゲルド暦が使用されている例が見られる(*Bāz-nāma*: 75)。このほか、本書にも見られるように、カリフのムタワッキル(在位847-861年)やムウタディド(在位892-902年)など、アッバース朝初期にも置閏が行われ、新しい暦が作成された。これらは地租であるハラージュ税の徴収のため、農事暦として、旧来のイランの太陽暦に置閏を加えたもので、夏至のころの「ナイルーズ(ノウルーズ)」が起点とされている(*EIr*: “CALENDARS”; Sachau (ed. & tr.) 1984: 35-39; Zanjānī 2005: 137-148)。

一方、セルジューク朝のマリクシャーの時代には、ウマル・ハイヤーミー

ら天文学者らが集められ、新たな暦が作成された。これを、マリクシャーの称号「ジャラル・アル＝ディーン」にちなみ「ジャラーリー暦」あるいは「マリキー暦」と呼んでいる。ヤズダゲルド暦からこの新たな暦に変更されたのは、ヒジュラ暦467年（西暦1075年）のことであり、その後もマリクシャーの死まで天体観測が行われたと史書は伝える (*Kāmil*, x: 98)。ジャラーリー暦は春分の日ノウルーズが元日であり、1年は365日、4年に1度の閏を置いたため、グレゴリオ暦よりも誤差は少なかった。現行のイラン太陽暦にも名称等が受け継がれるジャラーリー暦であるが、煩瑣な月日の計算や閏のため、実際にはあまり活用されなかったようである。このような暦法の歴史的経緯や内容について本書は比較的詳細に記しているが、マリクシャー時代の天文観測の話や、それが王の死で中断したと伝えられていることから（本訳注18頁）、あるいはマリクシャーの死後、停滞しかかった天体観測や暦法製作を奨励する目的が本書にはあったのかもしれない。

もう1点は「酒」に関する見解であるが、これは、本書が現代のイラン人のあいだで広く知られているという事実と深く関係している。今日のイランでは話の詳細は知らずとも、「ノウルーズ＝酒＝ウマル・ハイヤーム」という図式があり、本書はウマル・ハイヤームの著作として人口に膾炙している。詩集に見られるハイヤームの酒への姿勢と連動したそのような認識は、偏に本書に収められた「酒の発見」の逸話に依っている。

本来、イスラームでは酒を飲むことは禁忌（ハラーム）であるが、この時代のイラン地方では飲酒の習慣が途絶えることはなかった。先の『カーブースの書』で、著者は息子に向かって飲酒のたしなみについて記し（黒柳訳 1969: 48-50）、セルジューク朝末期に著された史書においても酒の効能が説かれ、「多少を飲む分には何ら害がない」といった見解が示されている (*Rāḥat al-ṣudūr*: 416-423)。本書を含め、これらの史料からは、飲酒に対して寛容であった当時の様子が偲ばれる。ちなみに、ブドウ酒が「発見」された逸話については、ほぼ同じ話がこれらの史書や百科全書に見られる。いずれも話の大筋では同じであるが、王の名については、「シャミーラーン」（本訳注 86-91頁）、「カイ・クバード」（*Rāḥat al-ṣudūr*: 423）、「ジャムシード」（守川他訳 2009: 215）と異なっており、これらに共通の情報源が存在したのか、あ

るいは民間伝承として広まっていた話なのか、現段階では判断しがたい。

もう1つ注意すべきは、本書の執筆目的が上述のごとく政治的なものであったとするなら、そこに述べられる「ノウルーズ」の儀礼は、当時の一般社会の慣習を反映したものであるとは限らない、という点である。ノウルーズの儀礼については数多くの専論が出されており（たとえば浜畑 1988）、本書もまた、その歴史的な展開を知る上では重要な材料を提供する。しかしながら、本書で述べられる儀礼は、あくまで支配者たる君主のための国家行事としての儀礼であることを忘れてはなるまい。少なくとも、本書において、現代に残るノウルーズの細かな儀礼（7つのスイーン、チャハール・シャンベ・スーリーなど）はまったく言及されていない。すなわち、本書で明らかにされるのは、理想化された、あるべき姿としてのノウルーズの儀礼であると理解し、当時の民衆文化としてのノウルーズとは一応切り離して考えるべきであろう。サーサーン朝以来の伝統を強調するあまり、そこにイスラーム的要素がほとんど組み込まれていないという点にも注目すべきである。

とはいうものの、本書にはさまざまな逸話が挿入されており、当時の社会状況の一端が窺われることもまた事実である。加えて本書そのものが、鷹や馬や鉱石や植物や酒など、幅広い知識や学識の「集大成」的書物となっており、当時の知識人の教養のあり方がそこに垣間見えるという点では、きわめて興味深いものである。

写本・校訂本について

本書の原本は現存しないが、現在までのところ、以下の2点の写本が確認されている。

- 1 ベルリン写本：Staatsbibliothek zu Berlin, Ms. or. Oct. 2450, fols. 78b-106a.
- 2 ロンドン写本：British Library, Add. 23568, fols. 86a-101b.

また校訂本として、Mujtabā Mīnovī (ed.), *Nawrūz-nāma, dar manšā' wa tāriḫ wa ādāb-i jašn-i nawrūz* (Tehran, 1933, New ed. 2002)、'Alī Ḥaṣūrī (ed.), *Nawrūz-nāma* (Tehran 2000) の2冊がある。なかでもミーノヴィー氏（以下敬

称略)の校訂本は、巻末に註釈および語句説明が載せられており、きわめて有用である。一方のハスーリー氏のテキストは、ミーノヴィー版を参考に、より簡略化されたもので、読みやすくはあるものの誤植や改竄も多く、質の面ではきわめて劣っており、扱いに注意が必要である。

本書の訳本としてはロシア語訳 (Б. А. Розенфельд (Перевод), *Трактаты*, Москва, 1961, pp. 187-224) が存在するのみである。

ベルリン写本、ロンドン写本ともに、いくつかの著作がまとめられた集成の中の一作品として『ノウルーズの書』が収められている。書写年代はそれぞれ767/1366年、892/1487年である。ベルリン写本については、そのファクシミリ版がロシア語訳とともに出版されているので (Розенфельд 1961: 118-173)、ここでは主にロンドン写本について解説しよう。

British Library 所蔵の Add. 23568 写本は、全体で102葉、17センチ×12センチのさほど大きくはない写本である。書写年代はヒジュラ暦889-894年 (西暦1484-1489年) であり、黒と赤のインクを使用した、あまり流麗ではないナスターリーク体で書かれている。

この写本には、1) 『暦の学知に対する詳細な註釈 (*Šarḥ-i muxtaṣar dar Ma'rifat-i taqwīm*)』: ナスィール・アル=ディーン・トゥースィーの論文に対する註釈、2) 『天変地異の諸因 (*Uṣūl al-malāḥim*)』: 日月食や嵐などの自然現象に関する論考、3) 『占星術の贈り物 (*Hidāyat al-nujūm*)』: 天文学の手引書、4) 『占星術師たちの園 (*Rawḍat al-munajjimīn*)』: 天文学用語の問答集の抜粋、そして最後に5) 『ノウルーズの真実に関する論考 (*Risāla dar taḥqīq-i Nawrūz*)』が収められている (Rieu 1879-83, ii: 852-853)。写本の全容を見てもわかるとおり、Add. 23568 写本は天文学に関する著作を集めたものであり、5冊の小品を書き写した年代は、15世紀後半の5年間にわたっている。この中で、『ノウルーズの書』と同様の内容をもつ『ノウルーズの真実に関する論考』は、892/1487年に書写されており、86葉表面から101葉裏面にわたる同写本の最後の論考となっている (もっとも、写本末尾の次のページには1枚の天文表が載せられている)。

体裁の面から見れば、ロンドン写本は、途中で書写が放棄された不完全な写本であり、一部に錯簡も見られる。写本の字体も良質とはいえず、特に同写本の最後の部分にあたる「弓矢」の章では、内容が難解なゆえであろう、文字の乱れが甚だしい。想像を逞しくするなら、この内容の難解さがコピーストをしてそれ以上の書写を放棄させた原因といえるのかもしれない。天文学の専門書を中心に写本を編んでいたコピーストにとって、天文学にとどまらない本書の内容が想定外だった可能性もあろう。写本の最終部分の乱雑さやミスの多さは、コピーストの気力の減退を示しているとも見ていい。書き物の途中にもかかわらず、紙の裏面の終盤で筆を擱く唐突な終わり方もまた、そのような想像を裏付けそうである。

これに対してベルリン写本は写真版が刊行されており、ミーノヴィーが底本として校訂していることから、これまで主に参照されてきた写本である。同写本は首尾を欠かない完全な写本であり、その価値は確かに優れている。しかしながら、ベルリン写本からのみでは、理解しがたい部分や単語の判読が不明な部分も多々存在する。特に、ノウルーズの起源を説明するにあたって太陽や星の運行について述べられた部分や「弓矢」の章は、かなりの範囲で文章が破綻している。興味深いことにそのような箇所についてはロンドン写本の方により文意の通る明快な文章が記されており、ベルリン写本に欠けている語句も現れる。

また、本文の章立ても両写本では異なっている。すなわち、ベルリン写本では、「序」「はじまり」「帝王の慣習」「祝賀」「金」「指輪」「大麦」「剣」「弓矢」「筆」「馬」「鷹」「ブドウ酒」「美しい顔」の順であるが、一方のロンドン写本は、「序」にあたる部分はなく、「はじまり」「帝王の慣習」「祝賀」「金」「大麦」「ブドウ酒」「指輪」「剣」「弓矢」そして最後に数行だけの「筆」の章で終わる。本書の中で、ノウルーズの祭典で王の御前に用意され、それぞれの縁起物にちなんだ祝祷が述べられる順序（本訳注28-29頁）を勘案するなら、大麦とブドウ酒は逆かもしれないが、実はロンドン写本の章立てのほうが祝祷により忠実である。以上の点から、よりオリジナルの構成に近く、原本のあり様をとどめている可能性があるロンドン写本には独自の価値があると判断し、本訳注においては、巻末に改め

てロンドン写本の校訂を付した。同写本の校訂では、敢えてベルリン写本との異同を示さず、ロンドン写本の原型をとどめる方針を採っている。

今回の訳注作成にあたっては、ミーノヴィーの校訂本を底本とした。しかしミーノヴィーは、ほぼベルリン写本のみに基づいて校訂しているため（ロンドン写本を見ている形跡もあるが、その影響は限定的である）、ベルリン写本自体に含まれる文意が曖昧な部分や不明瞭な部分を克服しきれていない。ミーノヴィー自身もまた、多くの疑問符を校訂本の中に残しており、イランの誇る碩学をもってしても、ベルリン写本に基づくのみでは読解困難な書物であることがわかる。一方ロンドン写本は前述のごとく不完全な写本ではあるが、内容的に優れている部分も多く看取できる。そこで本訳注では、ミーノヴィー校訂本、ひいてはベルリン写本そのものの欠を補うためにロンドン写本を参照し、両写本を対校することによって、より完成度の高いテキストを構築し、内容を理解し得る書物として供することを目指した。ただし、写本間で語句が異なっていたとしても、文意において大差のない場合には煩瑣になるのを避けるため、ミーノヴィー校訂本を優先し、ロンドン写本の訳出はしていない。字句の面では、ともに不十分な写本が2つ残されているだけという現状においては、今回の訳注や校訂もまた十分ではないかもしれない。その点については今後新たな写本が発見されることを大いに期待するとともに、大方のご批評を仰ぎたい。

本訳注の作成にあたっては、山本啓二先生（京都産業大学）、杉田英明先生（東京大学）、春田晴郎先生（東海大学）より、それぞれ貴重な御教示をいただいた。末筆ながら記して謝意を表する。言うまでもなく本訳注中に見出されうるいかなる誤りについても、その責任は訳者両名にある。

第一部

『ノウルーズの書』訳注

【訳注凡例】

- 訳文中に〈〉内に示される数字はミーノヴィーの校訂本の頁数、《》内の数字はロンドン写本の葉数を示す。
- 訳文中に〔〕で示されるのは、ミーノヴィーの校訂本にはないが、ロンドン写本から補った部分である。
- 訳文中に[]で示されるのは、日本語訳の意味を通じさせるために訳者が補った部分である。
- 訳文注の（）内は、固有名詞の原綴、直前の語句の意味説明、参照文献の頁数などを含む。なお、「（アラビア語）」「（ペルシア語）」と注記されている箇所は、原著者がまずアラビア語で文章を記し、それにペルシア語の訳をつけている箇所である。

〈1〉《86b》慈悲深く慈愛あまねきアッラーの御名において

神 —— その栄光がいや増さんことを —— に感謝と賞賛あれ！ [神は] 世界の創造者にして、大地と時間を保つお方である。また、生きものたちに糧を与えしお方にして、明らかなりしことも隠されしことも知るお方である。神は、比類なく、比肩するものもなく、誰の命令をも受けず、何かを必要とすることもなく、推し量ることも数え上げることもできない唯一のお方であり、全能にして、援助者や助力を必要とはしないお方である。

清浄なるアードム (Ādam-i ṣāfi) からアラブの預言者ムハンマド・ムスタファー (Muḥammad Muṣṭafā) にいたる神の預言者たち —— アッラーが彼らすべてを祝福されんことを —— と、彼の子孫、教友、選ばれし者たちに祝福あれ。

賢人たる師、当世一の哲学者、学者たちの長、賢人たちの王であるウマル・ブン・イブラーヒーム・アル=ハイヤーム (‘Umar b. Ibrāhīm al-Xayyām) —— 彼にアッラーの慈悲があらんことを —— は、次のように語っている。

思うに、私は、十全なる知においては、言葉以上に高貴なるものや気高いものは何ひとつ見出していない。なんとなれば、たとえ言葉以上に偉大なものがあつたとしても、至高なる真理（神）は、[結局] 使徒——アッラーが彼を祝福されんことを——に言葉をもって語りかけられたのであるから。

また、アラビア語では、（アラビア語）「まことに、時をともに過ごすに

最良なものは書物である¹」と言われている。

私とつきあいがあり、この上なく誠実なある友人は、「ノウルーズを定めた理由は何であったのか、またどの帝王が定めたのか」ということについて「教えるよう」私に求めてきた。私は彼の求めに応じて、この小稿をまとめたのである。そのお方（神）—— その栄光のいや増さんことを——の恩寵によって²。

¹ アラブの詩人ムタナッビー (Abū Ṭayyib al-Mutanabbī 915-965年)の言葉。対句の下で、上の句は「世界中で最も素晴らしいのは早駆けの馬の鞍」である (*Dīwān al-Mutanabbī*: 319参照)。

² 神や預言者への賛美に始まり、本書の序文となるこの箇所はベルリン写本にのみ記され、ロンドン写本ではまったく現れない。ロンドン写本の書き出しは次のようになっている。「ノウルーズの真実に関する論考。慈悲深き慈愛あまねきアッラーの御名において。唯一性はアッラーにあり。そのお方のみに助力を乞う。これは、ノウルーズの真実の発見について記された書物である。それがアジャムの王たちのもとでどの日にあたり（以下次章に続く）」。

この書物では、ノウルーズの真実をつまびらかにする中で、それがアジャムの王たちのもとで、どの日にあたり、どの帝王によって定められ、〔どのようなものであったのか、〕またなぜ重視されたのか、といった点、および諸事における帝王たちの慣習や〔慣行や〕所作が簡略に述べられる。至高なるアッラーが望みたまうならば。

さて、ノウルーズを定めた理由は次のとおりである。人々は、太陽に2つの周期があることを知っていた。1つは、365日と4分の1日ごとに〔太陽が〕おひつじ宮の最初の度数に戻ってくるものである。〔そのときを、「新しい日 (naw rūz)」や「新しい年 (naw sāl)」と呼んでいる。もう1つは、1461年ごとに最初の度数に戻ることである³。〕まさにそれだけの時間と日数が過ぎないことには、〔太陽は〕この最初の度数に戻ることはできない。なぜなら毎年〔1年の日数は、実際経過した〕時間よりも〔4分の1日分〕短くなるからである。ジャムシード (Jamšīd)⁴はこの日〔の特性〕に気づき、「ノウルーズ (新しい日)」と名づけて祝祭を設けた。その後、帝王たちや

³ エジプトの民衆暦では、30日ごとの1ヵ月が12回ある360日に、5日を加えた365日を1年とするが、元来はナイル川の増水期、日の出直前にシリウスが東天に現れるとき（ヘリアカル・ライジング）を暦の最初としたことに起源する。これはおおそ夏至の時期にあたる。1年を365日と固定する暦では、太陽暦（365.25日）との差である4分の1日分だけ、新年の日が実際の太陽の運行より早くなるが、その差は1460年で365日（すなわち1年分）となる（ $1460 \times 365.25 = 1461 \times 365$ ）。暦と実際の太陽の運行が一巡りして一致するまでの期間は「ソティス（シリウス）周期」と呼ばれるが、本書において、1461年目に「大周期」が一巡りするとしているのも同じ考えに基づいていると思われる。

⁴ イランの伝説時代であるピーシュダード朝の王。もともとは『アヴェスター』に現れる「ヤマ (Yima)」が起源とされる。本書においてものちに言及されるが、イランでは多くの事物の起源がこのジャムシードに帰せられる。その統治年数については諸説ある (El; "JAMŠĪD")。

他の人々は彼に倣った。

その次第は次のようなものである。

アジャムの最初の王であるガユーマルス (Gayūmart)⁵は玉座についたとき、人々が理解できるように、1年の〔それぞれの〕日や〔年や〕月に名前をつけ、暦をつくろうと考えた⁶。彼はその日（ノウルーズ）の夜明けに太陽がおひつじ宮の最初の度数に入ったことを観て取ると、アジャムのモウベド (mawbid) たち⁷を呼び集め、〔暦をつくるよう〕命じた。〔アジャムのモウベドたちは、これらの日と月に12の名前をつけ、〕その日を暦の起点とした〔とされている〕。モウベドたちは〔みな〕集まり、暦を定めた。

⁸当時の識者であったアジャムのモウベドたちは次のように言っている。
「祝福を与えてくださる至高なる神は、12人の天使を〈3〉お創りになった。
そのうちの4人を天に配し、天とそこにあるすべてのものを悪魔たち
(ahrimanān) から守らせ、また4人の天使を大地の四隅に配し、悪魔たちが
〔大地を取り囲む〕カーフの山 (kūh-i Qāf)⁹を越えて〔大地に〕入り込まない

⁵ ガユーマルス（＜ガヨーマルト：原意は「話す人」）はイランの伝説の最初の人類であり、最初の王とされる。彼は「原始の牡牛」とともに、神によって創造された (*EIr*, “GAYŌMART”)。

⁶ ロンドン写本はこの箇所（86葉b11行目：本書巻末テキスト1頁の#）で文章の順序が入れ替わっており、「人々がそれを知ることができるように。（#）得た (yāft)。彼らは印をつけた。そしてみなそれぞれ（ノウルーズ）を知り、その暦を大切にしよう、世界中の人々に知らしめた」とつづき、ガユーマルスが365日を12等分し、月名を定めたこと、それら12ヵ月の月名の話と、ガユーマルス、フーシャング、タフムーラスの時代について述べられ、87葉b15行目（巻末テキスト4頁の#）の「ボザスプが彼の時代に現れ、サービア教徒の教えをもたらした。彼（タフムーラス）はその教えを受け入れ、腰帯を締め、太陽を崇拝し、（#）人々に注意を払った。その日〔一語分空白あり〕夜明けに、太陽がおひつじ宮の最初の度数に入ると、アジャムのモウベドたちを集め、暦をつくるよう命じた」という箇所にいる。おそらくは写本原本の段階で錯簡があったのだろう。

⁷ ゴロアスター教の祭司。

⁸ ロンドン写本ではこの文章が87葉bの途中（巻末テキスト4頁）から始まっている。

⁹ 著名な地理学者のヤークート（1229年没）によると、「カーフ」は世界をぐるっと周回する山脈の名前。イラン的世界観からイスラーム的な世界論に取り入れられたものらしく、ヤークートはこの山がかつては「アルブルズ」と呼ばれたと記している。

よう、見張らせている」と。さらに、「〔別の〕4人の天使に〔命じて〕天と地を巡回させ、悪魔たちを被造物から遠ざけている」と言う。

また彼らは、「この世界は、古い館の中に建てられた新しい建物のように、あの世界の中に存在する」と言っている。

至高なる神は〔自らの〕光から太陽を創り《88a》、太陽によって諸々の天と諸々の大地を〔明るく照らし、植物を〕育んだ。大地に住む者たちは、至高なる神の光の1つである太陽に目を向け、畏敬と尊崇をもって太陽を見つめる。なぜなら、至高なる神は、太陽の創造において他に比類なき恩恵を施しているからである。それはたとえば、ある偉大な王が、自らの代官の1人に、人々が彼（代官）を敬い、彼の徳の本質を知るようにせよ、と指示するがごときである。そうすれば代官を敬う者はみな、王を敬うようになる。

さて、次のように言われている。祝福をお与えになる至高なる神が、〔太陽に〕停止状態から運動を始め、〔「おまえに施した恵みがすべてのものに達するように」とお命じになり、さらに偉大なる天に、「太陽をめぐらせ、〕その輝きと恵みがすべてのものに達するように」とお命じになると、太陽はおひつじ宮の初点から移動し、天は太陽をめぐらせ、光から〔夜の〕闇が分離し、夜と昼が現れた。これこそがこの世界の暦の起点となった。

その後、1461年目に〔太陽は〕同じ〈4〉度数に同じ日に戻ってきた。その間には、「小合 (qirān-i ašgar)」と呼ばれる土星と木星の合が72回生じる¹⁰。この合は20年ごとに1度起きる。太陽が自らの周期（1460年）を終え、この場所（おひつじ宮）に達し、土星と木星が、土星の最低星位 (hubūt) があるところのその宮（おひつじ宮）で合となり——〔ちなみにその宮は〕土星〔の最高星位〕があるところのてんびん宮と正対し、〔その間、小合は〕あ

↘ (Mu'jam al-buldān, vi: 298; EF: "KĀF")。なお、「アルブルズ（アルボルズ）」は現在のイラン・イスラーム共和国にあり、中東一帯での最高峰ダマールヴァンド山（標高5610メートル）を擁する山脈の名前である。

¹⁰ ロンドン写本に従い72回とする。ベルリン写本では「70回」となっているが、ミーノヴィーは「3」を補い、「73回」としている。「合 (conjunction)」は、2つの惑星が近接して同じ宮にある状態をいう。

る周期ではこの宮で、別の周期ではあの宮で¹¹、というように、星々の配置を示してすでに説明したような順序で起こる¹²——、そして太陽がおひつじ宮の初点から出発するとき、土星と木星も他の星とともにその宮にある¹³、そのような状態のときはいつも、至高なる神の命により、世界の状況は一変し、何か新しいものが、たとえば世界やその運命にふさわしいようなものが現れた¹⁴。アジャムの王たちはその時点〔の特性〕を理解したので、太陽を敬うた

¹¹ 土星は約30年で天球を1周し、木星は約12年で1周する。1年間では土星は12度、木星は30度移動する。すなわち、20年間に土星が天球を $20/30=2/3$ 移動したところで、木星は天球を $20/12=1+2/3$ 周回して追いつく。おそらくここでは、土星と木星の小合が、最初はおひつじ宮、しし宮、いて宮の順に火の三角宮で起こるが、それが徐々にずれ、240年で別の三角宮（おうし宮、おとめ宮、やぎ宮）で起きることを指すと考えられる (*Historical Astrology*, ii: 582-584)。960年経つと、最初のおひつじ宮で合が起こることになる。ちなみに「三角宮」とは、黄道十二宮を、120度ずつ離れた3つの宮ごとに組にしたものであり、おひつじ宮、しし宮、いて宮は火、おうし宮、おとめ宮、やぎ宮は土、ふたご宮、てんびん宮、みずがめ宮は風、かに宮、さそり宮、うお宮は水の属性をそれぞれ持つ。

¹² オリジナルのテキストには、黄道十二宮や惑星の配置を示した天宮図（ホロスコープ）があったのかもしれない。いずれにせよこの部分には、記述の欠落および錯簡があると考えられるため、文意は曖昧である (Minovi 2002: 80-81参照)。ロンドン写本にはこの箇所は含まれておらず、全体的に簡潔で、「その後、1461年目に〔太陽は〕同じ度数に同じ日に戻ってきた。その間、「小合 (qirān-i šuġrā)」と呼ばれる土星と木星の合が72回起こるが、この合は20年に1度起きる。そして、太陽がめぐってこの場所（おひつじ宮）に達し、土星と木星がその場所にあり、それらがその場所から動き始めるときにはいつも、至高なる神の命により、世界の状況は一変し、それに応じて世界に変化が生じるがごとくに、新しいものが現れた」となっている。

¹³ 土星と木星がおひつじ宮で合となるときに、太陽がおひつじ宮の初点に入るのは、960年に4～5回生じる。ここでは1461年周期との関係はあまりない。

¹⁴ 土星と木星の合は約960年で一巡し（＝「大合」）、再びおひつじ宮に戻る。このとき新しい預言者が現れる。また、合が1つの三角宮から次の三角宮へ移るとき（240年＝「中合」）には、王朝の交代がある。各合のたび（20年ごと＝「小合」）には世界に何らかの変化があるとされる。イブン・ハルドゥーンによると、「大合は王権・王朝の交代とか、王権がある一族から他の一族へ移るなど、大事件を意味する。中合は至上権や王権を求める人物の出現を示し、小合は叛乱や宣教者の出現とか都市やその文明の崩壊を示す」（森本訳 1979-87, ii: 677）。

めに、また人々がこの日〔の特性〕を知り得なかったために¹⁵、〔この日にノウルーズという〕印をつけ、この日のための祝祭を設け、世界中の人々に知らしめた。みながそれを理解し、その暦を大切にするように、と。

次のように言われている。ガユーマルスがこの日を暦のはじまりと定めたとき、毎年365日〔と4分の1昼夜ちょうど〕で太陽は1周するが、〔この4分の1日分を残し、月の周期にあわせて、365日を〕12に分割し、各月を30日とした。そしてそれぞれ〔の月〕に、祝福を与えられる至高なる神が世界に遣わされた12人の天使ひとりひとりに〈5〉関連した名前をつけた¹⁶。さらに、365日と4分の1昼夜からなる〔「小年 (sāl-i xurd)」にあわせて、〕「大周期 (dawr-i buzurg)」を〔365年と4分の1年ずつ〕4つに分け、それを「大年 (sāl-i buzurg)」と名づけた。この「大年」が4回過ぎると¹⁷、「大ノウルーズ (nawrūz-i buzurg)」がやってきて、世界の状況は新たなものとなる。

帝王は、〔過去の〕王たちの規範や慣例を実行することが義務とされている。〔それは〕祝福のためであり、暦のためであり、年始を慶ぶためである。〔識者たちは言う。〕「ノウルーズの日に祝祭を行って慶賀する者はみ

¹⁵ 87葉b15行目にはじまるロンドン写本の錯簡（注6参照）はこの箇所（88葉a15行目）までで、ここで86葉b11行目の文章につながる。同写本では本文中の上の文章に、「書記術を教えた。彼を「ディーヴを縛るタフムーラス」と呼んだ」とつづく。

¹⁶ 現在の知見によれば、イラン暦の各月はゾロアスター教の世界観を反映し、それぞれ古代イランの神の名に由来するとされる。すなわち、ファルヴァルディーニ<フラワシ（守護霊）、アルディーベヘシュト<アシャ・ワヒシュタ（最上の正義）、ホルダード<ハルワタート（健全）、ティール<ティシュトリア、モルダード<アムルタート（不死）、シャフリーヴァル<フシャスラ・ワルヤ（望ましい統治）、メフル<ミスラ（太陽神）、アーバーン<アパム、アーズウル<アースル、デイ<ダスシュ（=アフラ・マズダー）、バフマン<ウォフ・マナフ（良心）、エスファンダール・マズ<スプンタ・アールマティ（聖なる信心）、である。そのうちの、アシャ・ワヒシュタ、ハルワタート、アムルタート、フシャスラ・ワルヤ、ウォフ・マナフ、スプンタ・アールマティは、「アムシャ・スプンタ（聖なる不死）」と呼ばれる6柱である。なお、ゾロアスター教徒のカレンダーでは、月名のみならず、それぞれの日にも神や天使にちなんだ名前がつけられている（ボイス 1983: 101-107参照）。

¹⁷ 要するに、365日に固定された暦上のノウルーズと太陽暦のノウルーズが一致する1461年目のこと。注3も参照。

な、次のノウルーズまでの間を喜びと楽しみのうちに《87a》過ごせるのだ」と。そしてこれは、賢人たちが帝王のために「連綿と」実践してきたことである。

ファルヴァルディーン月。〔「ファルヴァルディーン (Farwardīn)」は〕パフラヴィー語¹⁸であり、その意味は、この月に植物の生長が始まる、ということである。この月、〔太陽は〕おひつじ宮にあり、ひと月のあいだ、太陽はこの宮にある。

アルドベヘシュト月。「アルドベヘシュト (Ardbihišt)」月〔は、「アルドヴァヘシュト (Ardwahišt)」〕と名づけられた。すなわちこの月は、世界が慶びのただなかにあつて楽園のようである、という意味である。「アルド」はパフラヴィー語で「～のような」を意味する。〔「ヴァヘシュト (wahišt)」は「楽園 (bihišt)」のことである。〕この月、太陽はちょうどおうし宮にあり、春の盛りである¹⁹。

ホルダード月。〔「ホルダード (Xurdād)」月は、「食べ物がある (xur-dār)」と名づけられた。〕すなわち、小麦、大麦、果実といった食物が人々の手にわたる月、という意味である。この月、太陽はふたご宮にある。

ティール月。この月を「ティール (Tīr)」月と呼ぶのは、この月に大麦、小

¹⁸ 中期イラン語。サーサーン朝期(226年-651年)におもに用いられた。パフラヴィー語に基づくと著者が述べる本書での12の月名の意味を、校訂者のミーノヴィーは「俗語的なこじつけ」としているが(Minovi 2002: 81-82)、これらの月の呼び名は現代のものとほとんど変わらない。現在のイラン太陽暦の月の呼び名は、ファルヴァルディーン月(3月21日～4月20日)、オルディーベヘシュト月(4月21日～5月21日)、ホルダード月(5月22日～6月21日)、ティール月(6月22日～7月22日)、モルダード月(7月23日～8月22日)、シャフリーヴァル月(8月23日～9月22日)、メフル月(9月23日～10月22日)、アーバーン月(10月23日～11月21日)、アーザル月(11月22日～12月21日)、デイ月(12月22日～1月20日)、バフマン月(1月21日～2月19日)、エスファンド月(2月20日～3月20日)である。なお、イランの月名の由来やそれぞれの月に行われる祝祭についてはビールーニーが詳細に伝えているが、由来については本書と全く合致しない(Sachau (tr.&ed.) 1984: 199-219参照)。

¹⁹ 原語は“miyāna-yi bahār”。現代のイランでも、1年は3ヵ月ごとに春・夏・秋・冬の四季に分たれ、それぞれ「春の最初の月」「春の真ん中の月」「春の最後の月」という言い方がある。

麦、その他の〈6〉ものを〔矢 (tīr) のように〕分配するからである。また太陽は〔空中に放たれた矢のように、〕最も高い〔夏至の〕地点を過ぎ、高度を下げ始める。この月、太陽はかに宮にある。夏の季節の最初の月である。

モルダード月。〔「モルド (murd)」は、パフラヴィー語で「土」にあたる。この月は「モルダード (Murdād)」と名づけられた。〕すなわち土が、持てる力をすべて出し、〔青菜や〕熟した果物を完熟させる、ということである。また、空気は土埃のように〔もやがかかった状態に〕なる²⁰。この月は夏の盛りで、太陽は、その周期上の区分ではしし宮にある。

シャフリーヴァル月。この月は、〔「帝王たちの手だて (rīw-i šāhān)」という意味により、〕「シャフリーヴァル (Šahrīwar)」月と呼ばれている。すなわち帝王の歳入がこの月にあるからであり、〔彼らは穀物の10分の1をこの月に徴収する。〕農夫たちにとっては、この月は税を支払いやすい。太陽はこの月、おとめ宮にある。夏の終わりである。

メフル月。この月を「メフル (Mihr)」月と呼ぶのは、人々がたがいにもてなし (mihrabānī) をするからである。稔った穀物や果実を〔たがいに〕分配し、与え、ともに食す。太陽はこの月、てんびん宮にある。秋のはじまりである。

アーバーン月。〔次のような理由でこの月を「アーバーン (Ābān)」月と呼んでいる。〕すなわち、この月には、降り始める雨によって「水 (āb)」のかさが増えるようになり、人々は耕作のために〔畑に〕水をひく。〔この月は秋の盛りで、〕太陽はさそり宮にある。

アーザル月。パフラヴィー語で「アーザル (Āzar)」は「火 (ātaš)」のことである。この月には空気は冷たくなり、火が必要となる。すなわち、火の月である。太陽の巡りはこの月〈7〉いて宮にある。

《87b》デイ月。パフラヴィー語で「デイ (Day)」は「ディーヴ (悪鬼)」にあたる。この月をデイと呼ぶのは、厳しい〔気候の〕ときで、大地は慶び²¹には

²⁰ ロンドン写本は、「空気は埃のために土のようになる」である。

²¹ ミーノヴィーの校訂本（以下「校訂本」と呼ぶ）では「慶び (xurramī)」だが、ロンドン写本では「収獲 (xarman)」。

ほど遠い状態にあるからである。〔人々はこの月、火を焚いた家の中や暗がりの中で、まるでディーヴのようにしている。〕太陽はやぎ宮にあり、冬のはじまりである。

バフマン月。〔「バフマン (Bahman)」とは〕すなわち、「同じ状態に (bahamān) ある」を意味する。デイ月と同様に、〔空気は〕冷たく、乾燥しており、〔人々は〕片隅にひきこもっている。またこの月、太陽は土星の家であるところのみずがめ宮にある。〔ちなみに〕それはやぎ宮に隣接している。

エスファンダール・マズ月。この月を「エスファンダール・マズ (Isfandār-mad)」と呼ぶのは、「エスファンド (isfand)」がパフラヴィー語で「果物」を意味し、この月には、果物や植物が芽吹き始めるからである。太陽の巡りは、最後の宮であるうお宮にいたる。

さて、ガユーマルス〔・シャー〕はこの期間をこのように12に分割し、暦をつくり出した。彼はその後、40年間生きた。

彼が世を去ると、フーシャング (Hūšang)〔・シャー〕が彼のあとを継ぎ、970年間王権を行使した。ディーヴたちを押さえつけ、鍛冶と大工と〔絹〕織物の技術をもたらし、ハチからは蜂蜜を、また繭からは絹を取り出した。世〔の人々〕は慶びのうちに時を過ごし、〔彼は〕名声を残してこの世を去った。

彼のあとには、タフムーラス (Ṭahmūrāt)〔・シャー〕が就き、30年間王権を担い、ディーヴたちを服従〈8〉させた。彼はバーザールや街路を造り、絹や羊毛を織った。ボザस्प (Buzasp)²²の僧侶たちは彼の時代に現れ、サービア教徒たち (šābi'ān)²³の教えをもたらしした。〔タフムーラスは〕この教えを受け

²² ボザस्प (Buzasp あるいは Būdāsf) は、「菩薩」を意味する中世ペルシア語 “bōdāsp” に由来する形である。サンスクリット語の “bodhisattva” がイラン系言語の中でどのように変化して伝えられたかについては、Elr: “BODHISATTVA”および吉田 2007 を参照のこと。アラビア語文献中でのこの語の使用と、伝承の形成については、Elr: “BILAWAHAR WA-YŪDĀSAF” も参考になる。

²³ イラクのハッラーンを中心に活動した星辰崇拜者たち。クルアーンには啓典の民としてその名が現れる。9～10世紀ごろには、天文学者などを輩出し、アッバース朝下で科学の分野で貢献した。ボザस्पがサービア教徒の信仰をもたらしたり、あるいはそのノ

入れ、〔異教徒と区別するための〕帯 (zunnār) を締め、太陽を崇めた。また、人々に²⁴読み書きを教えた。〔人々は〕彼のことを、「ディーヴを縛るタフムーラス (Ṭahmūrāt-i dīw-band)」と呼んだ。

彼の死後、帝王権は彼の弟のジャムシードに渡った。あの〔ガユーマルス〔が暦を定めた〕〕時から1040年が過ぎており²⁵、太陽は〔1年のはじまりに〕ファルヴァルディーニ〔月〕の第1日目に移ったが、〔黄道上は〕9番目の宮（かに宮）に来ていた²⁶。

ジャムシードの統治が421年経ったとき、この〔大〕周期はひと巡りした²⁷。太陽は、ちょうどファルヴァルディーニ〔月〕に、おひつじ宮の初点に戻ってきた。世界は彼のもとで秩序を取り戻した。〔ジャムシードは〕ディーヴたちを服従させると、浴場を造り²⁸、錦を織るよう命じた。これ以前には「錦 (dībā)」のことを「ディーヴ織 (dīw-bāft)」と呼んでいた。しかるに人間は、知性と経験と時を積み重ね、今あるような段階にまで達したのである。さらに〔ジャムシードは〕、〔ロバや馬やラバを実用にしたが、〕ロバを馬にかけあわせてラバを生み出し、鉾山からは宝石をもたらした。武器や

＼内容が太陽崇拜であったりすることについては、事実と反するものの、タフムーラスの時代にボザスプが現れ、サービア信仰を広めたことについては、タバリー（「ビーヴァラースフ」となっている）やマスウディー、フワーリズミー等、初期イスラーム時代のアラビア語文獻に頻繁に見られる (Ṭabarī, i: 172; Rosenthal (tr.) 1989: 345; Murūj al-dahab, i: 263; Maḥāṣin al-ʿulūm: 6)。

²⁴ ロンドン写本はここから1ページにわたって別の文章が入り込んでいる。この錯簡箇所
の終わりは88葉a15行目（巻末テキスト5頁の##）。注6参照。

²⁵ ガユーマルス 40年＋フーシャング 970年＋タフムーラス 30年＝1040年となる。

²⁶ ジャムシード以前の王たちの時代には、4分の1日分の差を解消する閏年や閏日が設けられていなかったために暦がずれ、ジャムシードの時代には暦の新年が実際の春分より時間上はおよそ9ヵ月（空間上は、新年のときの太陽の位置が黄道上の十二宮の順番とは逆方向に）進んでいたことを示す。計算では、その差は1/4（日）×1040（年）＝260（日）となる。カユーマルス時代の大周期のはじまりを、太陽がおひつじ宮に入る「春分の日」（3月21日ごろ）とすると、そこから260日前倒しにずれて、7月1日前後のかに宮に太陽があったことになる。

²⁷ 1040＋421＝1461年。ガユーマルスの暦制定から「大周期」の一周期が終わる。

²⁸ 校訂本は「浴場 (garmāba)」だが、ロンドン写本は「白綿布 (karbās)」。

装飾品はすべて彼がつくり、《88b》金、銀、銅、錫、鉛を鋳床から取り出して、〔金の〕玉座、王冠、腕飾り、首飾り、指輪をつくった。麝香、龍涎香、樟腦、サフラン、沈香、その他の香料も、彼が手に入れた。その後、〔即位後421年が経ち、太陽がひと巡りした〕前述の日に祝祭を設け、その日を「ノウルーズ」と名づけた。そして人々に、毎年ファルヴァルディーンが来るたびに、その日を祝うよう、またそれが〈9〉「新たな日 (rūz-i naw)」であることを知るように命じた。大周期が満了し、「真のノウルーズ (nawrūz-i ḥaqīqat)²⁹」が来るときまで。

さてジャムシード〔・シャー〕は、治世の最初の頃は、非常に公正〔寛大〕で、神を畏れ、〔〔神に〕祝福された〕帝王であつた。世の人々は彼を慕い、彼の〔統治の〕もとで慶び〔と活気〕にあふれていた。至高なる神は、彼に光輪 (farr)³⁰ と英知を授けられたので、彼は〔上述のような〕さまざまなものを生み出し、金や宝石や錦や香料や家畜でもって、〔世界や〕世の人々を飾り立てたのであつた。〔しかし、〕彼の統治が400年あまりを過ぎると、ディーヴがつけ入る隙を見出し、現世の快樂へと彼の〔目と〕心を誘った。現世の快樂が人の心を惑わしませんように！〔ジャムシードは〕高慢になり、尊大に振る舞い、悪しき行いを常とし、人々の財産を奪って富を蓄え始めるようになった。人々は彼によって苦しめられ、〔そのため〕昼夜を問わず、至高なる神に彼の王権の終焉を願うようになった。〔そしてついに〕神〔から授けられていた〕あの光輪は彼から離れた。彼の施策はすべてうまくいかなかった。「ザッハーク (Ḍaḥḥāk)」とも呼ばれるビーヴァラーズ (Bīwarāsp)³¹が現れ出て、ジャムシードを攻撃し、〔王位から追い落とし

²⁹ 先に見た「大ノウルーズ」のこと。

³⁰ ここで「光輪」と訳出した語“farr”は、サーサーン朝期には“farrah (xwarrah)”と呼ばれ、「栄光」「霊的な力」などの意味をもつ (*Et*: “FARR(AH)”)。ゾロアスター教の概念を強く反映した古代イランでは、帝王たる人物には神から「光輪」が授けられた。帝王伝では、「ファッル」が授けられることによって、支配者として王は即位し、また高慢さや神への背信ゆえに「ファッル」が消えると、その王は退位を余儀なくされた。王に授けられる「ファッル」のモチーフは、イランのナクシュ・ロスタムやターケ・ボスターンにあるサーサーン朝期のレリーフにも見られる。

³¹ イランの伝説時代であるビーシュダード朝の王。フェルドウスィーの『王の書』に見られるように、両肩からヘビをはやした異様な出で立ちの暴君として知られる。

た。〕人々は彼に苛まされていたので、彼を助けはしなかった。〔ジャムシードは〕ヒンドウスターン (Hindustān) の地へ逃げ、ビーヴァラースプが〔彼に代わって〕王位に就いた。ついには〔ビーヴァラースプはジャムシードを〕捕らえ、〔その身体を〕真っ二つにした。

ビーヴァラースプは1000年間統治した。はじめは正しき王であったが、後には公正さを失い、さらにディーヴの甘言と奸計によって正道を外れ、人々を苦しめた。やがて、アーファリードゥーン (Āfarīdūn) 〔・シャー〕³²がヒンドウスターンから現れ、彼を〔捕らえて〕殺し、王位に就いた。アーファリードゥーンはジャムシードの血筋の者で、500年間統治した。〔祝福され、公正で、帝王の光輪を備えた王であった。〕

〈10〉アーファリードゥーンの統治が164年を過ぎたとき、ガユーマルスの暦が2度目の大周期を終えた³³。彼はイブラーヒーム (Ibrāhīm)³⁴—— 彼に平安あれ —— の教えを受け入れていた。そして、象やライオンやチーターを手懐けた³⁵。テントやイーワーンを造り、建物や庭に、種や実のなる木々や若木を植え、小川をつくり、シトロンの、ミカン、バードラング・オレンジ³⁶、レモン、バラ、《89a》スミレ、水仙、睡蓮、〔ユリ、バジル、ハナハッカ〕といったものを庭園に植えたのも彼であった。彼はまた、「メフラガン (mihragān)³⁷」

³² イランの伝説時代であるピーシュダード朝のほぼ最後の王。

³³ 前段で、ジャムシードの治世の421年目に最初の大周期が終わったとの記述がある。ザッハークとアーファリードゥーンの治世をあわせて1164年だから、1461から1164を引いた297に421を加えた718年がジャムシードの治世ということになる。ただし、彼の治世の長さについては、さまざまな説がある。Mīnovī 2002: 85参照。

³⁴ アブラハムのこと。

³⁵ ロンドン写本ではこの箇所にも、「ロバを馬にかけあわせたのは彼だと言われている」という一文が入るが、これは既にジャムシードの功績のうちに数えられている (11頁参照) のでここでは訳出しない。

³⁶ 原語は “bādrang” で、キュウリの一種としての意味もあるが、パフラヴィー語では柑橘類の一種としてのみ用いられており、ここでもシトロンの (turānj)、ミカン (nāranj) と並んで用いられていることから、上のように訳した。現在ではシトロンの同義ともされる。ただし、本書の「ブドウ酒の益について」の章で現れる「バードラング」は、“xiyār-i bādrang” となっているため、こちらはキュウリとして訳した。

を設けた。そして、ザッハークを捕らえ、王国が秩序を取り戻したまさにその日を、〔毎年〕「サデ祭 (jašn-i sada)³⁷」と定めた。ザッハークの〔横暴や〕圧制や不正から解放された人々は〔それを〕称え、吉兆としてその日に祭りを行ってきた。そして、今日に至るまで毎年、〔アーファリードゥーンや〕誠実に治めた帝王たちの慣習は、イラン (Īrān) とトゥーラーン (Tūrān) の地で実行されているのである。

太陽が〔大周期を終え〕ちょうどファルヴァルディーンに達したとき、アーファリードゥーンは改めてその日に祝祭を行い、世界中から人々を集め、教書を発し、家臣たちを適切に遇し、王国を息子たちに分配した。彼は、ジャイフーン (Jayhūn) 川からチーンとマーチーン (Čīn wa Māčīn) までのトルキスターン (Turkistān) をトゥール (Tūr)³⁹に、ルーム (Rūm) の地はサルム (Salm) に、イランの地と自らの玉座をイーラジュ (Īraj) に与えた。〔すなわち、〕テュルクとルームとアジャムの諸王はみなひとつの血筋から発してお

³⁷ メフラガンは、古来、イラン暦第7月のメフル月のメフル日（16日）に行われる祭りである。この日はノウルーズと並び、イランの二大季節祭として重視された。11世紀初頭のイランの歴史家ギャルディーザーは、メフル月16日について、「この日はメフラガンである。日の名前と月の名前が一致する。次のように言われている。この日、アーファリードゥーンは、ザッハークと呼ばれるビーヴァラースプに勝利し、ザッハークを捕らえ、縛ってダマーヴァンド〔山〕に連れていき、そこに彼を閉じ込めた」と述べ、また同月21日について以下のように伝える。「この日は大メフラガン (mihragān-i buzurg) である。一部のマグたちは次のように言う。アーファリードゥーンのビーヴァラースプに対するこの勝利は、メフル月のラーム日のことだった。ザルトシュト（ゾロアスター）—— マグたちは彼を預言者とみなしている —— は、この日とノウルーズの日を大切にせよ、と彼らに命じている」(Zayn al-axbār: 351)。

³⁸ ノウルーズまで100回の昼と夜を数えるバフマン月10日に行われ、「サデ (100)」と名づけられた。別の説では、かつて1年が夏（ファルヴァルディーン月初からメフル月末まで）と冬（アーバーン月初からエスファンド月末）の二季に分割して考えられていたとき、冬の100日目にあたるバフマン月10日を「サデ」と名づけたとされる。いずれにせよこの日は冬の寒さが緩む時分にあたり、夜に盛大に薪を焚いて祭りを行った。ギャルディーザーによると、この日の夜に火をともして祝うのは、1人の人物の機転により、ザッハークの蛇の餌食とならずに済んだ100人が、アーファリードゥーンの勝利を聞き、隠れていたダマーヴァンド山で火をともして生存を知らしめたからだとされる (Zayn al-axbār: 352)。ゾロアスター教徒の間では、現在も行われている祭りである。

³⁹ ベルリン写本、ロンドン写本ともに“TWŽ”だが、校訂本に従う。

り、たがいに親戚同士で、すべてアーファリードゥーンの子孫なのである。帝王たちが彼の子孫であるがゆえに、世の人々は、〔彼らにとっての遺産である〕帝王の定めたしきたりを実行しなければならない。

アーファリードゥーンの時代が〈11〉過ぎ、また彼の後の他の帝王たちの時代も過ぎて、ゴシュタースプ (Guštāsp)⁴⁰の時代となった。ゴシュタースプの治世が30年経ったとき、ザルドウシュト (Zardušt)⁴¹が現れ、拝火教 (dīn-i gabrī) を興した。ゴシュタースプは彼の教えを受け入れ、それに則って統治した。アーファリードゥーンの祝祭からその時までには940年が経っており、〔年初〕太陽はしし宮にあった⁴²。ゴシュタースプは置閏を命じ、ファルヴァルディーン〔の最初〕の日に、太陽がかに宮の初点に来るように定め、祝祭を行った。そして、「この日を銘記し、ノウルーズとせよ。なんとなれば、かに宮は〔世界の〕上昇宮⁴³だからである。また、地主や農夫たちにとっては、この時期に税を納めるのがより容易であろう」と言い、120年ごとに閏月⁴⁴を

⁴⁰ イランの伝説時代であるカヤーン朝（ピーシュダード朝の次の王朝）の王。後述されるように、ゾロアスターを庇護したことで知られる。

⁴¹ ゾロアスター教の開祖であるゾロアスターのこと。なお、ロンドン写本にはゾロアスターの名前などを含む一文が欠落している。

⁴² 校訂本および両写本では「さそり宮」。ジャムシードの時代と同様に閏が設けられていなかったとすると、計算上は、 $1/4日 \times 940年 = 235日$ で、ノウルーズは235日ずれていたことになる。すなわち年初は7月25日ごろにあたり、その時点の太陽はしし宮にあったことになる。しし宮からかに宮だと宮1つ分（1ヵ月）の置閏で済むため、写本の書写の段階で、さそり宮としし宮を間違えたと判断した。

⁴³ ロンドン写本に従い、“tālī‘-yi ‘ālam”（世界の上昇宮）と読んだ。「世界の上昇宮」とは、世界が誕生したときに、東の空に見られる宮（これを上昇宮＝アセンダントという）のことである。ゾロアスター教の世界観を記したパフラヴィー語の書物『ブンダヒシュン』によると、「世界のホロスコープ（ザーイチェ）すなわちいかに（諸惑星がどの星座に）入座したかについて。デーニにこう言っている。曰く、フラワルディーン月・オフルマズド日（春分の日）の正午、昼と夜が平分したとき侵襲者（アフレマン）が侵入した。寿命位 (Jānān) は蟹座であって — (その) 19度・アバラグ (Abarag — またはアザラグ Azarag) 宿にティシュタル星（シリウス）が入座した — 惑星では木星が入宮した」（伊藤 1980: 186-187）と記されている。ここでの「寿命位」が「上昇宮」に相当する。

⁴⁴ 4分の1日の誤差が120年で30日となるため、「閏月」と訳した。

設けるよう命じた。そうすれば、暦と季節に誤差が生じず、人々は寒暖によって時節を知ることができるからである。その後、この慣習は「双角王 (Dū al-qarnayn)」と呼ばれているルームのイस्कन्दル (Iskandar-i rūmī)⁴⁵の時代までつづき、その間は置閏が行われ⁴⁶、人々はそのしきたりに従っていた。

やがてアルダシール・パーパカーン(Ardašīr-i Pāpakān)⁴⁷の時代になり、〔置閏の祝祭にあたっていたが、〕彼は閏を設けなかった⁴⁸。しかし大祭を催し、教書をしたため、その日に読み上げた⁴⁹。この慣習はその後、公正王アヌーシーラヴァーン (Nūšīrawān-i ‘ādil)⁵⁰の時代までつづいた。彼はマダーイン (Madā’in) のイーワーン⁵¹が完成したとき、慣習どおりにノウルーズを設け、祭りを執り行った。しかし置閏はせず、言った。「〔太陽がファルヴァルディーンの最初に〔おひつじ宮に〕《89b》来る周期になるまで〕このように放置せよ。〔なんとすれば、ノウルーズを設定する本来の目的は、〕太陽

⁴⁵ マケドニアのアレクサンドロス（前323年没）のこと。「双角王」は、クルアーンに出てくる伝説の世界征服者で、イスラーム世界ではアレクサンドロスと同一視される。

⁴⁶ ベルリン写本 (fol. 82a) と校訂本は、“tā ān muddat kabīsa na-karda būdand”（その間は置閏が行われなかった）と否定形だが、ロンドン写本は“kabīsa karda būd”となっており、前後の文脈からロンドン写本に従って訳した。これ以降、校訂本には多くの矛盾や欠落が見られる。

⁴⁷ サーサーン朝の初代君主（在位224-241年）。

⁴⁸ この部分についてもまた、ロンドン写本に依拠する。

⁴⁹ ミーノヴィーは、「その日〔をノウルーズと〕呼んだ (ān rūz [rā nawrūz] ba-xwānd)」と、「ノウルーズ」を補っているが、この箇所もまた、ロンドン写本の「読み上げた (bar xwānd)」を採った。ただし、“bar”には点が打たれていないため、“naw”と読むことも可能ではある。

⁵⁰ サーサーン朝ホスロウ1世（在位531-579年）のこと。アヌーシーラヴァーンは「不滅の魂」の意で、イスラーム時代にはおもにこの名で知られた。本書では、“Nūšīrawān” “Anūšīn-rawān” “Anūšīrawān”などさまざまな表記があるが、すべて「アヌーシーラヴァーン」に統一する。

⁵¹ イラクのマダーイン（サーサーン朝期はクテシフォンと呼ばれ、都の1つとされた）にある、サーサーン朝期の巨大遺構。「イーワーン」と呼ばれるアーチ状の建築様式が目を引き、イスラーム時代には「イーワーン」あるいは「ホスロウのアーチ (īwān-i kisrā’）」として知られた。現在もその一部が残る。

がかに宮の初点に来る〈12〉〔ことではなく、その方法では〕ガユーマルスや
ジャムシードが与えた指示が失われてしまうだろう。」

彼はこのように言い、その後も置閏はされなかった。

やがてカリフのマームーン (Ma'mūn)⁵²の時代となった。彼は命じて天体観測をさせ、毎年、太陽がおひつじ宮に来るときにノウルーズを行うように命じ、「マームーン天文表 (zīj-i ma'mūnī)」を作成した。今でもまだ、この天文表から暦が算出されている。

そして、ムタワッキル・アラー・アッラー (al-Mutawakkil 'alā Allāh)⁵³の時代となった。ムタワッキルにはムハンマド・ブン・アブドウルマリク (Muḥammad b. 'Abd al-Malik)⁵⁴という名のワズィール (宰相) がいた。〔ワズィールは〕カリフに言った。「ハラージュ税〔徴収〕の開始は、穀物の蓄えが乏しく、人々が難儀するような時期になっています。アジャムの王たちの慣習では、暦と季節が一致するよう、置閏がなされることになっていました。そうすれば、人々はちょうど収穫を手にしており、税を支払うのに苦労せずに済むのです。」

〔しかし〕ムタワッキルは〔この進言を〕〔受け入れず、その状態のまま、ムウタディド (Mu'taḍid)⁵⁵の時代になった。彼のワズィールであったアブー・アル=カーシム・ウバイドゥッラー・ブン・スライマーン・ブン・ワフブ (Abū al-Qāsim 'Ubayd Allāh b. Sulaymān b. Wahb)⁵⁶は、置閏についてムウタディドに進言した。ムウタディドは〕それを受け入れ、置閏を行い、太陽

⁵² アッバース朝第7代カリフ（在位813-833年）。

⁵³ アッバース朝第10代カリフ（在位847-861年）。

⁵⁴ 833年頃より第8代カリフ・ムウタシム (al-Mu'taṣim 在位833-842年)、次いで第9代ワースィク (al-Wāṭiq 在位842-847年) のワズィールを務める。ムタワッキル治世の847年に罷免され、その後すぐ死亡した (Sourdel 1959-60, i: 254-269)。

⁵⁵ アッバース朝第16代カリフ（在位892-902年）。

⁵⁶ 891年にカリフ・ムウタミド (al-Mu'tamid 在位870-892年) のワズィールとなり、そのままムウタディドのワズィールも務めた。901年に彼が死去した後は、息子のQāsimが後任としてムウタディドのワズィールとなった。詳しくは、Sourdel 1959-60, i: 329-345 参照。

はかに宮からファルヴァルディーンに再び移された⁵⁷。人々は安らぎ、その慣習がつづけられた。

その後、スィースターン (Sīstān) のアミール、ハラフ・ブン・アフマド (Xalaf b. Aḥmad)⁵⁸が別の置閏法を定めた〔とされている〕。今日では〔ノウルーズから〕16日の差違がそこには生じている〔が、その詳細は私にはわからなかった〕。

幸運なるスルターン、〔ムイZZ・アル=ドンヤー・ワ・〕アル=ディーン・マリクシャー (Mu‘izz al-Dunyā wa al-Dīn Malikšāh)⁵⁹—— アッラーが彼の証を輝かせますように —— はこのような状況を知らされたため、置閏を行い、暦と季節を合わせるように命じた。当代の〔学者や〕賢人たちがホラーサーン (Xurāsān) から連れてこられ、壁面日時計 (dīwār)、渾天儀 (dāt al-ḥīlaq) といった天体観測に用いるあらゆる道具が作られ、ノウルーズは〔おひつじ宮の〕ファルヴァルディーンに移された。だが帝王には十分な時間がなく、置閏法は完成されないままとなった⁶⁰。〈13〉これがノウルーズの真実で

⁵⁷ ムウタディドは279/892-3年に天文学者たちを集め、暦を算出し、ノウルーズをシリア暦に合わせた。ピールーニーによると、アッバース朝時代は、ノウルーズはほぼ夏に設定されていたが、置閏することに対し、ムタワッキルはクルアーンに背くことを恐れ、置閏を行わず、そのため太陽がかに宮 (7月ごろ) にあるときからノウルーズが前倒しにずれ、春に当たっていたとされる。またこの当時はノウルーズに徴税していたため、春先のノウルーズは穀物が稔る前であり、農民には支払いが困難であったとされる (Sachau (tr. & ed.) 1984: 36-39)。

⁵⁸ 963から1002年のあいだ、イラン南東部のスィースターンを統治したアミール。ガズナ朝のスルターン・マフムード (Maḥmūd b. Sebüktegin) (注234参照) に破れ、1009年にアフガニスタンのギャルディーズで死亡した (Bosworth 1994: 301-328)。

⁵⁹ セルジューク朝第3代スルターン (在位1055-92年)。校訂本は“Mu‘in al-Dīn”だが、ロンドン写本は正しい称号“Mu‘izz al-Dunyā wa al-Dīn (世界と信仰の強化者)”を記している。

⁶⁰ イブン・アル=アスィールによると、マリクシャーは、467/1075年に天文学者たちを集め、うお宮の半ばにあったノウルーズをおひつじ宮の初点に移し、暦の起点とした。同時に天体観測を行うため、ウマル・ブン・イブラーヒーム・アル=ハイヤーミー (*Umar b. Ibrāhīm al-Xayyāmī)、アブー・アル=ムザッファル・アル=イスフィザーリー (Abū al-Muẓaffar al-Isfizārī)、マイムーン・ブン・アル=ナジブ・アル=ワースィティー (Maymūn b. al-Najīb al-Wāsiṭī) といった学者たちを集め、大金を投じた。この天体観測はマリクシャーの死の485/1092年までつづけられたが、死後は放置された。

あり、私が先人たちの書物で読み、識者たちから聞いたことである。

これからアジャムの諸王の慣習について簡単に記そう。それから再びノウ
ルーズの詳細に立ち返ろう。アッラーの助力と恩寵があるならば。

↘ (*Kāmil*, x: 98)。

アジャムの帝王たちの慣習について

アジャム〔やトルキスタン〕の王たちはいつの時代でも、すばらしい食卓をこの上なく完璧に整えるための作法を持っていた⁶¹。〔統治の〕順番がカリフたちに達すると、〔彼らもまた、〕言葉で表せないほど技巧を凝らして食卓を飾ったのであった。とりわけ、アッバース家のカリフたちは、スープ(abā)、細切れ肉(qalya)、さまざまな砂糖菓子(halwā)、ジャズラーン⁶²・ビール(fuqqā‘)を〔食卓に〕並べた。〔これらは〕彼ら以前にはなかったものである⁶³。ハーシミー(hāšimī)、サーブーニー(ṣābūnī)⁶⁴、アーモンド菓子

⁶¹ 本章の記述内容は、時代的にやや先行する、セルジューク朝の宰相ニザーム・アル＝ムルク(Nizām al-Mulk al-Ḥasan b. ‘Alī al-Ṭūsī, 1092年没)が著した君主鑑『統治の書(Sīyar al-mulūk / Siyāsāt-nāma)』の内容と重なる部分が多い(iv頁参照)。以下、本文の内容と関連すると思しき箇所を、『統治の書』から引用する。「いつの世でも帝王達は朝の食卓を立派に整えてきた。務めのために参内した者がそこでなにがしかの物を食べることができるようにである。廷臣がその場では食べることを望まず、自分の都合の良いときに自分〔で整えた〕食物を食べるのであれば〔そんな〕心配は要らないのだが、それでもこの朝の食卓を整えることはせねばならない」(Sīyar al-mulūk: 170)。

⁶² ベルリン写本では、ḤRWANYAN (あるいはḤRWAYNAN) であり、「ハルワーン」はイスファハーン近郊の小村の名前でもあるが、ここではミーノヴィーの注釈(Mīnovī 2002: 90)に従い“jazr”と読み、樽で発酵させた強い酒の一種であると解した。ロンドン写本では、「マルワーン家(marwāniyān)」となっている。「マルワーン家」として知られる一族には、① ウマイヤ朝の第4代カリフのマルワーン(その後のウマイヤ朝カリフを輩出)の家系、② 10世紀末にアナトリアのディヤル・バクルで自立したクルド系の一族、が挙げられる。

⁶³ ロンドン写本は、「とりわけ、アッバース家のカリフたちは、スープ(aš-hā)、細切れ肉、さまざまな砂糖菓子、なかでもマルワーン家のビールを並べた。それ以前にはなかったものである」という文章の後に、「ビールは並べるものではないために(語句の不明瞭な箇所あり)、シーアの人々(šī‘iyān)は飲まなかった」という一文が入る。「シーアの人々(šī‘iyān)」という表現は、この箇所にしか見られない。

⁶⁴ 「ハーシミー」は「ハーシム家の」、「サーブーニー」は「石鹸の」の意。「サーブーニー」に関しては、揚げ菓子の一種だとの説明がペルシア語大辞典 *Luḡat-nāma* にある。

(lawzīna) など、多くの美味しい砂糖菓子や、滋養があり〔美味な〕スープや料理などもまた、《90a》 アッバース家のカリフたちが始めたものである。そのような善き習慣はいずれも彼らの気高い志によるものであり、〔その志たるや際限はなく、彼らの伝記 (siyar) にも記されているほどである。〕

アジャムの王たちはまた、公正をなし、建築を行い、知識を学び教え、叡智を磨き、学識者を尊重することを慣わしとしたが、それらは実に大いなる心がけであった。さらに彼らは、王国内のそれぞれの都市や地方に〔「カールアーガーフ (kār-āgāh)」と呼ばれる〕情報官 (ṣāhib-i xabarān) を配し、人々の間で生じたことを帝王に報告させた。そうすることにより、帝王は報告に応じて命令を下すことができた。このような状態であったために、収奪は抑えられ、〔貪欲な者やイクター保有者 (muqṭa‘ān)⁶⁵や〕徴税官〔や役人〕たちは、誰に対しても不正を行うことができず、〈14〉1 ディラム⁶⁶さえ誰かから不当に奪うことはできなかった。またグラームたちは、定められた規則や規定を外れて、〔1粒あるいは1マン⁶⁷の穀物も〕臣民に要求することはできなかった⁶⁸。人々の財産や妻子は安全に護られ、誰しものがみな、帝王を畏れ、自

⁶⁵ 10世紀半ば以降、特定の土地の徴税権を軍人に授与する制度が一般的となるが、授与された権利およびその権利が設定された土地を「イクター」と呼び、この権利を保持する者が「ムクタア」すなわち「イクター保有者」である。その後、イクター保有者の権利は徐々に拡大し、イクターそのものも世襲化されていった。

⁶⁶ 貨幣の単位。通常は銀貨を指す。「ディルハム」とも呼ばれる。ちなみにロンドン写本は「1粒の穀物さえ」。

⁶⁷ マンは重量単位。約3キログラムに相当。

⁶⁸ 『統治の書』には次のようにある。

帝王達は、自らの臣民と軍の諸々の状況、および遠近の者の状況に通じ、大小どんな出来事でも知っていなければならない。もしそのようにしなければ、〔帝王の〕欠点となろう。人々は帝王達の不注意、怠惰、圧制のせいにしてこう言う。「王国において起こっている腐敗と圧制を、帝王は知っているのか、それとも知らないのか。もし知っていて処罰も禁止もしないのであれば、〔王は〕彼らと同様に圧制者であり、圧制を承認していることになる。もし知らないのであれば、甚だ怠慢であり、無知である」。

このどちらにしても、良いことではない。どうしても、駅通長が必要になる。帝王達はジャーヒリーヤ、イスラームのいつの時代においても、あらゆる都市に駅通を持っており、良いことであれ不吉なことであれ、なんでも知らせを受けていたのである。もし雌鳥1羽、干し草の飼い葉袋1個がある者から不正に奪われたとし、

身の仕事や生業に精を出していたのである。

一方〔帝王は、一度〕家臣〔や兵士〕に与えた俸給を再び取り上げることはなく、適切な時分に、定まった日付のとおりに家臣に与えていた。もし誰かが死に、彼の仕事や務めを引き継げるような息子がいた場合には、父の俸給をそのまま子に与えた。

さらに〔帝王たちは〕、建築事業〔や開墾〕に大いなる情熱と熱意を持っていた。王国の玉座に座った帝王はみな、どの場所の水と気候⁶⁹がよく、都市を建設するのにふさわしいか、昼夜を問わず考えていた。そうすれば、王国

へ、500ファルサングの距離を超えて帝王に知らされ、その者に対して懲戒が命じられ、他の者は帝王が注意を怠っていないことを知る、という風だったのだ。

そして各地に密偵たちを配し、全ての圧制者は悪事を控え、人々は正義による安全と保護のもとで仕事や耕作に勤しんだのである。しかしながらこれは微妙な仕事であり、恨みを買いやすい。〔だから〕この仕事は、邪念を持たず、私利私欲にふけることのない者達の手と舌と筆に依らなければならない。王国の盛衰は彼ら次第なのである。そして彼らを、他の誰かではなく、帝王が直々に派遣せねばならない。また彼らが何の懸念もなく状況を報告できるよう、彼らに対する報酬と給与は国庫から支払われねばならない。彼らが何を報告したかについては、帝王以外誰も知らないようにせねばならない。それは、新たに生じた事態を帝王が〔まず〕知り、なすべきことを命じることができるよう、また誰に対しても何の前触れもなく、帝王がその者に相応しい報い、処罰、労い、懲罰を与えることができるようにである。こういう風であれば、人々は常にすすんで帝王に服従し、帝王の懲罰を恐れ、あえて帝王に背いたり、悪意を抱いたりしようとはしないのである。つまり諜報官と密偵を任命することは、帝王の正義と注意深さと強い意志の証であり、領土を繁栄させるためなのである (*Siyar al-mulūk*: 85-86)。

グラーム達は宮廷から数多く派遣されている。ある者は命令を承けて行くのだが、大半は命令なしに出かけていて、その際、人々は苦労を強いられ、金品を徴発される。200ディーナール程度の係争が生じると、グラームが出かけていって500ディーナールの支払いを要求する。人々はこのために根こそぎにされ、困窮してしまうのだ。重要事がない限りグラームが派遣されてはならない。また派遣される場合は必ずや命令に基づかねばならない。そうしてグラームには、この係争はいくらいくらであり、それ以上取ってはならない、と〔あらかじめ〕定め、自らの分を弁えさせねばならない (*Siyar al-mulūk*: 100)。

⁶⁹ ロンドン写本は「水と土壌」。

を繁栄させたという彼の名声が世に残るのであった⁷⁰。

アーファリードゥーンの末裔であるアジャムとテュルクとルームの王たちの慣習は、次のようなものであった。もしある帝王が高樓の宮殿や〔大河への架橋や〕都市や村やリバートや砦の造営を始め、あるいは河川〔の開削〕に着手し、その事業が彼の在世中に終わらなかったならば、彼の息子や、彼の後を継いで王国の玉座に座った者⁷¹は、世の中〔や世の人々〕が彼の統治のもとに安定すると、先の帝王の造営途中の事業を完成させるべく、それ以外のことに目もくれないほどに尽力するのであった⁷²。つまり、そうすれば、〔後継者たる〕自分もまた、世の中と王国の繁栄のために〔父祖と〕同様の尽力をするのだ、ということを世の人々が知るからである。だが、帝王の息子は〈15〉いくつかの理由から、より熱心にこれを行う。〔たとえば、〕「父がやり残した事業を完成させることは、息子にとって義務である。なぜなら、父王の玉座を私が継いだ以上、私こそが〔それをやりとげるのに〕ふさわしいのだから」と言ったり、あるいは、「私の父は、世の中を豊かにするために、《90b》あるいは高き志や名声のために、あるいは至高なるアッラーに近づくために、あるいは楽しみや喜びのために、このような建築事業を行ってきた。私もまた、王国を繁栄させねばならず、偉大なる志を持ち、〔父と同様に〕至高なる神の同意と満足を求め、楽しみや喜びを好んでいるのだ」と言ったり、〔あるいは、「いかなる場合でも私は父に背くことはない。善行においてはなおさらである」と言ったりする。〕かくして彼は、造営を完遂させるために命令を出し、その都市や建造物を完成させるべく邁進

⁷⁰ 『統治の書』第1章3節に次のようにある。

また、〔帝王は〕カーレーズを掘り、著名な水路を掘削し、大河の渡し場に橋を架け、村々や耕地を豊かにし、砦を建設し、新たにまちをつくり、高い建物や素晴らしい居所を建て、「王の道」沿いにリバートを、知識を求める徒らのためにマドラサをつくることを命ずるなど、世界の繁栄につながることを実行する。そうすることによって彼の名はずっと遣り、彼は来世においてその善行の報償を得、〔彼に対する〕祝祷が続くことになるのである (*Siyar al-mulūk*: 12-13)。

⁷¹ ロンドン写本は「彼の息子や、あるいは彼の兄弟や親族」。

⁷² ロンドン写本は「先の帝王の造営途中の事業を完成させること以上に彼にとって必須の仕事はなかった」。

するのである。そしてもし彼の手で〔も〕完成しなければ、彼の後を継いだ〔幸運と祝福を備えた〕別の者が完成させる。〔そうすると〕人々は〔完成させた〕その帝王を、祝福された尊敬すべき人物だとみなし、「至高なる神は、この造営を彼の手で完遂せしめられたのだ」と言うのである。マダーインにある「ホスロウのイーワーン」は、肩胛骨王シャープール (Šāpūr Dū al-aktāf)⁷³が造営を始め、彼の後、何人かの帝王が造築をつづけ、最後に公正王アヌーシーラヴァーンの手で完成し、〔彼の名で広まった⁷⁴。〕アンディーメシュク (Andīmišk) の橋⁷⁵も同様であり、そのような例は多い。

アジャムの王たちは、次のようなことをもしきたりとしていた。誰かが帝王の御前に何かを持ってきて、〔それが賞賛され、受け入れられたときには、〕あるいは楽師が歌を奏でたり、〔意見を述べたり、〕善き言葉を発した際に、それが気に入った場合には、彼らは「あっぱれ! (zih)」、すなわち (アラビア語) 「でかした! (aḥsanta)」と言った。「あっぱれ」の声がある者の口から出ると、〔即座に〕宝蔵から1000ディラムが持ってこられ、その者に与えられた。彼らは善き言葉というものを大切にしたのである⁷⁶。

〈16〉 アジャムの王たちの慣習には次のようなこともあった。彼らは3種の罪

⁷³ サーサーン朝のシャープール2世 (在位309-79年)。アラビア半島のアブド・カイス族、イヤード族に対する懲罰遠征を行い、捕虜の肩に穴をあけてつないだという逸話があり、そこから「肩胛骨王」の異名を得たとされる。EF: “SHĀPŪR” 参照。

⁷⁴ 「ホスロウ／キスラー」は、サーサーン朝の王たちの称号としてイスラーム文献に広く現れるが、具体的にホスロウ1世 (アヌーシーラヴァーン) 個人を指す例も多い。

⁷⁵ イラン南西部のフーズスターン州を流れるデズ川にシャープール2世が架けた橋。その傍らには橋を防御するための砦が築かれた。現在のデズフル (Dizfūl: もともとは「城橋 (Diz-pul)」の意) に名前とともに残る (Le Strange 1905: 238参照)。

⁷⁶ 『統治の書』第36章4節には以下のようにある。

サーサーン家の習慣は以下のものであった。すなわち、彼らの前で彼らの気に入る言葉言ったり、技芸を示した者が〔いると〕、彼らは、「天晴れだ」と言い、帝王が「天晴れだ」と言うと、宝蔵係が1000ディーナールをその者に与えたのであった。サーサーン朝の諸王達は、公正さ、大志、俠気については他の諸王達にまさっていた (*Siyar al-mulūk*: 175)。

ちなみにロンドン写本では、「彼らの口から出ると、即座に宝蔵係が1000ディーナールをその者に与えた」となっており、『統治の書』の記述により近い。

人を除き、罪人を赦した。〔その3種の罪人とは、〕第1に帝王の秘密を漏らす者、2番目は神に対して怪しからぬことを言う者、3番目は〔帝王の〕命令を即座に実行せず、軽んじる者である。彼らが言うには、王の秘密を守らない者は信を失い⁷⁷、神に怪しからぬことを言う者は不信心者になり、帝王の命令を実行しない者は帝王に逆らい反抗する。〔そのため〕これら3種の罪人については、即座に処罰した⁷⁸。彼らが言うには、「帝王が持つような世俗の富は他の人々も持っているものだ。帝王と他の者たちとの違いとは、命令の実効性にこそある。帝王の命令が実行に移されないようなら、彼と他の者との間に何の違いがあるというのか⁷⁹。〔しかも帝王の場合、〔もしそのようなことがあれば、〕何千もの損害や混乱が万事に生じ、王国が傾く事態になってしまうではないか〕」と。

また彼らは荒野や宿駅にリバートを建て、水を得る井戸を掘り、盗人やならず者たち〔のせいで不用心な場所には見張り塔を造り、王国内に盗人やならず者が現れないよう努め、〕街道を安全に守った。

さらに、各人に俸給や手当を命じ、毎年、《91a》請求されずともその者に

⁷⁷ ロンドン写本は「敵を生ぜしめ」。

⁷⁸ 『統治の書』第4章28節に次のようにある。

バルヴィーズ王はこのように言っている：王たる者は、人々について次の4種類の罪は許してはならない。1つは王の領土をねらうこと。2つめは王の後宮をねらうこと。3つめは秘密を守らず、漏洩すること。4つめは口先では王の味方であるが、内心では王の敵達に同心し、密かに利敵行為を行うこと (*Siḡar al-mulūk*: 42)。

⁷⁹ 『統治の書』第11章1節に次のようにある。

宮廷からは多くの書状が発せられるが、数が多ければ多いほど、その重みは薄まってしまう。重要事がない限り、至高の御前からいかなる〔命令書〕も書き送られるべきではない。そして〔命令書が〕書き送られた時には、如何なる者も、それをおおりにし、その結果命令が遂行されない、というような事態を引き起こさぬよう、それを尊崇せねばならない。もし誰かがその命令を軽視したり、それを聞き従うことを怠ったりしたと明らかになれば、たとえそれが〔帝王の〕側近くに住める者であったとしても、その者に厳罰を科す〔べきである〕。帝王とその他のムクタアや臣民達の間の違いというのは、〔帝王の〕命令が遂行されるという点にある (*Siḡar al-mulūk*: 97)。

届くようにした。もし徴税官の1人が、地方や〔区や〕村に、法の規定を外れてなにがしか〔の負担〕を課し、〔「この地域の徴税を私に任せてください。そうすれば毎年定額の何倍も〔の収益を〕あげてみせます」と言うよう〕ならば、〔そのような発言を許さずに〕彼をその職務から罷免し、その者に処罰を与えた。それは、他の者が人々から余計に〔税を〕奪うことに貪欲になってしまわないようにするためであった。〔彼らは、次のように言う。「どのような場合であれ、その者が〔民の〕家から何か持ち出したりしないように。1年のこの時期に税を定めている〔にもかかわらず〕、この者がさらに人々から過度に取り立てようとし、ディーヴの〔ような悪しき〕行為をするならば、見るがよい、わずかな期間でその〕王国は廃れ、〔人々は流民となるだろう⁸⁰」と。〕

一方臣下たちの中で、適切かつ然るべく仕事を行っている者がいたならば、その働きぶりに応じて、即座にねぎらいと褒美を与えた。〈17〉 そうすると、他の者たちは務めを立派に果たすことに懸命になるのであった。また、もし誰かが罪や過失を犯したとしても、彼の実績を勘案し、すぐに罰を与えることはせず、〔ひとまず〕牢獄に送り、そのうちに誰かが執りなしをしたら、赦してやった⁸¹。

⁸⁰ 『統治の書』第4章1節に次のようにある。

いずれかの徴税区をまかされた徴税官達に対しては次のことを命じねばならない。すなわち、至高なる神の被造物に対して正しく振る舞い、正当な税金以外のものを彼らから徴発しないこと、それ（正当な税金）すらも、節度と礼儀をもって要求すること、収穫が得られないうちは税金を要求しないこと —— というのも〔収穫〕時期よりも前に〔税を〕求めると民を苦しめることになり、彼らはやがて手に入る筈の収穫のうちから1ディルハムの価値のあるものも、必要に迫られて半ディルハムで売ってしまい、その結果破滅し、流民となってしまうからである ——、そしてもし民が困窮し、牛や種にも事欠くようになったなら、彼が家を捨てて逃散しなくてもよいよう、彼に〔それらを〕貸し付けてやり、重荷を取り除いてやること、である (*Siḡar al-mulūk*: 30)。

⁸¹ 『統治の書』第33章1節には次のようにある。

抜擢され、要職につけられた者というのは、必ずやそうなるまでに時間もかかり、苦労も経てきている。そのような者達に過失や罪が生じた場合、もし彼らを公然と叱責するなら大いなる不名誉となってしまう。大変なねぎらいや厚遇を与えてはじめて、もとの状況に戻るほどである。よりよいやり方はこうである。すな／

このようなことは多くあり、もしすべてを記したら長くなってしまう。このくらいで十分であろう。さて、この本の目的であるノウルーズの書の記述に戻ろう。

「わち、誰かが過失を犯した際には、しばらくそれを黙認し、こっそりとその者を呼び出し、こう言ってやるのである。「お前はこれこれのことをしでかした。私は自分が育て上げた者をおとしめたり、自分が抜擢した者を見放すつもりはない。あの件については見逃してやる。以後注意をし、そのようなことを2度としてかさねようにせよ。この後、もし則を踏み外すことがあれば、お前は地位を失い、我が従者から外れることになる。そのときは、自分の責任であり、私のあずかり知らぬことだ」と (*Sīyar al-mulūk*: 166)。

アジャムの王たちの儀礼は、カイホスロウ (Kayxusraw)⁸²の時からアジャムの最後の王であったシャフレヤールの子ヤズダゲルド (Yazdajird-i Šahriyār)⁸³の時代まで次のようなものであった。ノウルーズの日には〔早朝、宮廷のハーディムが1人と、〕外部の者たちの中からはまず最初に大モウベドが、ブドウ酒で満たされた黄金の杯、指輪、ホスロウ金貨と銀貨、芽吹いたばかりのひと束の苗、剣、弓矢、インク壺と筆をそれぞれ1つずつ携え、馬、鷹、美しい顔をしたグラームを連れて、王の御前にやってくる。そして、〔以下に記すような〕ペルシア語による彼ら独特の祝祷文で〔帝〕王を讃え、祝福する。大モウベドが祝祷を詠み終え、〔これらの儀が執り行われると、〕つづいて国の重臣たちがやってきて、〔王に〕拝謁した。

大モウベドの祝祷文

「王よ！ファルヴァルディーン月のファルヴァルディーンの祭典において、自由〔というまったき貴さ〕を保たれんことを！カヤーン〔の王たち〕の信ずる神は、ソルーシュ (Surūš)⁸⁴を遣わされ、貴方に、事に通じる知識と見識

⁸² イランの伝説時代であるカヤーン朝の第3代君主。60年間統治し、正義と公正さで名高い。

⁸³ アラビア語では「ヤズダジルド」。ここではサーサーン朝最後の皇帝ヤズダゲルド3世（在位632-651年）のこと。系譜についてはよくわかっていないが、ホスロウ・パルヴィーズの孫に当たるシャフレヤールの子と言われている (*Tabarī*, iii: 477; Blankinship (tr.) 1993: 222 & n.1054参照)。636年に、カリフ・ウマル1世の派遣したアラブ・イスラーム軍とカーディスィーヤにて戦い、敗北。さらに642年にニハーヴァンドで決定的な敗北を喫し、東方に逃亡したが、651年マルヴ近郊で、彼の服と宝石を狙った水車番に殺害され、サーサーン朝は滅亡した。

⁸⁴ ゴロアスター教における天使の1人。最後の審判の日に、人間の行いを勘定する役目をもつ。また神の使者として、神の啓示を伝えるため、ガブリエル（ジブリール）と同一視する考えもある。天使の位階のうちでは、メフルと同等。アヴェスターでは「服従（特に神の命令に対する服従）」の意味で用いられる。ビールーニーによると、ソルーシュは「ささやき」を命じ、それ以後、神への祈禱は大声ではなく、ささやきでもつゝ

を与えられた。称うべき性質〔と称うべき慣習〕とともに生き永らえられんことを！黄金の玉座にて安んじられんことを！ジャムシードの杯でもって永遠の命を与える酒を飲まれよ！気高き志、善き行い、〔立派な振舞い、〕そして公正と正義の実践を慣いとした父祖のしきたりを守りたまえ！

貴方の髪が〔青き〕新芽のごとく青く、若々しくあらんことを！貴方の馬が成功をおさめ、常勝たらんと〔敵に向かって駆けめぐらんことを〕！貴方の剣が〔鋭く〕光り輝き、敵を〈19〉切り裂かんことを！貴方の鷹が獲物を捕らえ、幸運を追い求めんことを！貴方の行いが矢〔とそれとともにあるもの（弓）〕のように真っ直ぐであらんことを！〔筆がすべての〕国を新たに征服せんことを！金貨銀貨とともに玉座にあられんことを！貴方のもとで才能や知識〔ある者〕が尊重され、《91b》美しいものが求められんことを⁸⁵！そして貴方の館が繁栄し、齢の久しからんことを！」

〔大モウベドは〕このように述べると、杯をひと飲みしてから王に渡し、苗を〔王の〕もう一方の手に載せ、そして金貨と銀貨を王の玉座の前に置くのであった。このようにして、新しい年の新しい日に、重臣たちが最初に何を目にしても、それらのものでもって翌年まで慶びと楽しみのうちに過ごし、〔心に秘めた願いが〕叶うように、またその〔年〕が彼らにとってめでたいものとなるようにと願うのであった。なぜなら、世の慶びと繁栄は、〔ノウルーズの日に〕王の御前にもたらされたこれらのものの中にこそあるのだから。

〔ノウルーズの日に吉兆のために帝王の御前にもたらされる金・銀、〔大麦の〕苗、ブドウ酒、指輪、剣、弓矢、インク壺と筆、〔馬、〕鷹、美しい顔のグラームについて〕

ゝて唱えられるようになったという。また彼は、夜をつかさどり、ジンと戦う最強の天使だとされる (Sachau (tr. & ed.) 1984: 204)。

⁸⁵ ロンドン写本に従って訳す。校訂本は、“diram xwār” で「惜しみなく褒賞が与えられんことを」といった意味になる。

まず、金の効用と性質と特性について〔の話から〕始めよう。金について述べるのは、熔解する鉱物の中では金こそが王様であり、先に述べたように、それは王たちの飾りとなるからである。

金は太陽のエッセンス (iksīr) であり、銀は月のエッセンスである。

金と銀を鉱山から採掘した最初の人物はジャムシードである。彼は金と銀を鉱山から掘り出すと、金を太陽のような丸い円盤形につくらせ、その両面に太陽の形を刻印するよう命じた。そして、「これは天における太陽のごとく、地上における人々の帝王なのである」と言った。また銀を、月のような円盤形につくらせ、その両面に月の形を刻印させた。そして、「これは天における月のごとく、地上における人々の宰相 (kadxudā) なのである」と言った⁸⁶。

錬金術師たち (xudāwand[ān]-i kīmiyā) は金のことを⁸⁷、(アラビア語)「吉兆なる昼の太陽 (šams nahār al-jadd)」、すなわち(ペルシア語)「幸運な日の太陽」と呼び、銀のことを(アラビア語)「吉兆なる夜の月 (qamar layl al-jadd)」、すなわち(ペルシア語)「幸運な夜の月」、そして真珠を(アラビア語)「豊饒な天の星 (kawkab samā' al-ġanī)」、すなわち(ペルシア語)「富裕な天の星」と呼んでいる。また〔当代の〕知者たちのある者は、金を、(アラビア語)「貧寒な冬の炎 (nār šitā' al-faqr)」、すなわち(ペルシア語)「困窮する冬の火」と呼んでいる。またある者は(アラビア語)「貴人の心の歓喜 ([farruh] qulūb al-ajilla) ⁸⁸」、すなわち(ペルシア語)「高貴な人々の心の喜び」と〔呼び〕、ある者は(アラビア語)「王の園の水仙

⁸⁶ 金貨や銀貨を意味しているのではないかと思われるが、確認の術はない。一般にサーサーン朝の貨幣は銀貨が主で、金貨は例外的にしか打刻されなかった (Göbl 1971: 28)。貨幣の表面外縁の上下左右の4ヵ所に三日月と星を組み合わせた刻印(あるいは星を欠いた三日月だけの刻印)を付すことは、サーサーン朝貨幣の多くにみられる特徴であるが (ibid.: 17)、本文の「銀貨に月の形を刻印した」という記述がこのことに関連するものかどうかは定かではない。金貨に太陽の形を刻印した、という記述については不明。

⁸⁷ 校訂本は「錬金術の主である金のことを」となっているが、ロンドン写本に従い訳す。

⁸⁸ ベルリン写本、校訂本ともに1語が判読できないため、ロンドン写本に従った。

(narjis rawḍat al-malik)」、すなわち（ペルシア語）「〔帝〕王の庭園の水
仙」と、またある者は（アラビア語）「信仰の瞳の輝き (qurraṭ ‘ayn al-
dīn)」、すなわち（ペルシア語）「信仰の目の光」と呼んでいる。

熔解する鉱物の中で金が優れていることは、人間が他の動物たちに対して
優れているようなものである。

金の特性とは、1つには、それを見る者の目を〈21〉輝かせ、心を楽しませ
ることである。2つめに、〔金をもつことにより、知性を増し、理解力を鋭
敏にさせ、〕人を勇敢にし、〔正しい見解に導き〕知力を高める。3つめ
は、人の見目の良さを増し、若さを保ち、老いを遅らせる。4つめに、生活
〔や人生を楽しませ、寿命を〕増し、人の目を惹きつけ、〔望みを叶える〕
ことである。

《92a》 アジャムの王たちは、金のもつ貴さゆえに、2つの金製のものを誰に
も与えることはなかった。その1つは杯で、もう1つは鎧である。〔また、
別の2つの金製のものも、相手が貴人や偉大な軍司令官でない限り、与える
ことはなかった。1つは金の剣帯であり、もう1つは肩帯である。〕

〔金の〕特性については、次のようなことも言われている。幼い子供に金
の薬瓶で乳を与えると、言葉がうまくなり、人々に好かれ、頑健な体つきと
なり、癩癧の病から守られ、夜泣きをしなくなる。また、金の棒を使って目
の縁取りをすると、夜盲症 (šab-i kūrī) や眼病 (āb dawīdan-i čašm) の心配がな
くなり、視力が増す。金の足輪を鷹の足につけると、より勇敢に、嬉々とし
て獲物に向かうようになる。また、金によってつけられた傷はすぐに癒える
が、傷口はふさがらない。そのため、〔イラクの〕貴人の女たちは自分の娘
や息子の耳に金の針で穴をあける。そうすると、その穴は決してふさがらな
い。金の水差しで水を飲むと、水腫 (istisqā’) の心配がなくなり、心を朗らか
にさせる。このため、医師たちは強壮剤の中に金や銀や真珠を混ぜ込むので
ある。沈香や麝香、絹〔も同様の効能がある〕。悲しみや心配事といった心
臓が弱くなる〔ことで生じる〕病は、金や銀の力で取り除くことができ、ま
た鬱 (inqibāḍ) によるもの〈22〉は、麝香や沈香や絹で癒すことができる。さ

らに多血 (galaba-yi xūn) から生じる疾病は琥珀や珊瑚⁸⁹で、血が濃くなること (saṭbarī-yi xūn) によって生じる疾病は、真珠や絹で〔癒すことができる〕。

隠し財宝の目印について

宝や財宝が埋められている場所には、雪〔や雨が降っても〕残らず、〔すぐに〕溶けてしまう。〔目印の1つはこのようなものである。〕隠し財宝の目印には、他に次のようなものがある。耕作されていない荒地であるのに、〔良質の〕バジルが生えている場合、そこには財宝が埋まっているとわかる。人里離れた山裾に、ゴマや〔バジルの茎、とりわけ〕ナスの茎があれば、そこには財宝があるとわかる。塩が吹いている土地の中に、牛〔か馬〕が1頭寝そべるくらい〔の大きさ〕で、封泥に適する良い土壌や泥があれば、そこには財宝が埋まっているとわかる。またハゲタカが群れ集っているのにそこに死骸がなければ、それは財宝が埋まっている場所だとわかる。〔平らな場所で〕雨が降ったとき、窪みもないのに雨水が〔1ヵ所に〕集まり溜まる部分があれば、そこには財宝があるとわかる。冬、雪が積もらず、すぐに溶けてしまうような場所があり、しかも他の場所は雪が積もったままであるならば、そこには財宝があるとわかる。まるで油を流したように綺麗な表面の石があつて、雨や水が降りかかっても溜まることもなく、湿りもしないなら、〈23〉そこには財宝があるとわかる。〔ネズミやイタチが1ヵ所に集まって、遊んだり立ち上がったたりしている場合には、そこには財宝があるとわかる。〕キジやシャコが〔毎日〕⁹⁰《92b》同じ場所に降り立ち、戯れ遊んでいると、〔そこには財宝があるとわかる。〕季節でもないのに蜜蜂がひとつところに群れているならば、〔そこは財宝が埋まっている場所だとわかる。〕また、すべての枝とは別に、1本だけがある場所に向けて伸びていたり、〔あるいは他の枝のほうに向き直っていたり、〕〔その枝が〕他のものよりも枝ぶりが良いような〔多くの枝をつけた〕木があれば、そこには財宝

⁸⁹ ロンドン写本に従う。校訂本ではナッド香（麝香、沈香、白檀、龍涎香などを配合した香料）となっている。なお、ロンドン写本では「多血」ではなく、「貧血 (xuškī-yi xūn)」である。

⁹⁰ 校訂本では、「キジやシャコがどちらも同じ場所に」となっているが、ロンドン写本に従って訳す。なおシャコは、キジ科の食用鳥。

が埋まっているとわかる。〔砂利の多い土地の中に、1頭の馬が砂浴びをするくらい〔の広さ〕で、封泥に適する柔らかい泥があるならば、そこには財宝があるとわかる。〕

これらはすべて、知者たちが、必要なときにその隠し財宝のところに到達する手だてとして、目印をつけたものである。

壺や、金属あるいはガラスの器に金を入れずに、そのまま地中に埋めてしまった場合、1年後にその場所に行っても、〔埋めた程度のところから〕金を見つけることができない。〔すると〕その人は、誰かが〔見つけ出して〕持ち去ったのだと考える。しかし盗まれたのではなく、金が重いために、地中深くに沈んでいってしまったのである。〔金は〕毎日少しずつ沈んでいく。〔湿った土壌ならば、毎日沈んでいき、〕ついには〔地下の〕水脈にまで達する。〔〔金は〕より塩分を含む土壌のほうへ向かう。〕

金の力について〔は多くの話があるが、〕少しばかり〔ここに〕記そう。

逸話：〔金の特性について、次のように言われている。〕

ある日、〔公正王〕アヌーシーラヴァーンは頭髪を剃るために宮廷の庭園に床屋(hajjam)を呼んだ。床屋が〔やってきて、〕王の頭に手をかけたとき、〔床屋は〕言った。「おおご主人さま。ご自身の娘を妻として私にくださいませ。そうすれば私は〔ルームの〕皇帝(qayşar)についてのあなたの悩みを取り除いてあげましょう。」

アヌーシーラヴァーンは独りごちた。「この卑しい男はなにを言っているのだ？」

彼は床屋がそのようなことを言ったのに〔たいそう〕驚いた。〔というのも、床屋は〔これまで〕十分に身のほどをわきまえていたからである。〕しかし、床屋が手にしていた剃刀が怖かったので何も言わず、〔わずかに〕こう答えた。「そのようにするから、まず散髪を済ませよ。」

散髪を終え、〔床屋が〕立ち去ると、〔アヌーシーラヴァーンは〕ボゾルグメフル(Buzurjmihir)⁹¹を呼び、彼に事情を説明した。ボゾルグメフルは〈24〉

⁹¹ サーサーン朝期の名宰相として名高い人物。アラビア語読みは、本書の表記同様／

床屋を連れてくるよう命じた。〔そして〕床屋に尋ねた。「おまえは散髪をしているときに、ご主君に向かって何と言ったのか？」

彼は答えた。「何も申し上げておりません。」

〔「ボゾルグメフルは」命じて、散髪をしたのと同じ場所に〔床屋を〕連れてこさせ、そして尋ねた。「散髪をしているときに、ご主君に向かって何と言ったのか？」

「あなたの娘を妻として私にください。そうすれば〔ルームの〕皇帝についてあなたの気苦労を取り除きましょう、と私は言いました。」

〔だが〕別の場所に立つと、〔床屋は〕その話を否定した。〕

ボゾルグメフルは、床屋が立っていた場所を掘り返すよう命じた。〔すると〕計り知れないほどの財宝が見つかった。彼は〔アヌーシーラヴァーンに〕《93a》言った。「おおご主君よ。床屋が口にしたあの言葉は、彼が言ったのではなく、この〔金の〕財宝が言わせたのです。〔床屋は〕手をあなたの頭の頭に置き、足をこの宝の上に置いていた〔ので、そうなった〕のです。」

アラビア語で次のような箴言がある。（アラビア語）「財宝の上に立つ者は、身のほどもを超えた望みを抱くものである。」

逸話：〔金の特性について、次のようにも言われている。〕

パナーホスロウ (Panāxusraw)⁹²——〔アドウド・アル=ダウラは彼の異名である〕——に、次のような話が〔情報官から〕上奏された。

ㄨ 「ブズルジュミフル」だが、本来のペルシア語の意味を勘案し、「ボゾルグメフル（大いなる親愛・偉大なる太陽神メフル）」と表記する。アヌーシーラヴァーンの宰相だったとされ、イスラーム時代の作品に多く取り上げられるが、伝説的な要素が多く、特定は困難である。Efr: “BOZORGMEHR” 参照。

⁹² パナーホスロウは、ブワイフ朝のアドウド・アル=ダウラ (Aḡud al-Dawla Abū Šujā‘ b. Rukn al-Dawla, 936-983年) の異名。アラビア語では Fannā Xusraw と綴られ、本書においても両方の綴りが見られる。

ある男がアーモル (Āmul)⁹³で荒れ地を購入し、そこを稲田とした。いま、その田からは、他では類がないほどに「すばらしい」米がとれ、毎年そこから1000ディーナールのあがりがある、と。パナーホスロウはその土地を「男の」言い値で買い、その地面を掘り起こすよう命じた。「すると」ホスロウ金貨のつまった甕が40個、地中から出てきた。彼は言った。「この稲田がすばらしい収穫を産むのは、この宝のせいだ。」

逸話：「同じく金の特性について。」

〔本書の著者は、ブー・サアド・タバシー (Bū Sa‘d Ṭabasī) と呼ばれていた〕1人の友人から次のように聞いた。私は彼の話に信頼を置いている。〔彼は私に言った。〕

ブハーラー (Buxārā) に気の触れた女が1人いた。女たちは彼女を追いかけ回し、からかって遊んだり、彼女の言葉を嘲り笑ったりしていた。ある日、〔彼女をからかおうと家に連れ込み、〕家の中で彼女に錦の着物を着せ、金や宝石の装飾品をつけ、〔台の上に座らせた。〕そして言った。「あんたに旦那さんを娶せてあげるわ。」

その女は金や宝石に目をやり、自分の身が〈25〉飾り立てられているのを見ると、理性ある言葉を話し始めた。彼女の狂気が治ったのかと、人々が疑うほどであった。〔「確かに」正気であった。だが、着物や飾りを〕脱がすと、彼女は元の気の触れた状態に戻った。

〔逸話：金の性質について、私は識者たちの本で次のようなことを読んだ。〕

〔アジャムの〕貴人たちは、妻や侍女と交わろうとするとき、黄金の帯を腰に巻いたと言われている。そして妻には、〔着物を脱ぎ、だが〕装身具は〔すべて〕身につけておくよう命じた。そのようにすれば、勇敢で、均整がとれ、見目美しく、知性があり、人々に好かれるような子供を授かる、と言うのである。息子が産まれたら、金貨や銀貨を子供のゆりかごの上で揺らし

⁹³ カスピ海東南岸の町。この地域は中東有数の稲作地帯である。ロンドン写本ではとくに地名は現れず、「境域 (ḥudūd)」となっている。

た。

人々〔の運勢〕をつかさどるのはこの2つ、〔すなわち金と銀であり、吉兆を得るには、この世界ではこの2つとともにあらんことを、〕と伝えられてきたが、〔おおよそそのとおりであろう。〕

〈26〉 指輪とそれに関して知っておくべき事柄⁹⁴

指輪は非常に美しく、〔貴人たちが〕指にはめておくべき装飾品である⁹⁵。高貴な人々は、「貴人が指輪をはめないのは、高貴さ〔と品格〕にふさわしくない」と言っている。指輪をつくり、指にはめた最初の人物はジャムシード〔・シャー〕である。

また、次のように言われている。「指輪のない貴人たちの指とは、旗のない旗竿⁹⁶のようなものである」と。指にとっての指輪は、腰にとっての腰帯⁹⁷のようなものである。腰は帯を締めた方が、〔腰帯のない腰よりも〕見栄えが良い。

貴人たちの指にはめられた指輪には、〔3つの〕ことがあらわされている。〔1つは〕申し分のない高貴さであり、〔もう1つは〕しっかりとした見解、〔3つめは〕正しい志である。なぜなら申し分のない高貴さをもつ者

⁹⁴ ロンドン写本ではこの章は「金」、「大麦」、「ブドウ酒」の章の後、97葉bの途中から始まる。

⁹⁵ ここでの「指輪」とは、台座に印章が嵌め込まれているものを指す。この台座 (nagīn) に対する印章部分が“muhr”と呼ばれるもので、少なくともイスラーム以前の時代からイランにおいては封印のために用いられた。とくに現在知られているサーサーン朝時代の印章 (seal) はさまざまな鉱石を材料としてつくられたものが多い。なかでももっとも多く用いられたのは、カーネリアン、碧玉、オニキス、瑪瑙などの石英系の鉱石で、その他にも金剛石、ラピスラズリ、翡翠といった珪酸塩鉱物、方解石、大理石、赤鉄鉱などの炭酸塩化合物、あるいはガラスやブロンズといった素材を用いたものがある。ただし、本文後段に見えるルビーやトルコ石を素材とするものは現在のところ、ほとんど知られていない (Göbl 1973: 23-24)。指輪とそれに用いる石についてはトゥースイーにも詳細な記述がある (‘Ajāyib: 138-159 参照)。

⁹⁶ どちらの写本も意味をとるのが困難なため、このように訳した。ただし、ロンドン写本では、“jāma-yi tūzī buwad bi ‘alam” となっており、“jāma-yi tūzī” は、ファールス地方のトゥーズという町で織られた綿花製の薄手の布地を指すとされる。その場合、訳は「柄のないトゥーズ布」といったあたりか。

⁹⁷ 校訂本には間違いがあるため、ロンドン写本に依拠する。

は自らを装飾品で飾らずにはいられない。しっかりとした見解をもつ者は、
[その] 象徴や意匠をこらしたものを求めずにはいられない。そして正しい
志をもつ者は印章を持たずにはいられないのである⁹⁸。というのも、貴人たちの
書簡が印章で封印されていなければ、それは見解と意志の脆弱さを示すもの
であり、封印のない宝蔵は、おぎなりで不注意なものでしかないからである。

スライマーン (Sulaymān)⁹⁹—— 彼に平安あれ —— は指輪を傷つけたために、
王権が彼から離れてしまったが、[スライマーンの] 栄光とは、彼が身
につけていた指輪[の「輪」の部分]ではなく、「印章」の部分にあった。

預言者〔ムスタファー〕—— アッラーが彼に祝福と平安を与えられんことを —— は、
指輪を指にはめ、[それでもって] 各地域に送付する書簡に封印を施して送っていた。
その理由は、次のようなものであった。封印されていない彼の書簡が〔アジャムの王〕
パルヴィーズ (Parwīz)¹⁰⁰のもとに届いたとき、パルヴィーズはそのことに腹を立て、
書簡を読まずに破り捨て、言った。「書簡に封印がないのは、頭に〈27〉帽子を被
っていないようなものである。頭に帽子を被らずに公の場 (anjuman) に出るのはふさ
わしくない。書簡に封印がない場合、誰でもあれ望めば、読むことができる。しか
し、封印がある場合には、[その書簡が] 送られた相手の者だけが読む」と¹⁰¹。

《98a》 また、知性ある者たちは、「〔王国内では〕 剣と筆はどちらも王の指輪
の下僕 (xādimān) である」と言う。すなわち、王権というものは、その2つ
によって獲得され、秩序立てられるが、〔それらが獲得するものは何であ

⁹⁸ 3つの理由を述べたこの部分は、ベルリン写本に基づく校訂本があまり意味をなさない
ので、ロンドン写本に基づいて訳出した。

⁹⁹ 旧約聖書の預言者ソロモン。ダビデの息子。鳥や動物と話す能力を有していたとされる。

¹⁰⁰ サーサーン朝末期の君主ホスロウ2世（在位591-628年）のこと。ニザーミーの『ホス
ロウとシーリーン (Xusraw wa Šīrīn)』など、イスラーム時代の文学作品によく登場する。
ムハンマドと同時代の王である。

¹⁰¹ タバリーの史書にはこのような逸話は載せられていないが、これに近い話がハディース
中の「知識の伝達」に関する項目に見られる (牧野訳 1993, i: 42)。

れ] 王の指輪の命令下に入る。指輪が望まない限りは、剣も筆も [王のもとには] 至らない¹⁰²。

人が身につける装飾品はいずれも、それをつけるのにふさわしい時とそうでない時とがある。しかし指輪という装飾品だけは別である。いかなる場合でも指輪は身につけていなければならない。なぜならそれは、その1本を立てて、神 —— その栄光のいや増さんことを —— の唯一性をさし示す指を飾るものだからである¹⁰³。この装飾品は、[指がもつ] このような特性ゆえに、指にとっての[賜衣や] 恩寵のようなものである。それはあたかも、武芸をふるうことによって貴人のそば近くに仕えようとする戦士のごときである。[貴人は] その戦士に[ふさわしい] 恩寵を与え[ようとするが]、その恩寵によってこそ、彼は他の同輩たちから抜きん出る。そして、彼が揮った武芸[や精励ぶり] に応じて、黄金の首飾りが彼の頸にかけられ、あるいは黄金の腰帯が与えられ、[彼の] 腰に巻かれるのである。

指輪の種類はさまざまに[要の石はたくさん] あるが、[帝] 王たちにふさわしいのは、次の2つの石を除いて他にない。1つはルビーである。[ルビーは] 太陽のかけらたる鉱物で、熔解しない鉱物のなかの王様である。その美点は、光彩を放ち、火に強く、ダイヤモンドを除くどの石よりも固いことである。また、疫病を防ぎ、渴きを抑える特性をもつ。

〔伝承：〕 [預言者の] 伝承には次のようにある。

預言者 [ムスタファー] —— 彼に平安あれ —— が〈28〉メディナ (Madīna) にいて、「塹壕の戦い (ḥarb-i xandaq)」を戦おうとしていた頃¹⁰⁴、メディナで疫病が流行した。[ムハンマド・] ムスタファー —— 彼に平安あ

¹⁰² 剣で武力を、筆で行政力を意味し、その2つがなければ王権を獲得し秩序立てることはできないが、結局は、王の命運を左右するのは指輪だということ。

¹⁰³ イスラームでは、礼拝の際に、神の唯一性の証言 (ṣahāda) が行われるが、この座礼のとき、両手はひざの上におき、右手を握り、人差し指を立てる。人差し指は、アラビア語では「証言」と同じく“ṣahāda”と呼ばれ、信仰告白の指と考えられている。これらのことから、指が、神の唯一性を認め、またそれを象徴するものとされているのだろう。

¹⁰⁴ 「塹壕の戦い」は627年に起こった戦いで、メッカの軍勢に対し、メディナのムハンマドは塹壕を築いて防戦し、メッカ軍を退却させた。

れ——は、2000ディーナール以上もするルビーを1つ身につけていた〔ために、無事であった〕。

もう1つはトルコ石であるが、これは、〔「吉兆」にかかわる〕その名前のゆえであり¹⁰⁵、また見る者をうっとり心地よくさせるからである。その特性は、邪視や夜泣きを防ぐことである。

指輪は、占いや夢判断においていろいろな事柄の象徴となる。それについては、さまざまなことが言われている。〔夢に現れる指輪は〕王たちにとっては領地や王権を示し、他の人々にとっては職や仕事を、また別の人々にとっては貴人たちから与えられる恩寵や、あるいはその人がかかわっている事柄の行く末¹⁰⁶を判断する。

逸話：ルームのイスカンドルは、〔帝王となって〕世界中を巡る前にいろいろな夢を見ていたが、〔それらは〕どの道をとっても、この世界が彼のものとなり、〔王たちを封じ込める〕であろうことを示していた。〔イスカンドルが見ていた〕そのような夢の中に、《98b》1つだけ次のような夢があった。全世界が1つの指輪になり、彼の指に収まった。しかしその指輪には、要の石がなかった。そこでアリストテレス (Aristuṭālīs) に尋ねたところ、彼はこう言った。「この世界はすべてあなたのものとなりましょう。しかし、あなたはそれを十分に享受することはないでしょう。なんとなれば、指輪は領地を、石はその支配者をあらわすのですから。」

逸話：〔アジャムの最後の王であった〕シャフレイールの子ヤズダゲルドは、ある日、宮廷の庭園内のあずまやに座っていた。指にはトルコ石の指輪を〔1つ〕はめていた。〔そこへ〕1本の矢が飛んできて、指輪の石に当

¹⁰⁵ トルコ石は、ペルシア語で “pīrūza/fīrūza” と呼ばれ、「勝利」を意味する “pīrūzī/fīrūzī” とよく似た言葉である。ピールーニー著『宝石大全 (*al-Jamāhir fī al-jawāhir*)』では、「占いでは、勝利と栄光の石である。なぜならその名前が、ペルシア語で勝利を意味するからである」と記される (*Jamāhir*: 276)。ホラーサーン地方にその鉱山がある。ちなみにロンドン写本では、“az bahr-i ‘azīzī”ではなく、“az bahr-i ‘arūsī”「婚礼用」となっている。

¹⁰⁶ ロンドン写本に従い“‘āqibat”と読む。

たった。〔石は〕粉々に碎けて指輪からはずれ、〔矢は〕地面に落ちた。誰も〈29〉その矢がどこから飛んできたのかわからなかった。どれほど探しても、何も見つからなかった。彼は落胆し、これが何を暗示するのか不安になった。自身〔に仕える〕識者やナディーム¹⁰⁷たちに尋ねたが、誰もそれを解釈できなかった。また幾ばくか〔その意味が〕わかっていた者は、あえて何も言わなかった。その後、時をおかずして彼は〔殺されて〕死に、王権は彼の一族から離れた。

逸話：〔同様に、指輪のもつ意味について〕次のように言われている。

〔ハールーン・アル＝ラシードとズバイダの息子〕ムハンマド・アミン(Muḥammad Amīn)¹⁰⁸は、信徒たちの長であったとき、〔ある日〕庭の池のほとりに腰掛け、ルビーの〔石のついた指輪をはめていた。その石には、(アラビア語)「アッラーは永遠なり。かれ以外は滅す」と刻まれていた。〕彼はその指輪をいじっていたが、次のような対句でたとえて言った。(アラビア語)

我らは、大切な者どもの首を刎ねよう

我らにとって、まさに彼らは高慢で、不正を為すがゆえに

彼はこの句でもって、敵対していたマームーンのことを暗に言ったのであった。ちょうどそのとき、彼は自分の侍女に腹を立て、怒りのあまり、その指輪を彼女に投げつけた。指輪の石がとびはね、指輪も石もともに池の中に落ちてしまった。人々がどれほど〔池の中に〕入って探しても、池の水を抜いて空っぽにしても、石は見つからなかった。〔ルビーの〕石の代わり

¹⁰⁷ ナディーム (nadīm) は、酒宴や遊興の際の君主の陪席者を意味する。その職務について『統治の書』は、「ナディームは家柄がよく、徳があり (faḍīl)、朗らかで、純粋な信仰を持ち、清潔な服装をしていなければならない。冗談についても真面目な話でも、雑談、物語、奇談をたくさん覚えていて上手に語り、常に立派にお仕えし、双六、チェスの相手をして遊ぶことができればならない。ハープを弾き、楽器の演奏ができればよりよい」(Siyar al-mulūk: 121)と述べている。この時期、実際にナディームとなったのは学者、詩人、医師、書記たちであった。本章の逸話の場合は、ナディームもまた、夢解きをする技術をもっていたと考えられる。稲葉 1995: 104-118 も参照のこと。

¹⁰⁸ アッバース朝第6代カリフ(在位809-813年)。母親はズバイダ。異母兄のマームーンと対立し、後出のターヒルによってバグダードで殺害される。

に、1 個の白い石が池の中にあるだけだった¹⁰⁹。その後、時をおかずして片目のターヒル (Ṭāhir-i a'war) 〔・ブン・アル=フサイン〕¹¹⁰が〔バグダードに〕やってきて彼と戦い、まさにその宮廷〔の庭〕で〔ムハンマド・アミン〕を殺害した。

指輪については、この程度のことを述べておこう。

¹⁰⁹ ロンドン写本は、「〔人々が〕見つけたときには、要の石のかわりに、石ころが1つ載っていた」である。

¹¹⁰ Ṭāhir b. al-Ḥusayn b. Muṣ'ab b. Ruzayq (159-207/776-822年) のこと。アッバース朝カリフ、マームーンの支持者。813年、マームーンとアミンの対立時に、アミンとの戦いのためにバグダードに派遣され、アミンを殺害した。821年にはホラーサーン総督に任命されるが、翌年にはカリフの名をはずしてフトバを詠み、貨幣を発行した。彼の子孫は、その後5代にわたり、ホラーサーン地方およびイラクを支配した。EP: “ṬĀHIR” 参照。

〈30〉 〔大麦の〕 苗とそれに関して知っておくべき事柄¹¹¹

アジャムの王たちは、〔いつの時代でも、いかなる場合でも、新しく〕芽吹いた大麦を大変めでたいものと見なしていた。なぜなら、それには多くの益があるからである。大麦は食用の穀物の中で最も早く稔り、〔芽吹くと青々とする。〕《93b》「穀物庫から出て40日で穀物庫へ戻る」とたとえられている。また、大麦はどこに播かれても芽を出し、どの穀物よりも早く成長する。

薬用にも食用にも適しているのが大麦であり、賢人や隠者たちは自らの食事に大麦を選んでいる。大麦を食べると、瀉血〔や医者〕が必要となるような、滞ったり濁ったりする血が生じず、さらに血液性や黄胆汁性〔や黒胆汁性〕の病気の心配がほとんどない、と言われている。イラクの医師たちは大麦を「祝福された水 (mā' [al-]mubārak)」と呼んでいる。

またそれは、24種類のよく知られた病気に効果がある。それらは〔熱からくる病であり〕、炎症 (sūḥa)¹¹²、脱毛症 (dā' al-ḥayya)¹¹³、間欠熱 (ḥummā-yi muṭbiqa)、チフス熱 (ḥummā-yi muḥriqa)、咳 (surfa)、脳炎 (sarsām[-i garm])、消耗熱 (diqq)、結核 (sil)、肝臓の痙攣 (tapiš-i jigar)¹¹⁴、〔激しい動悸 (xufqān-i garm)、腎臓の痙攣 (tapiš-i gurda)、〕胃の乾燥 (yubūsat-i mi'da)¹¹⁵、偽の渴き ('aṭaš-i kāḍib) などである。〔大麦はさらに〕睾丸、頭、胸、脇腹、肝臓、胃、骨折、肋骨、火傷、痛風の塗り薬 (ṭaly) とするのに適し、虫に対しても

¹¹¹ ロンドン写本では本章は「金」の章に続き、93葉aから始まる。

¹¹² ミーノヴィーによると、sūḥaは、sūja > sūziš の意ではないかとされており、それに従った。ロンドン写本は“surfa”「咳」。

¹¹³ 直訳は「ヘビの病」。

¹¹⁴ ロンドン写本に従い“tapiš-i jigar”と読む。

¹¹⁵ 直訳は「胃の便秘」。消化不良や胃潰瘍のようなものか。ロンドン写本は、ŠWRもしくはTNWRなど判読し難い。

効果がある。

大麦の軟膏は黄胆汁による発疹に効き、小麦の軟膏は黒胆汁による発疹に効く¹¹⁶。また、大麦のふすまを鍋に入れてよく煮立て、足の神経が弱って〈31〉立ち上がれなくなったり、あるいは足や膝の関節が固まってしまった人の足を〔膝頭まで〕その煮汁に浸すと、治る。小麦のふすまも同じような効き目があり、実証済みである。

バグダードでは、大麦を煮立ててその煮汁を濾し、ゴマ油と混ぜて再び煮立て、水分を飛ばして軟膏をつくる。その軟膏を黄胆汁による腫れ物に塗る〔と、良くなる〕。女たちが子宮の痛みや腫れに対し、綿に軟膏をつけて用いると、とても効果がある。

大麦を播種する時期の月蝕の夜に大麦を播き、それで作ったパンを狂人に与え〔て食べさせ〕ると、正気を取り戻す、と言われている。〔ノウルーズの月に、〕月が満ち、金星と相照 (nigarān)¹¹⁷するとき大麦を播くと、その大麦を食べた痩せ馬は、必ず肥える。

また、その年の豊凶は大麦に現れる¹¹⁸。大麦が真っ直ぐ均等に育つなら、その年は豊作だという証である。逆に、曲がったり、育ち方にばらつきがあるようなら、凶作の年となる。〔またヒバリが大麦の下を飛び、鳴き声をあげるならば、豊作の年となる徴であり、ウズラが大麦の苗の中でじっとしているのも、豊作の徴である。〕

〔伝承：〕使徒〔ムスタファー〕—— 彼に平安あれ —— は、〔大麦について〕次のように述べている。

〔使徒は〕言った。（アラビア語）「大麦のパンはなんとすばらしいパンであることか。《94a》それで満足し、腹を満たす者〔にとって〕は。なぜならそれは私のパンであり、また私以外の預言者たちのパンであるのだから」

¹¹⁶ ロンドン写本では、「大麦の軟膏は黄胆汁の力を削ぎ、小麦の軟膏は黒胆汁の力を削ぐ。」

¹¹⁷ 惑星同士が60度、90度、180度など、たがいに影響を及ぼし合うとされる位置関係になること。

¹¹⁸ ロンドン写本では、「1年の豊凶を、農夫たちは大麦から判断する」となっている。

と。つまり、(ペルシア語)「大麦の丸パンとは実に良い丸パンである。それによって満足し、満腹になろうとする者にとって。なぜならそれは私のパンであり、他の預言者たちのパンなのだから。」

老婆たちは大麦を用いて占いをし、吉凶の判断を告げる。〔大麦以外にこのような特性をもつ穀物はない。〕まじない師は、疣〔を落とすため〕に大麦でまじないを行う。〔それは〕月が欠けるとき¹¹⁹で、疣に〈32〉大麦をかぶせると、疣が落ちる。また一部の女たちは、ファルヴァルディーン月に〔澄んだ水で大麦を湿らせ〕、娘の名を唱えながら播く。〔その大麦が稔ったら、大麦の汁で娘の髪を洗う。そうすると神のお力によって〕髪が伸びる。

逸話：私は次のように聞いた。

ある日、〔公正王アヌーシーラヴァーン・〕ホスロウの息子ホルムズ(Hurmuz)〔・シャー〕¹²⁰がある大麦の畑を通りかかった。〔人々が〕苗に水を与えており、その水が畑から溢れ出して道をふさいでいた。ファルヴァルディーン月のことであつた。〔ホルムズは〕命じて、大麦〔畑〕から流れ出している水を水差し一杯に汲ませ、飲んだ。そして言った。「〔私は父から聞いたことがある。父が言うには、〕大麦は祝福された穀物であり、その苗は〔見るに〕めでたい苗である。それに注がれ、そこから溢れ出した水は、〔その水を飲む者にとって〕疲労を癒し、胃の疲れ¹²¹を取り除く。また、次の年に大麦が稔るまで、〔痛みや〕喉の渇きや病気の心配がない、と。」

逸話：ある日、シャムス・〔アル=マアーリー〕・カーブース〔・ブン〕・

¹¹⁹ 校訂本は“māh-i kās”となっており、ミーノヴィーはカーヌーン月の可能性があるとしているが(Mīnovī 2002: 31, n.2)、ロンドン写本の“ba-kāst-i māh”に基づいて訳出する。

¹²⁰ 校訂本には“Hurmuz pidar-i Xusraw (ホスロウの父ホルムズ)”とあるが、事実関係からこれをpisar (息子)の誤りと考えた。ホルムズはサーサーン朝のホルムズ4世(在位579-590年)を指す。ロンドン写本は正しく伝える。

¹²¹ ロンドン写本は「胃の乾燥(xuškī-yi mi'da)」。この場合、「乾燥(xuškī)」はアラビア語“yubūsat”のペルシア語訳なので、先に出た24種の病気の「胃の乾燥」と同じものを指すのだろう。

ヴォシュマギール (Šams al-Ma‘ālī Qābūs-i Wušmagīr)¹²²のもとに、1人の男が宮廷にやってきており、裸馬を連れて、「〔この馬は私が畑に放したものではないが、私の作物を食べており、〕自分の畑で捕まえた」と言っている、という知らせが届いた。

〔カーブースは〕尋ねた。「〔畑は〕大麦か、小麦か？」

〔男は〕言った。「大麦です。」

彼は馬の持ち主を連れて来るよう命じ、稔ったときの大麦と同額の金を彼（馬主）から取り上げ、畑の持ち主に与えた。そして言った。「地主たちには次のように言え。地主が大麦をよく稔らせようと思うなら、この時期に馬に食べさせよ、と。〔そうすれば、馬は肥え、大麦もまたよく稔る。〕〔そうではあるものの、〕私はこの金を罰として取り立てた。それは馬の持ち主たちに、馬が他人の畑に入り込まないように気をつけさせるためであり、〔さらには大麦を軽んずる人々への戒めのためである。〕なぜなら、大麦は預言者たちの糧であり、信仰を正しく保つ〈33〉敬虔な人々の糧であり、そして王権を支える馬や家畜の糧だからである。」

逸話：〔大麦のすばらしさについては〕次のようにも言われている。

アーダム —— 彼に平安あれ —— は小麦を食べていた。天国から追放され〔地上に降り〕たとき、至高なる神は《94b》小麦を彼の食物とした。しかしいくら食べても満腹にはならず、〔食欲が増すばかりであった。〕彼は至高なる神に訴えた。〔神は〕〔彼に慈悲を示し、〕大麦を与えた。アーダムがそれでパンを作って食べると、満腹になり〔胃も落ち着いた。〕その後、新鮮で青々とした大麦を見ると、〔彼の心は楽しく、生き生きとなったので、〕大麦を吉兆とみなした。

そのとき以来、アジャムの王たちの間では、大麦の恵みとめでたさゆえに、毎年ノウルーズ〔の日〕に〔芽吹いた〕大麦を所望する〔習慣が〕つづいたのである。

¹²² ズィヤール朝第4代君主（在位977-81, 998-1012/3年）。学者・詩人としても名高く、彼にちなんで名づけられた『カーブースの書 (Qābūs-nāma)』の著者カイ・カーウス (Kay Kā'ūs) は彼の孫にあたる。

剣は王権の衛兵であり、共同体の守り手である。それがなければ、いかなる〔信仰も〕王権もうまくたち行かない。なぜなら統治の及ぶ範囲は、剣によつてのみ護持することができるからである。

鉱山からとり出された最初の鉱物は鉄であった。人間にとって最も必須の道具〔の原料〕は鉄だからである。鉄から武器をつくった最初の人物はジャムシードである。武器というものはどれも威厳を備え、必要不可欠なものだが、剣以上に威厳があり必要とされる武器はない。《99a》なぜなら剣は、炎のように光を発し〔鋭く、〕また2つの元素¹²⁴を内にもっているからである。知者たちは次のように言っている。鉄のない世界とは、陰茎を持たぬ若者のようなもので、そこからはいかなる〔新しい〕ものも産み出されない。

知性をもって眺めてみると、世界の安定というのはすべて、恐怖と希望のもとにある。そして恐怖と希望は、剣と密接に結びついている。なんとなれば、ある者は望みを達成するために、鉄を用いて努力し、またある者は〔滅びないように〕鉄を避けるが、〔それは〕鉄への恐れが彼を護っているからである。

諸王の頭上の王冠は、鉄〔とその働き〕のおかげでそこにあり、彼らの宝蔵が満ちるのもまた、鉄のおかげである。至高なる神はすべての鉱物を装飾品として人間にお与えになったが、ただ鉄のみが、あらゆる技術工芸 (ṣanāʿat) の役に立つ¹²⁵。〔鉄の働きが他の鉱物より勝っているのは、人間が他

¹²³ ロンドン写本では「指輪」の章の後、98葉bからこの章が始まる。

¹²⁴ ベルリン写本に従い、“jasadayn”と読む。ミーノヴィーによると、剣は、4要素のうち、「火」と「水」の元素をもつとされる (Minovī 2002: 101)。おそらくは剣を鍛えるために、火と水が用いられるためであろう。ロンドン写本にはこの一文はない。

¹²⁵ ロンドン写本では、「至高なる神はすべての鉱物を人間にお与えになったが、鉄のみは偉大な人々に限って与えられた」となっている。

の動物より優れているようなものである、と言われている。なんとすれば、〕世界が飾られ、繁栄しているのも〔人間と〕鉄のおかげである。

剣の位〔の高さ〕を示す最もよい例は、預言者 —— 彼に平安あれ —— に、征服の道具として剣が与えられたことである。たとえば、（アラビア語）「私は剣とともに〈35〉遣わされた」と彼はおっしゃっている。またトーラーでは、彼について、（アラビア語）「闘いの主、剣の所持者」と〔至高なる神は〕言及されている¹²⁶。

この道具（剣）が高い位を持っているのは、それが「勇敢さ」〔を發揮するため〕の道具であることによる。というのも、人間に備わる最も偉大な美德は「勇敢さ」であり、それは他の動物にはない¹²⁷。そしてこの「勇敢さ」については、次のように言われている。（アラビア語）「それは怒りの力であり、人は、彼と敵対するものに対して、その力を振るうことにより、うち勝つのである」と。つまり（ペルシア語）「それは怒りの力であり、人は彼に敵対するものに対して、それでもってうち勝とうとする」という意味である。

次のように言われている。「勇敢さ」という美德は先天的なものであり、後天的なものではない。しかしながら後から高められるものもある。〔たとえば鉄は、もともとその中に「鋭さ」の性質を持っているが、加工を施すことで武器となり、鋭さを増す¹²⁸。〕勇敢さの宿る場所は肝臓だとされている。肝臓は血の宿る場所であり、それゆえ勇敢な人は血が流れることによってより勇ましくなる。というのも、灯火が油によってそうなるように、勇敢さは血によって力を得るからである。〔肝臓の大きな若者は血の気が多く、より勇ましいものである。〕

¹²⁶ トーラーに直接記されているわけではないが、ムハンマドは「剣と旗竿を持つ者」と予言されていたようである。

¹²⁷ ロンドン写本に従い訳出する。校訂本は、「勇敢さは人間や他の動物に備わる最も偉大な美德である」となり、意味をなさない。

¹²⁸ ロンドン写本では“iktisāb az ātaš paḍīrad（後天的なものは火から得られる）”となっているが、校訂本の読み“ārayiš paḍīrad”を援用してこう考えた。

また次のようにも言われる。勇敢さにおいて能動的なものは心臓の動物的力であり、受動的なものは肝臓の生来の力である¹²⁹。必要が生じると、この2つから、石と鋼のあいだで熾る火のように、勇敢さという美德が現れるが、それを用いて闘うためには、〔それを〕燃え立たせねばならない。

次のようにたとえられる。〔心臓が強く、また肝臓も強いと、その人物はきわめて勇敢である。《99b》勇者にとって必要なすべてのものが彼に備わっているためである。〕〔一方〕心臓が強く、肝臓が弱いと、その人は闘いの序盤においては勇猛で血に飢えているが、終盤になると、気が萎えて懦弱になる。心臓が弱く、肝臓が強いと、闘いの序盤は気弱で懦弱だが、終盤には激しく、血に飢えるようになる。

〔心臓や肝臓に備わる熱質や勇敢さという力の必要性は、〕胃や肝臓の消化能力が必要なことと〈36〉同じである。消化する力が弱ければ、人は生活を楽しめず、享受することがないと言われる。〔同様に、勇敢さという力が欠ける人は、人生を楽しまず、味わうこともないのである¹³⁰。〕というのも常にびくびくし、すべてのものから逃れようとするからである。〔不安や恐怖のうちにある人生が楽しくないことは言うまでもない。〕

このような勇敢さは、力の強い獣のごとく描写される。その頭は、鉄を噛みちぎる獅子の頭のごとく、その足は、岩石を踏み砕く象の足のごとく、その尾は炎を吐き出す龍の頭のごとし、と。〔このようにたとえられ、そして〕勇敢なる人は次のようであるべきだ、と言われる。闘いの序盤においては獅子のごとく勇猛に前進し、闘いの中盤においては象のごとく耐え、力を漲らせ、威圧感を保ち、そして闘いの終盤においては龍のごとく怒りを発し、苦痛に耐え、激しく殺すのだ、と。

さて、勇敢さの種類については今述べたとおりだが、それ〔を〕発揮するた

¹²⁹ ギリシア医学によれば、動物的力の場合は心臓であり、植物的（あるいは本能的）力の場合は肝臓にある。ここでは、心臓の動物的力がまず働きかけ、肝臓がそれをうけて、勇敢さが生じる、という機序を述べているのだろう。

¹³⁰ この一文はベルリン写本にはないものの、ミーノヴィーは校訂中に補っている。おそらくこの部分のみはロンドン写本を何らかのかたちで参照したのであろう。

め]の道具が剣である。

〔この知識について明らかにされているところでは、〕剣には14の種類がある。第1に「イエメン剣 (yamānī)」、第2に「ヒンド剣 (hidnī)」、第3に「カルア剣 (qal'ī)」、第4に「スライマーン剣 (sulaymānī)」、第5に「ニシビス剣 (naṣībī)」、第6に「フランク剣 (faranjī)¹³¹」、第7に「サルマーン剣 (salmānī)」、第8に「ムワッラド剣 (muwallad[ī])」、第9に「バフル剣 (baḥrī)」、第10に「ダマスクス剣 (dimašqī)」、第11に「ミスル剣 (miṣrī)¹³²」、第12に「ハニーファ剣 (ḥanīfī)」、第13に「軟鉄剣 (narm-i āhan)」、第14に「カラチュリ剣 (qarājūrī)」である¹³³。

以上のそれぞれが、〔ヒンド剣は何種類に、イエメン剣は何種類に、というように〕他のさまざまな種類に〔さらに〕分かれるが、それらを全部述べると長くなってしまう〔ので、簡単に1種類のみ、イエメン剣について述べよう。〕

イエメン剣には次のような種類のものがある。刀身¹³⁴は平らで一定の幅をもち、青みがかっている。〔しかし〕玉鋼〔の状態で〕は赤みがかっている。切っ先にむけて、白い模様が〈37〉銀糸のように連なっている。これを「カラーギー (kalāgī)¹³⁵」と呼ぶ。別の種類を「ムシャッタブ (muṣaṭṭab)¹³⁶」

¹³¹ 校訂本は“marrix” (火星) だが、ロンドン写本に従う。EF: “IFRANDI” 参照。

¹³² ロンドン写本では「バスラ剣 (baṣrī)」。

¹³³ ホラサーニーは、キンディー (al-Kindī 801-876年) に始まる、イスラーム時代の著述家たちによる剣の分類名称を挙げている (Khorasani 2006: 114-123)。その中には本書の当該部分も挙げられており、「イエメン剣」「ヒンド剣」「カルア剣」「スライマーン剣」「ムワッラド剣」「ダマスクス剣」「ミスル剣」「軟鉄剣」の8種がキンディーによって挙げられているものと同一だとする。ただし、ロンドン写本に基づく「フランク剣」を入れると9種が、他、「サルマーン剣」や「バスラ剣」を含むと11種がキンディーの挙げる剣の種類と合致する。それぞれの剣の詳細については、Khorasani 2006を参照のこと。

¹³⁴ 「刀身」と訳した“gawhar”はまた、鉄、鋼、刃紋の意味もある。

¹³⁵ “kalāgī”は「カラスの」という意味のペルシア語で、本書のロシア語訳 (Розенфельд 1961: 204) では、“Его называют вороненным”として、「錆防止のためにブリューイング (青焼処理) すること」訳しているが、その根拠はよくわからない。

¹³⁶ “muṣaṭṭab”はアラビア語で「溝が掘られた」の意。一般に中東、西アジアの刀剣のノ

と言うが、「ムシャッタブ」には縞模様の出方によって4つの種類がある。1つは、縞模様が明瞭ではなく、その刀紋は蠢く蟻の脚のようである¹³⁷。もう1つは縞模様がはっきりしており、《100a》 刃紋は真珠のように円形で、「真珠紋様 (lu'lu'[i])」と呼ばれる。3つ目は十字形の縞模様をもつもので、その刃紋は〔それを〕斜めに傾けたときにのみ浮き上がる。4つ目は無地に近く、縞模様もうっすらとしたものである。この〔剣の〕長さは手3つ分と指4本分で、身幅は指4本分である。その刀身は黒みがかっており、「ブースターニー (būstānī)¹³⁸」と呼ばれる。さらに、〔イエメン剣の〕別の種類のものは無地で、長さが手3つ半分、身幅が指4本分、重さは2.5マンから2.75マン¹³⁹である。

ところで、アリストテレスがイस्कンダルの剣のために造った鋼材がある。〔非常に〕珍しい話なので、そのことについても触れておこう。アリストテレスは次のように述べている。ひとつまみの〔良質の〕磁鉄、ひとつまみの珊瑚、ひとつまみの緑青を手に入れ、その3つを細かく砕き、混ぜ合わせる。ついで〔やすりがけした〕軟鉄1マンを〔坩堝に〕入れ、先に砕いた粉から12オンス¹⁴⁰を〔その中に〕加え、火にかけて溶かす。そして坩堝の中に流し込む。それからヘンルーダひとつまみ、没食子ひとつまみ、櫨の実ひ

＼材料は「ダマスクス鋼」と呼ばれるものである。刀身の表面にはきわめて特徴的な縞模様が現れ、これを「ダマスクス紋様」と呼ぶこともある。ダマスクス鋼は実際にはインドで産するウーツ鋼という高炭素鋼のことで、鉄鉱石に木炭や植物材料などの不純物を溶かし込み製造される。成分や溶解温度、その他の条件により鋼段階で細かな縞模様が生じ、鍛造の際にこれに溝を刻んだり、円形の刻印を施すことで、「梯子紋様 (ladder pattern)」や「薔薇紋様 (rose pattern)」などの独特の紋様が現れる。ここでいう「ムシャッタブ」はこの縞模様を意味し、“jū”はその縞模様の溝を指すと解した。Khorasani 2006: 99-104 および Vorhoeven *et al.* 1998 を参照。

¹³⁷ 校訂本は“zabāna zanān”。辞書的には「炎が燃え上がる」という意味だが、これが刃紋の固有名詞であるのか、「燃え上がるような」という形容詞なのか不明である。ここでは「蟻の脚」との関連で「蠢く」と訳した。ロンドン写本にはこの単語は現れない。

¹³⁸ “būstānī”は「庭園・果樹園」と関係ある言葉だろうが、ここでの意味は不明である。

¹³⁹ 校訂本原文は「3マンから10サティール引いた分」。サティールは1マンの40分の1を表す重量単位。

¹⁴⁰ 単位は「ウーキーヤ (ūqīya)」。

とつまみ、貝殻ひとつまみ、そしてハンミョウを同じ量だけ取り、細かく砕いて〈38〉混ぜ合わせる。そしてそこから2オンス分を〔1マンの〕鉄に合せて、空気を送る。そうするとすべてが1つに溶け合い、鉄がそれらを吸収する。その後冷却し、それを用いて剣を打てば、〔貴重で、きわめて〕良質の剣ができる。

バフラーム〔・グール〕(Bahrām[-gūr])¹⁴¹の『武具の書 (Silāḥ-nāma)¹⁴²』では次のように述べられている。剣を鞘から抜いたとき、そこから呻き声が聞こえるならば、それは〔多くの〕血が流れる徴である。〔また、光を放つようであれば、剣の持ち主が敵に対して勝利をおさめるという徴であり、〕剣がひとりでに鞘から抜けるならば、戦争が生じる徴となる。また、抜き身の剣を生後7日の子供のそばに置いておくと、その子供は勇敢になる。

¹⁴¹ バフラーム・グールはサーサーン朝中期の王バフラーム5世（在位421-438年）の異名。狩猟を好み、特にノロバ（ペルシア語で「グール」）の狩りを好んだことから、こう呼ばれた。武術に秀でた勇敢な王として豊富な伝説や伝承に彩られ、ニザーミーのロマンス詩『七王妃物語 (Haft-paykar)』の主人公でもある。幼少時には、後出のヒーラの王ヌウマーンとその息子ムンズィルのもとで養育され、ムンズィルの援けでサーサーン朝の帝王として即位した (EI: “BAHRĀM V GŌR”)。

¹⁴² この本については知られていない。だが、ロンドン写本では、「バフラーム・グールの『武具の書』で私が読んだ (xwānda-am) 徴は」と記されていることから、当時は実在し、知られた本だったのだろう。

〈39〉 弓矢とそれに関して知っておくべき事柄

弓矢は、持つにふさわしい武器であり、それを扱うことはよき嗜みである¹⁴³。〔我々の〕預言者 —— 彼に平安あれ —— は、次のようにおっしゃっている。（アラビア語）「汝らの子供たちに弓術と水泳を教えよ」¹⁴⁴と。〔その意味はつまり〕（ペルシア語）「子供たちに弓術と泳ぎを教えよ」である。

最初に弓矢をつくった人物は、ガユーマルス〔・シャー〕であった。その当時、彼の弓は木製で、骨は使われておらず、綿打ち弓 (darūna-yi ḥallājān) のように1本の木からできていた。矢は葦¹⁴⁵でできており、3枚の矢羽と骨製の鏃とが用いられていた。その後、マヌーチェフル (Manūčīhr)¹⁴⁶の時代に、アーラシュ・ヴァハーダーン (Āraš-i Wahādān)¹⁴⁷が現れた。《100b》〔彼はマヌーチェフルの軍司令官であり、弓術にかけては世の中で及ぶ者はなく、弓矢の経験と知識を、世の人々が驚くほど完全な段階にまで達せしめた。彼は弓を5つの部分に分けて木でつくり、それらを膠でつなぎ合わせて補強し

¹⁴³ ロンドン写本では、「弓矢は持つにふさわしい武器であり、学ばなければならない嗜みである。それを扱うことは、称えられるべき技芸である」となっている。

¹⁴⁴ Wensinck 1992 からは、このハディースは見つからなかった。

¹⁴⁵ ミーノヴィーは “gilgīn” と読み、「泥製の」としている (Mīnovī 2002: 131) が、“kilkīn”「葦製の」と考える。

¹⁴⁶ 『王の書』に登場する伝説上のイランの王。アーファリードゥーンの息子イーラジュの孫にあたる。

¹⁴⁷ アーラシュは『王の書』に出てくる弓の名手。トゥーラーン王アフラスィヤーブと戦い劣勢に陥ったマヌーチェフルがイランとトゥーラーンの国境を定めようと、アーラシュに弓を射させたところ、その矢はダマーヴァンド山からジャイフーン川（アム川）まで飛び、ジャイフーン川が両者の国境となった、と伝えられる。ヴァハーダーンについては、ミーノヴィーは別人との混同で間違いだと指摘する (Mīnovī 2002: 102)。

た¹⁴⁸。〕そして鏃は鉄でつくった。その後、バフラー・グールの時代に弓術は〔格段に〕進歩した。バフラーは弓を骨で補強して、矢には4枚の矢羽をつけた。そして弓に白楊の皮を巻いた。〔彼の後、弓矢を扱う者は誰しも、何がしかの工夫を弓矢に加えていったので、現在のような完璧な状態にまで至ったのである。〕

弓の形状は、天球になぞらえられている。〔なんとなれば、天文〕学者たちは天球を〔アラビア語で「弧」を意味する〕「カウス」、つまり（ペルシア語）「弓 (kamān-hā)」と呼んでいる。そして、それぞれの「弧」の片方の端から別の端まで真っ直ぐに伸びた線のことを〔アラビア語で〕「ワタル」、つまり「弦 (zih-hā)」と呼び、「弧」の真ん中から発して、弦の中央を通過する線のことを〔アラビア語で〕「サフム」、〈40〉つまり「矢 (tīr-hā)」と呼んでいる¹⁴⁹。

また、次のように言われている。災いや福は、至高なる神の定めと意思により、惑星の運行に影響されて地上に達し、個々人と結びつくが、〔この世界の人々は誰しもこの「矢（禍福）」と関係し、〕その禍福はいずれもこの「弦」と「弧」を通過する。それはあたかも、射手の手のうちから獲物にふりかかる災いが、彼の弦と弧を通して発せられる矢によってもたらされるようなものである。

弓はまた、血管、腱、骨、皮膚、肉といった人体の部位にもたとえられる。弓の弦は魂のようなものであり、それ（弦）によって〔弓は〕生命を宿す。というのも、弦が張られている限り、弓は〔人間のよう〕生きており、〔魂がある限り〕そこから技芸が生まれるからである。〔弦がなければ、魂のない死人のようなものであり、そこから技芸は生まれない。〕実際よく見てみると、弓の形は〔両手を広げた〕人間の胸や〔2本の〕手のようである。すなわち、両手を伸ばし、手の甲をそらすと、胸は弓束 (qabḍa-gāh)

¹⁴⁸ この部分は、校訂本では、「彼（アーラシュ）は、木と葦の両方を用いて弓を5つの部分に分け、膠で補強した」となる。

¹⁴⁹ 「カウス（弧）」、「ワタル（弦）」、「サフム（矢）」のアラビア語はどれも複数形になっており、それぞれ“qusīy”, “awtār”, “sihām”と表記されている。

にあたり、上腕や前腕は両方のリム (xāna)¹⁵⁰に、また両手〔の先〕は両弭 (gūša) に相当する。

弓の重さは、最大のものが600マンと定められている。それは「コシュカンジール (kuškanjīr)」¹⁵¹と呼ばれ、攻城用である。最も小さいものは〔重さ〕1マンであり、それは子供用に小さく作られている。〔400マンから600マンまでのものが「コシュカンジール」であり、重厚かつ頑丈である。〕400マン以下250マンまでの弓はいずれも「チャルフ (čarx)」と呼ばれ、250マン以下100マンまでのものは《101a》「ニーム・チャルフ (nīm-čarx)」¹⁵²、100マンから60マンまでのものは「長弓 (kamān-i buland)」と呼ばれる。

さて、あらゆる弓の力の強弱は、大きいものから小さいものまで、天の1度——それぞれ1度は60分である——に対応させて定められている。まず、弓の両方の弭にある2つの部分から始めよう。〔弦については、〕〔片方の弭から〕弦の探 (fasān-gāh)¹⁵³まで〈41〉倍加していくと、〔探の部分では弭に対して〕16倍になる。〔一方〕リムはどちらも3等分する。弓束は固定された中心と定め、両弭と両リムはそれによって支えられている。さて、弭に隣り合う〔リムの第1〕部分では、弓の力は弭に対して2倍となる。〔その隣の〔第2の〕部分では、その上下の部分に対して弓の力は4倍となる。さらに弓束と隣り合う第3の部分では、弓の力は弭に対して8倍となる。そ

¹⁵⁰ “xāna” (ペルシア語で「家」の意) は、弓の弓束 (ゆづか: 現在では「握り」と呼ばれる) から両端 (両弭) までの部位に当てはまる。アーチェリーのリムに相当。Khorasani 2006: 302 参照。なおロンドン写本ではこの部分に若干の乱れがある。ちなみにアラビア語では同様の部分を「家」を意味する“bayt”と呼んでいる。その他、弭 (fard)、弓束 (maqbid) などについても、ここでのペルシア語の意味内容に対応する語を用いるので、本書のこの部分の用語についてはアラビア語をそのままペルシア語に置き換えたと考えられる。EF: “KAWS” 参照。

¹⁵¹ 「城砦に穴をあけるもの」の意。

¹⁵² 「チャルフ」は、「輪・回転」の意味をもつ。「ニーム・チャルフ」は「半分のチャルフ」。Khorasani 2006: 292-293 にも、先行研究に基づき、大きさによる弓の名称が挙げられており、「チャルフ」は“a very big bow”とされる。アラビア語での弓の種類については、EF: “KAWS” 参照。

¹⁵³ 日本の弓の中仕掛 (中関・搜: 矢を番える場所に、弭の安定を図り、弦を補強するための部分) に相当する。アーチェリーではノッキング・ポイントと呼ばれる。

れは弭と隣り合う〔第1部分に対しては〕4倍であり、均衡が保たれる。〕その〔合計の〕数は14であり、〔弦の力〕16と合わせて30〔が2つできあがる〕。片方の30ともう片方の30〔を足すと、合わせて60となる〕¹⁵⁴。

また、弓の2つのリムは〔全体が〕6分割されているが、それは弓の形が半円であり、天の半円は6つの宮に分けることができるからである。

さまざまな弓のうち、「チャルフ」と呼ばれる弓〔より小さいものに〕、長弓 (buland)・短弓 (past)・中弓 (miyāna) の3種類があるように、矢の種類にも、長 (dirāz)・短 (kūtāh)・中 (miyāna) の3種類がある。長い矢は15カブザ¹⁵⁵あり、中くらいの長さの矢は10カブザ、短い矢は8.5カブザである¹⁵⁶。それぞれの弓に対しては、対応する〔木の重さや矢じりや〕矢がそれぞれあるが、すべてを書き記すと冗長になってしまう。ここでの目的は、長く書き連ねることではなく、弓矢の技芸のすばらしさについて、アジャムの王たちがノウルーズのときになぜこれらのものを所望したのかを明らかにすることにある。

天文学の方からは、次のように言われている。弓を扱う者、すなわち射手が主に弓矢を武器とするならば¹⁵⁷、決して生活に困ることはない。また、兵士の大半が矢を武器とする射手であるような軍隊はいずれも、〔ほとんど負けることがなく、たいていは〕勝利をおさめる。〔とりわけ、敵の武器に弓矢が少ない場合には。〕その理由として、次のように言われている。この武器の命運 (qismat) はいて宮にあるが、〈42〉〔いて宮は〕火の性質を持ち、大吉星である木星の宿だからである。また、〔いて宮は〕おひつじ宮やしし宮

¹⁵⁴ 〔片方のリムの力〕 $2 + 4 + 8 (=14)$ + 〔片方の弦の力〕 $16 = 30$ 。この段落は校訂本には欠落が多く、ロンドン写本も若干乱れているが、文脈から意味を推測しながら便宜的にこのように訳出した。いずれにせよ、ここでは1度=60の数に合わせることが重要なだろう。

¹⁵⁵ 握りこぶしの長さ。約9センチメートル。

¹⁵⁶ ロンドン写本は「15カブザ、半分、10カブザ」である。

¹⁵⁷ ロンドン写本では「武器を扱う者で、射手であり、武器や弓矢の扱いに長けているならば」となっている。

と三角宮を形成するが、そのうちの1つ（しし宮）は太陽の宿であり、〔もう一方（おひつじ宮）は〕火星の宿であり、それは太陽の最高星位 (šaraf) だからである¹⁵⁸。

また、医学の方面からは、弓矢を学ぶことにはいくつかの利点があるとされている。すなわち、それによって精神修養ができ、神経や身体器官を強くし、《101b》関節を柔軟に、意のままに動かすようにできる。また、記憶力を研ぎ澄まし、心臓に活力を与え、卒中や麻痺や震えといった病の心配がなくなる。

逸話：ナリーマーンの息子サーム (Sām-i Narīmān)¹⁵⁹に〔人々は〕尋ねた。「常勝の司令官よ！戦の飾りとは何であるのか？」
〔サームは〕答えた。「帝王のよく駆ける駿馬¹⁶⁰、判断力に優れた將軍の知識、甲冑を身につけ、弓を持って戦いに挑む有能な勇士である。」

逸話：次のように言われている。

バフラーム・グールは、ある日、彼の養育者であったヌウマーン〔・ブン〕・ムンズイル (Nu'mān-i Munḍir)¹⁶¹の前に立ち、1つの弓に2本の矢をつがえ、その2本の矢で2羽の鳥を空中で射落とした。ヌウマーンは言った。「息子よ、天地開闢以来、おまえほどの射手が現れたためしはないし、未来

¹⁵⁸ 原文に欠落が多く、意味を把握しがたいが、太陽を支配星として持つのはしし宮であり、一方太陽の最高星位はおひつじ宮（おひつじ宮の支配星は火星）にあることを踏まえ、このように訳す。なお「最高星位 (šaraf)」とは、太陽や惑星が最もその力を発揮できる状態をいう。その反対の状態は「最低星位 (ḥubūt)」。

¹⁵⁹ 『王の書』の英雄ロスタムの祖父として知られる。

¹⁶⁰ ベルリン写本は判読が困難だが、“būr-i jumand(a)-i šāh”と読む。“būr”は赤毛の馬を指す。ロンドン写本にはこの逸話は記されていない。

¹⁶¹ イラクのヒーラ (Hīra) を中心としたラフム朝（3世紀末－602年）の王。403年ごろに即位し、30年間ほど統治する。サーサーン朝のヤズダゲルド1世とバフラーム・グールの時代に相当。勇敢さと聡明さで名高く、イラクにあるフルナク（ハワルナク）とサディールの城を建造したとされる。ここに現れるヌウマーンはヌウマーン1世のことであり、その場合ムンズイルは父ではなく、彼の息子の名前である。「ムンズイルの息子ヌウマーン」というここでの表記は、もう1人ラフム朝で有名なヌウマーン3世（ムンズイル4世の息子）と混同されているのだろう。EF: “LAKHMIDS”参照。

永劫、現れないだろう。〔おまえがなし遂げた弓術や射術こそ、その極みであらうから。〕」

逸話：次のように言われている。

ある日、1人の〔戦に長けた〕賢人が息子に忠告を与えて言った。「息子よ。馬を愛せ。弓を大事にせよ。城砦を持たずにいるな。逆茂木 (matars) のない城砦を持つな。」

〔息子は〕言った。「父上、馬と弓はわかります。ですが、城砦と逆茂木はどういうことですか？」

〔父は〕言った。「城砦とは戦士のことである。逆茂木は〔身につける〕甲冑である。つまり、できる限り、〔戦士たるもの〕甲冑なしではいるな、ということだ。」

〈43〉 逸話：サイフ [・ブン]・ズイー・ヤザン (Sayf-i Dī Yazan)¹⁶²は次のように述べている。アヌーシーラヴァーンがイランの軍司令官 (sipāhsālār-i īrānī)¹⁶³を派遣したとき、その軍司令官はアブラハ [・ブン]・サッバーフ (Abraha-yi Šabbāh)¹⁶⁴を矢で射て、馬から落とし、次のように言った。(アラビア語)「みなの方、来てみよ！風を運ぶ真つ直ぐでありかつ曲がったものと、宙を飛び、魂を奪う死んだものの方へ！これらは弓と矢のことである

¹⁶² 南アラビアの有力な家系で、6世紀初めにはハドラマウト一帯を領有していた Dū Yazan 家の一員。生没年不明。570年頃、南アラビアを支配したエチオピア勢力に対する抵抗運動を率いた人物として知られている。Tabarī, ii: 139; Bosworth 1999: 236 & n. 585参照。ロンドン写本にはこの逸話も記されていない。

¹⁶³ ミーノヴィーの注釈 (Minovī 2002: 103) によると、この軍司令官はヴァフリズ (Wahriz) だとされる。彼はホスロウ・アヌーシーラヴァーンに仕えたイラン系の将軍で、前注にあるサイフ・ブン・ズイー・ヤザンからアヌーシーラヴァーンへの援助要請に応え、800人の投獄者を率いてイエメンに遠征し、その地を征服したという (Tabarī, ii: 140-41; Bosworth (tr.) 1999: 239 & n.591)。タバリーによると、ヴァフリズが射たのはアブラハではなく、その息子マスルーク (Masrūq b. Abraha) で、ヴァフリズはマスルークを焦らし、象から馬、ロバに乗り換えた彼の額のルビーめがけて矢を放ち、ルビーと頭を貫通させて射落したとされる (Tabarī, ii: 141; Bosworth (tr.) 1999: 240-241)。

¹⁶⁴ 南アラビアのキリスト教徒の王。570年、預言者ムハンマドが生まれた年に軍を率いてメッカを攻めたという伝承によって知られる。EP: “ABRAHA” 参照。

ぞ。おまえたちもそれらの作法を身につけよ。まことにそれらは、近くで戦い、遠くで殺す、武器の中の賢人なのだ」と。すなわち、（ペルシア語）「おお兄弟たちよ、来い！風を駆る真っ直ぐで曲がったものと、生者から魂を奪う生命なきものの方へ。それら2つは、矢と弓である。その作法を覚えよ。なんとなれば、それらは武器の中の賢人であり、近くで戦い、遠くから敵を殺すのだ。」

逸話：ある日、アヌーシーラヴァーンが軍務長官のバーバク（Bābak-i ‘ārid）に尋ねて言った。「武器を扱う者たちの中で、誰がより名高き者であるか？」

「バーバクは」言った。「弓と矢を持つ者です。」

アヌーシーラヴァーンはそれを聞いて驚き、その意味を十分に説明するように求めて、言った。「それは、どのような者たちであるというのか？」

「バーバクは」言った。「あたかも彼らの体はすべて心臓であり、彼らの心臓はすべて腕であり、彼らの腕はすべて弓であり、彼らの弓はすべて矢であり、そして、彼らの矢はすべて敵の心臓であるような者たちであります。」

「アヌーシーラヴァーンは」言った。「これは、どう理解すればよいのか？」

「バーバクは」言った。「彼らは、〔肉体のように強靱な心臓をもち、心臓のように強く力みなぎる腕をもち、腕のように〔しなやかで〕真っ直ぐな弓をもち、弓のように一律で堅固な弦と〕¹⁶⁵、弦のように真っ直ぐで調整された矢をもつのです。このような状態である限り、彼らは己の矢を敵の心臓に命中させ、〔どのような時でも成功し、勝利者となるのです。〕」

矢と弓についてはこのくらいのことを述べておこう。

¹⁶⁵ 校訂本では意味をなさないので、ロンドン写本に基づいて訳出したが、同写本でも一部判読不能な語がある。とくに最後の部分は「一律で堅固な甲冑 (zirah)」と書かれているが、文脈から「弦 (zih)」の間違いと判断した。校訂本の訳は、「腕のように強靱な心臓をもち、弓のように一律で堅固な弦」となる。

〈44〉 筆とその特性とそれに関して知っておくべき事柄

学識者たちは、筆を、「王権の美容師 (maššāṭa-yi mulk)」、「心の使い (safir-i dil)」と呼んでいる。言葉は、筆がない限り、肉体のない生命のようなものであり、筆と結びついて初めて実体を持ち、存在しつづける。また、[言葉は] 石や鋼から生じる火花のようなもので、媒体がなければ燃え上がらず、光を放つ灯火にもならない¹⁶⁶。

カリフのマームーンは言った。(アラビア語)「筆はなんとすばらしいものであるか！[筆なくして] 私はどうやって王国のことに頭をめぐらせられようか。[筆は] 意思に仕え、金品に左右されない。筆は、[紙という] 大地を旅して物語る。大地の白い(何も書かれない)部分は[意味をなさない]闇であり、[逆に] その黒い(文字の書かれた)部分は輝き[意味をなす]」と。

書記術を定めた最初の人物は、タフムーラスである。

人は、たとえ言葉を発するという栄誉を備えているとはいえ、書くことの栄誉に与らなければ、まるで体半分であるかのように不十分である。なぜなら、書くことの美德というのは、いかなる美德にも勝る、きわめて偉大な美德だからであり、その[書くという行為]こそが、人間をして人間から天使の位に至らしめ、ディーヴをしてディーヴから人間へと至らしめるからであ

¹⁶⁶ ロンドン写本では、「弓矢」の章に続くこの部分は、写本の最後尾にあたり、それまでの書写部分とは異なり、ページの下方に中央揃えで4行にわたって分かち書きされている。その内容は「言葉の完全な[姿]とは筆に他ならない。あたかも肉体のない生命のように、[言葉は]十分な生命をもたない。しかし筆と結びつくと、実体を持ち、火のように存在し続けるのである」となっており、校訂本の文章とおおよそ同じ内容だが、文章は不完全である。さらにこの文章の後、唐突に、「アッラーは最もよく知り、叡智あるお方。善と幸運によってここに終える」という一文が現れ、写本はここで途切れる。このため、コピイストはここに来て、本書を書写し続ける意志を失ったと推察される。最後の一文の横には、同じ筆跡で斜めに、「恩寵を与え、栄誉を与えるお方の援けにより、本書を終える。ヒジュラ暦892年(1487年)」と記されている。

る。また書記術は、卑しい身分の人々を高い身分へと至らせるものであり、
[それによって] ついには、「学者 (‘ālim)」や「導師 (imām)」や「法学者 (faqīh)」や「書記 (munshī)」と呼ばれるようになる。同様に、人は、話すことの美德でもって他の動物から抜きんでて、動物たちの長となっている。

神 —— その名が高められんことを —— への信仰が〈45〉確固たるものであり続けるのも、また王国が王のもとに秩序立てられるのも、筆によってなされる。多くの人々は、[ムハンマド・] ムスタファー —— 彼に平安あれ —— が文盲であり、そのことは彼にとっての奇跡であり、彼の力のすべてはそこにあったと考えている¹⁶⁷が、書記たちが読み書きの力でもってなしたことや知ったことについて、彼は誰よりも上手く行い、よく知っていた。また一部の学者たちの見解では、彼はいずれかの学識に通曉していたと言うわけではないが、文字をまったく知らないわけでもなかった。一方、至高なる神は、彼に（アラビア語）「またあなたの右手でそれを書き写しもしなかった¹⁶⁸」と言った。その後、[神の] 命を書くように、との命令がくだり、至高なる神が天から地上に送られたすべてのページとすべての啓示が、筆によって書きとめられ、筆によって説き布かれ、また筆によって[人々に] 受け入れられたのであった。

王権のしきたりや領地の法や規則は、筆でもって保持され、秩序立てられている。また、書くことの重要性のゆえに、指輪や印章といった装飾品で手を飾る。なんとなれば、アジャムの王たちが見知っていたように、剣が領地を獲得し、統治の基盤を確立すると、筆が王権を管掌し、統治の範囲を護持したからである。これら2つの行為は、どちらも手によって産み出される。

感覚には5つ[の種類が]ある。聴覚、視覚、嗅覚、味覚、触覚であり、この5つ[の感覚]の中樞は頭部にあるが、それは肉体にとっての魂のよう

¹⁶⁷ たとえばイブン・ハルドゥーンは、「マホメット [ムハンマド] は文盲であつた。これは彼においてこそ完全性を意味し、彼の身分にふさわしい。(中略) マホメットに関する限り、なんらの技術を持たないということが彼の完全性を意味するのである。その逆がわれわれの場合である」と述べている(森本訳 1979-87, ii: 836)。

¹⁶⁸ クルアーン第29章48節の一部。同節に、「あなたはそれ(が下る)以前は、どんな啓典も読まなかった。またあなたの右手でそれを書き写しもしなかった」とあるが、これは、ムハンマドが既存の啓典に依拠したわけではないことを意味している。

なものである。そこで、頭に載せるために王冠がつくられ、耳につけるために耳飾りがつくられ、また腕につける腕輪や、指にはめる指輪がつくられたのである。

次のように言われている。剣は、腕の技と力でもってことをなすので、〈46〉腕には腕輪という栄光がふさわしいとされた。筆は、指の力と技によって動くので、指には指輪という栄誉が与えられた。そうであるからこそ、書簡をしたためて秘密を記すときには、〔指輪について〕印章でもって書簡に封をする。そうすることで裏切り者やふさわしくない者の目を遠ざけるのである。そこで、手紙はまず、最初にしっかりと巻かれ、そして封印を施され、さらに封印に覆いを被せるよう命じられた。すなわちこれは、「この世界における封印を施された手紙 (nāma-yi muhr-i īn ‘ālam)」を象徴している。なんとなれば、「この世界における封印を施こされた手紙」とは「人間」のことであり、上述の章句にあるように、〔それ（人間）は〕天と地の創造主が記されたものであり、「本性」という帯を巻き、「魂」という指輪で封印を施し、そして千差万別に「知性」でもってその頭を覆われたのである。

識者たちは、筆を、見た目は質素で手に入れるのは簡単だが、それによって書かれたものは高尚であり、使いこなすのは困難な道具だと考えてきた。それはたとえば蜜蜂や蚕のようで、見た目は取るに足りないが、それらから採れるものは、諸国において珍重され値が張る。蜜蜂や蚕には実に多くの益がある。

ここまで記してきた道具（筆）には3つの種類がある。1つは「斜筆 (muḥarraf-i tamām)」であり、その筆で書かれた文字は「ルジャイニー (lujaynī)」と呼ばれ、それは銀の文字という意味である。もう1つは「平筆 (mustawā)」であり、その筆で書かれた文字は「アスジャディー (‘asjadī)」と呼ばれ、金の文字という意味である。3つめは「斜平筆 (muḥarraf-i tamām wa mustawā)」であり、その筆で書かれた文字は「ルルーイー (lu’lu’ī)」と呼ばれ、真珠の文字という意味である¹⁶⁹。

¹⁶⁹ 斜筆 (muḥarraf)、平筆 (mustawā) は、14-15世紀のエジプトの文人カルカシャンディー (1418年没) の『夜盲の黎明 (Ṣubḥ al-a‘šā)』においても筆の種類として挙げられてゐる。

文字には4つの点が備わっていることが求められる。1つは大小がきちんと揃っていることである。〈47〉次にその文字にふさわしい形をしていることである。さらに、輝きや瑞々しさを備えていることで、それは筆の切り口や書き手の握り方による。そして同様に、均整が保たれねばならない。ラー(ل)がヌーン(ن)のようになったり、ヌーンがラーに似てはいけない。ワーウ(و)、カーフ(ق)、ファー(ف)の目玉[のような丸い部分]は、それぞれが同じように一定の大きさであり、狭くても広くてもいけない。ヌーン、カーフ、サード(ص)のはらいも同様で、ラーム(ل)やアリフ(ا)の[縦の]長さはどちらもほぼ同じである。このような点に気をつけていれば、字が下手でも、美しく、揃って真っ直ぐに見える。また、字は判読できるものでなければならない。識者たちは、(アラビア語)「最も美しい字とは、読むことができるもののことである」と言っている。

良い字を書くためには、3つのものが良くなければならない。もしこの3つのもののうち、1つでも良くなかったら、能書家や巨匠であっても美しい字は書けない。1つめは筆、2つめはインク、3つめは紙である。書家から習った字は、文字や単語がそのあるべき姿から逸れることは決してない。なぜなら文字や単語のバランスの案配が心に焼きついているからである。そこで何か書こうとするたびに、心に従って手を動かせば、教えられたとおりに字が書けるのであり、文字や単語が醜くなることはめったにない。

美しい文字は、完璧な顔と肢体を持った姿かたちのようなもので、それは「美しい顔 (nīkū-rū)」と呼ばれる。下手な字は、醜い顔やバランスの悪い体のようであり、それぞれの部位は釣り合いがとれていない。

〈48〉逸話：先人たちの話の中で、筆の美德に関する次のようなものを私は読んだ。

あるとき、あるアミールがファールスの王に、抜き身の剣とともに使者を送り、言った。「この剣を持って行って彼の前に置き、何も言うな。」

使者は赴き、そのようにした。剣を置いてひとことも話さなかったので、

ゝいる (Ṣubḥ al-a'ṣā': 492-493)。しかし、これらの筆で書かれた文字の名称についての記述は見えない。

王はワズィールに命じた。「これに返答せよ。」

ワズィールは墨壺の蓋を開け、1本の筆を使者に向けて投げ、言った。
「これが返事だ。」

使者は聡明な男であり、返事がなされたことを覚った。

筆は王国の繁栄や衰退に大きな影響を与える。信頼できる筆の使い手は尊重しなければならない。

逸話：パナーホスロウの弟ファフル・アル=ダウラ (Faxr al-Dawla)¹⁷⁰が逃れてニーシャープール (Nīšāpūr) にやってきたとき、長官 (ṣāhib) は彼に無礼な口をきき、手紙で彼を非難し、「謀反人」と呼んだ。[ファフル・アル=ダウラは] 一文をしたため、長官に送って言った。「おまえには剣が、私には筆がある。(アラビア語) どちらが強いか考えよ。」

長官は返書に記した。(アラビア語) 「剣はより強く、筆はより高貴である。どちらが有用か考えよ。」

ファフル・アル=ダウラはその手紙をシャムス・アル=マアーリー¹⁷¹に見せた。カーブース・[ブン・] ヴォシュマギールはその下に、(アラビア語) 「誠実に語る者は栄え、偽り支配する者は衰える」と書いた。

逸話：私は次のように聞いた。

イランに1人の王がおり、次のようなことを慣わしとしていた。戦争をす

¹⁷⁰ Abū al-Ḥasan ‘Alī b. al-Ḥasan Faxr al-Dawla (952-997年)。ブワイフ朝ルクン・アル=ダウラ (Rukn al-Dawla) の三男で、アドウド・アル=ダウラ (=パナーホスロウ、注92参照) の弟。父の死後、カーブース・ブン・ヴォシュマギールと手を組んで、アドウド・アル=ダウラと領土を争ったが敗れ、979年、ニーシャープールに逃れ、サーマーン朝の将軍フサーム・アル=ダウラ・ターシュ (Ḥusām al-Dawla Tāš) に保護を求めた。その後、982年にアドウド・アル=ダウラが、さらに983年にアドウド・アル=ダウラの後を継いでいた兄弟ムアイヤド・アル=ダウラ (Mu‘ayyid al-Dawla) が死去したことにより、ブワイフ朝の後継者としてニーシャープールからレイへと帰還した (EF: “FAKHR al-DAWLA”)。本文で語られる彼のニーシャープール行は、979年に、アドウド・アル=ダウラによって打ち負かされた際のことであろう。

¹⁷¹ カーブース・ブン・ヴォシュマギールの称号。注122参照。

るときには、立派な装備を調えた1部隊を用意し、彼ら〈49〉すべてに黒い服を着せる。そして戦闘が激しくなるまさにそのとき、彼らに前線に出るよう命じ、その戦闘の帰趨を決せしめるのであった。さて、あるとき、トルキスタンから5万人もの大軍が到来し、戦闘が必至の情勢となった。この王は自らの側近数人とともに小高いところに座っていた。彼は、その日は戦いを避け、翌日に延ばそうと考えた。[そこで] 墨壺と筆を求め、一片の紙に、

「黒衣部隊に撤退するように言え (سیاه داران سپاه را بگویند تا باز گردند /siyāh dārān-i sipāh rā bi-gūyand tā bāz gardand)」と書き、自身のワズィールに送った。ワズィールは[それを] 読んだが、良しとはしなかった。彼は長靴に入れていた墨壺を取り出し、「黒衣 (سیاه /siyāh)」に1つ点を足して「軍司令官 (سپاه داران /sipāh dārān)」とし、「撤退する (گردند /gardand)」の先頭に[否定を表す]ヌーンを足して「撤退しない (نگردند /nagardand)」として軍のもとに送った¹⁷²。彼らは紙片を読み、敵軍に身を投じ、トルキスタンの軍を破った。

この話は『統治の書』の中に、「筆で[書き加えられた]1つの点によって、5万の剣が敗走した」と記されている¹⁷³。

イラクの地には12[種類]の筆があり、それぞれに異なる長さや形や切り口があり、それぞれが偉大な書家たちの名にちなんで呼ばれている。まずイブン・ムクラ(Ibn Muqla)¹⁷⁴にちなむ「ムクラ筆(muqlī)」、次にイブン・ムハルhil(Ibn Muhalhil)¹⁷⁵にちなむ「ムハルhil筆(muhalhilī)」、3つめはイブン・ムカッフアア(Ibn al-Muqaffa')¹⁷⁶にちなむ「ムカッフアア筆

¹⁷² 結果、先の一文は、「軍司令官たちは『撤退するな』と軍隊に言え」となる。

¹⁷³ 『統治の書』には同様の記述は見あたらない。

¹⁷⁴ アッバース朝の3人のカリフであるムクタディル、カーhil、ラーディーにワズィールとして仕えた能書家(886-940年)で、アラビア書道のいわゆる6書体を完成させた。

¹⁷⁵ 10世紀後半に活躍した文人、アブー・ドゥラフ・ミスアル・ブン・アル=ムハルhil(Abū Dulaf Mis'ar b. al-Muhalhil)を指すと考えられる。

¹⁷⁶ ウマイヤ朝や、アッバース朝カリフ・マンスールの叔父のイーサー・ブン・アリーに仕えた書記官かつ文人(720頃-756年頃)。『大アダブの書(Kitāb adab al-kabīr)』や『カリーラとディムナの書(Kitāb Kalīla wa Dimna)』等の著作がある。

(muqaffa‘ī)」、そして「ムハッラブ筆 (muhallabī)¹⁷⁷」、「メフラーン筆 (mihṛānī)」、「アミード筆 (‘amīdī)」、「ブー・アル=ファズル筆 (bū al-faḍlī)」、「イスマーイル筆 (isma‘īlī)」、さらに「サイード筆 (sa‘īdī)」と〈50〉「シャムス筆 (šamsī)」である。それぞれに〔特有の〕大きさや長さや削り方があり、それを説明すると話が長くなる。だが、それらすべての中から1つだけ述べておこう。それはシャムス筆である。シャムス・アル=マアリーの筆で、ルムフ葦 (qaṣb-i rumḥī) や、あるいはバグダード葦やミスル葦からつくられる。

彼いわく、強い葦は、ディーワーンの書記たちに適している。なぜなら彼らは、きしむほどに力を込めて筆を走らせるからで、[そのようにして] 彼らが書いたものには威厳がある。一方王たちの筆は、書くときに痛みを伴わず、指を圧迫しないようなものであるべきだと言われる。なぜなら、何か書くために紙を膝頭に置き、書記のように座るのは、王にはふさわしくないからである。そうではなく [お付きの者が] 王の傍らに座り、紙を捧げ持つべきである。

筆は握りこぶし3つ分の長さであるべきで、筆先からこぶし1つ分のところ [を持つ]。美しく、誉められるような文字を書くためには、たくさん書かなければならない。

¹⁷⁷ 文人のパトロンとしても有名な、プワイフ朝のワズィール、ムハッラビー (al-Muḥallabī, 903-963年)に関連するか (EP: “AL-MUHALLABĪ”)。

〈51〉 馬とその能力およびそれに関して知っておくべき事柄

次のように言われている。あらゆる動物の中で、馬ほど美しい姿をしているものはない。なんとなれば、馬は草食動物の中の王様だからである。使徒—— 彼に平安あれ —— は次のようにおっしゃっている。（アラビア語）「馬の前髪には嘉きことが結びついている¹⁷⁸」、つまり（ペルシア語）「馬の額の脇には良いことが結びついている」ということである。

ペルシア人たちは馬のことを「生命ある風 (bād-i jān)」と呼び、ルーム人たちは「足のある風 (bād-i pāy)」、テュルク人たちは「望みをかなえる歩を刻むもの (gām-zan-i kām-dah)」、ヒンド人たちは「空飛ぶ玉座 (taxt-i parān)」、アラブ人たちは「地上のブラーク (burāq bar zamīn)¹⁷⁹」と呼ぶ。また、太陽を牽く天使は馬の姿をしており、「アルース (alūs)¹⁸⁰」という名である、とも言われている。

高貴な人々の馬については多くの逸話があり、[たとえば] 次のように言われている。

[逸話:] ある日、スライマーン —— 彼に平安あれ —— に馬が献上された。彼は言った。「至高なる神に感謝を！ [神は] 2つの風を私の配下とされた。1つは生命があり、いま1つは生命のない風だ。一方には大地を、もう一方には空を私が託することができるように¹⁸¹。」

¹⁷⁸ ムハンマドのハディースに、「復活の日まで馬の前髪にはよいものが結びつけられている」とある (牧野訳 1993, ii: 260)。後世のインドで記された『馬の書 (Faras-nāma)』では、同様の語がシーア派7代イマームのムハンマド・パーキル (735年没) の言葉として引かれている (Faras-nāma: 3)。

¹⁷⁹ ブラークは、預言者ムハンマドが夜の旅の際に乗ったとされる空を駆ける天馬。

¹⁸⁰ 「アルース」は、ミーノヴィーの注釈 (Mīnovī 2002: 104-105) によると、「混じりけのない単色」という意味だとされる。辞書では確認されない。

¹⁸¹ スライマーン (ソロモン) と風の関係については、クルアーンに、「またわれは、／

〔逸話：〕アーファリードゥーンに人々は尋ねた。「おお王よ。どうして馬に乗られないのですか？」

彼は言った。「神に対し、しかるべきやり方で感謝することができないのを怖れるのだ。」

〔逸話：〕カイホスロウは言った。「王権にかかわる事柄で、馬ほど私にとって大事なものはない。」

逸話：ホスロウ・パルヴィーズのもとに、「シャブディーズ (šabdīz)¹⁸²」という馬が騎乗用として〈52〉連れてこられた。彼は言った。「もし神にとって、人間よりも位の高いしもべがいたならば、神は我らに世界を与えなかったであろう。もし馬よりも位の高い動物がいたならば、それを我らの乗り物とはしなかったであろう。」

彼はまた言っている。「帝王は人々の長であり、馬は動物の長である。」

神——讃えられ高められんことを——はおっしゃっている。(アラビア語)「自らに似たものとして、われは馬を創った¹⁸³。」

アフラーシヤーブ (Afrāsiyāb)¹⁸⁴ は言う。(テュルク語)「馬は人間にとって、天にとっての月のようなものだ (at ır-kā antağ kim kūk-kā āy)」、すな

＼猛威を奮う風(を起す術)をスライマーンに(授け)、かれ(スライマーン)の命令の下に、われが祝福する地に吹かせた」(第21章81節)、「またスライマーンには風を(支配させ)、(その風の一吹きで)一朝に1ヵ月(の旅路)を、また一夕に1ヵ月(の帰路)を(旅させた)」(第34章12節)とあることを踏まえているのだろう。

¹⁸² パルヴィーズが所有していた名馬は「漆黒の夜」を意味する「シャブディーズ」という名であった。パルヴィーズはシャブディーズをこよなく愛し、宮廷楽師バールボドからシャブディーズの死の知らせを受けた時の逸話は有名である。この逸話については『王の書』に詳しい。ケルマーンシャー近郊のターケ・ポスターン遺跡に、シャブディーズにまたがるホスロウ・パルヴィーズを表したとされる浮き彫りがある。

¹⁸³ クルアーンには同様の語句は現れないが、同第16章8節に、「また(かれは)馬とラバとロバ(を創られた)」とある。

¹⁸⁴ 『王の書』に登場する伝説上の人物。トゥーラーンの王であり、トルコ系の人々の始祖と位置づけられることが多い。Efr.: “AFRĀSĪĀB” 参照。

わち（ペルシア語）「馬は王たちにとって、月が天に対してあるがごときだ¹⁸⁵」と。

貴人たちは言っている。馬を大事にせねばならない、と。なぜなら、馬を軽んずる者は、敵の手によって辱められるからである。

カリフのマームーンは言う。（アラビア語）「めぐる天空であり、移動する玉座たる馬とは、なんとすばらしいものか」、つまり（ペルシア語）「めぐる天空にして、移動する玉座である馬はすばらしいものだ」と。

信徒の長アリー・ブン・アビー・ターリブ (‘Alī b. Abī Ṭālib)¹⁸⁶ —— アッラーが彼に満足されんことを —— は言った。（アラビア語）「アッラーは、それによって人間を高め、それによって悪魔をおとしめるためにこそ、馬をお創りになられた」、つまり（ペルシア語）「至高なる神が馬をお創りになられたのは、それによって人間を高め、ディーヴをおとしめるためである。」

アブドゥッラー・ブン・ターヒル (‘Abdullāh b. Ṭāhir)¹⁸⁷は言った。（アラビア語）「私は馬にまたがることの方が、船¹⁸⁸の舳先にまたがることよりも好きだ」、つまり（ペルシア語）「馬に乗ることのほうが、船の舳先にまたがることよりも好きだ。」

ヌウマーン・[ブン・] ムンズィルは言う。（アラビア語）「馬は夜襲をかける兵士たちにとっての砦であり、馬がいなければ、勇敢さは勇士にふさわしい名前とはなりえない」、つまり（ペルシア語）「馬は夜襲をかける男たちの砦であり、もし馬がいなければ、勇敢さという名はどうして戦士の名

¹⁸⁵ このペルシア語訳文は、「月にとっての天のようなものだ」と逆になっている。

¹⁸⁶ ムハンマドの娘婿。第4代正統カリフ（在位656-661年）であり、シーア派では初代イマームとみなされる。

¹⁸⁷ ターヒル朝初代君主ターヒルの息子（798-844/5年）。兄弟の死亡した828年からホラーサーン地方を治めるが、各地での反乱と東方のサーマーン朝の進出に悩まされた。

¹⁸⁸ アラビア語では FLK とあり、ここでは“fulk”「船」と解した。船の意味での“fulk”の用法は、クルアーンではヌーフ（ノア）の方舟を指す語として頻出する。

にふさわしいものとなりえようか。」

ナスル・ブン・サイヤール (Naṣr b. Sayyār)¹⁸⁹は言う。〈53〉(アラビア語)「馬は戦いの玉座である。武器は戦いの光、叫びは戦いの歌、血は戦いの酒である」、つまり(ペルシア語)「馬は戦いの玉座、武器は戦いの華である。」

ムハッラブ・ブン・アビー・スフラ (Muhallab b. Abī Šufra)¹⁹⁰は言う。(アラビア語)「馬は戦いの雲。剣の雷光により、血の雨のみを降らす」、つまり(ペルシア語)「馬は戦いの雲であり、剣の閃光により血の雨しか降らさない。」

さて、[ここで] 馬の名前をいくつか記そう。[それは] ペルシア人たちが馬の性質について経験によって得た知識をもとに述べているもので、馬の欠点や長所、吉兆となるものについてである。

ペルシア語による馬の名前

アルース (alūs)、チャルメ (čarma)、ソルフ・チャルメ (surx čarma)、ターズイー・チャルメ (tāzī čarma)、ヒング (xing)、バード・ヒング (bād xing)、マギヤス・ヒング (magas xing)、サブズ・ヒング (sabz xing)、ピーセ・クマイト (pīsa-yi kumayt)、クマイト (kumayt)、シャブディーズ (šabdīz)、ホルシード (xuršīd)、グーレ・ソルフ (gūr-i surx)、ザルド・ラフシュ (zard raxš)、スイヤー [フ]・ラフシュ (siyā raxš)、ホルマーグーン (xurmāgūn)、チェシーネ (čīšīna)、シューラク (šūlak)、ピーセ (pīsa)、アブルグーン (ABRGWN)、ハーク・ラング (xāk rang)、ディーゼ (dīza)、ベフグーン (bihgūn)、メイグーン

¹⁸⁹ ウマイヤ朝最後のホラーサーン総督 (?-748年)。クタイバ・ブン・ムスリム (Qutayba b. Muslim)、アサド・ブン・アブドゥッラー (Asad b. ‘Abdullāh) に仕え、74歳でアサドの後を継いだ。747年のアブー・ムスリム (Abū Muslim) の蜂起を制することができず、敗走先で病死する。EF: “NAṢR B. SAYYĀR” 参照。

¹⁹⁰ ムハッラブ家の始祖 (632-702年頃)。ウマイヤ朝時代、ホラーサーン、アフガニスタン方面の征服戦争で活躍した。ハッジヤージュ・ブン・ユースフ (Ḥajjāj b. Yūsuf) のもとでホラーサーン総督となり、その後、アズラク派掃討戦を指揮した。EF: “AL-MUHALLAB B. ABĪ ŠUFRA” 参照。

(maygūn)、バードルーイ (BADRWY)、ゴルグーン (gulgūn)、アルガヴァン (argawan)、バハールグーン (bahārgūn)、アーブグーン (ābgūn)、ニールグーン (nīlgūn)、アブルカース (ABRKAS)、バーウバール (BAWBAR)、セピード・ザルデ (sipīd zarda)、ブルサル (būrsār)、バナフシェグーン (banafšagūn)、アドバス (adbās)、ザーグ・チャシュム (zāg čašm)、サブズ・プースト (SBR BWST)、スィームグーン (sīmīgūn)、アブラク (ablaq)、セピード (sipīd)、サマンド (samand)¹⁹¹。

さて、アルースは天空を牽くと言われる馬である。また遠目がきくとも言

¹⁹¹ ミーノヴィーの注釈 (Minović 2002: 110-136) や前掲の『馬の書』等の記述を参考に見ていくと、「チャルメ」は佐目毛に近く、「ソルフ・チャルメ」は「赤佐目毛」、「ターズイー・チャルメ」は「アラブ佐目毛」となる。「ヒング」はホスロウ・アヌーシーラヴァーンの馬の名として知られ、芦毛と考えられる。以下直訳すると、「バード・ヒング」は「風芦毛」、「マギヤス・ヒング」は「蠅芦毛」、「サブズ・ヒング」は「緑芦毛」となる。また、アラビア語の「クマイト」は「(黒) 鹿毛」にあたり、「ピーセ・クマイト」は「斑鹿毛」、「シャブディーズ」は「夜のような漆黑」で青毛に相当し(注182参照)、「ホルシード」は「太陽」、「グーレ・ソルフ」は「赤土」の意だが、月毛の可能性もある。「ザルド・ラフシュ」と「スィヤー [フ]・ラフシュ」はそれぞれ「茶ラフシュ」「黒ラフシュ」となり、ラフシュ(駁毛)はもともと『王の書』に現れる英雄ロスタムの伝説的な愛馬の名である。さらに、「ホルマーグーン」は「ナツメヤシ色」、「チェシーネ」はヒングやチャルメと同義とされ、「シューラク」は「駿馬」の意であり、『王の書』に出てくるロスタムのライバルであるエスファンディヤールの馬の名前とも言われる。「ピーセ」は「白黒の斑」なのでパイボールドを指し、「アブルグーン」は何らかの色を指す(このまま読めば「雲色」)と思われるが、元の文に乱れがあるため不明、「ハーク・ラング」は「土色」、「ディーゼ」は「黒」を指すが、前髪から尻尾にかけて黒い馬を言うことから河原毛に近く、「ベフグーン」は「花梨色」、「メイグーン」は「赤ブドウ酒色」、「バードルーイ」は文字に母音点がなく、判読できない。「ゴルグーン」は「バラ色」の意でホスロウ・パルヴィーズの愛妾シーリーンの馬の名であり、「アルガヴァン」は「花蘇芳」、「バハールグーン」は「春色」、「アーブグーン」は「水色」、「ニールグーン」は「藍色」、「アブルカース」と「バーウバール」は語が判読できず不明、「セピード・ザルデ」は「黄(茶)白色」で白粕毛や月毛に近いと思われ、「ブルサル」は「ブロンド」で赤みがかった色、「バナフシェグーン」は「スマイレ色」、「アドバス」はアラビア語で黒に近い暗褐色の鹿毛を指し、「ザーグ・チャシュム」は「青い目」、「サブズ・プースト」は原文が不明瞭であるものの「緑(がかった黒っぽい)肌」と考えられ、「スィームグーン」は「銀色」となる。また、「アブラク」はアラビア語で白が入った「斑毛」を指し、「セピード」はペルシア語の「白」、「サマンド」はペルシア語で「亜麻色」や「クリーム色」の馬を指す。以下の注194も参照のこと。

われており、遠く離れたところから〈54〉馬の蹄の音を聞き分ける。非常に忍耐強いが、寒い場所では耐久性がない。それを所有するのは吉兆であるが、
〔馬体は〕華奢である。

チャルメは気性が荒く、遠目がきく。黒チャルメ (siyāh čarma) は吉兆である。

クマイトは苦難に強い。シャブディーズは幸運をもたらす祝福された馬である。ホルシードはおっとりしていて、めでたい馬である。サマンドは忍耐強く、働き者である。ピーセは主人になつき、人当たりがいい。セピード・ザルデ（白茶色）は王たちが乗るのに適している。ピーセ・クマイトは扱いにくく、気性が悪い。

馬には、滅多に現れない珍しい毛色がある。毛色については、アリストテレスが『動物誌 (*Kitāb-i ḥaywān*)』の中で少し触れている¹⁹²。

また、次のように言われている。鳥のような色の馬、特にセピード（白）はよりすばらしく、〔騎乗に〕適している。その馬の持ち主は戦いにおいて常に勝利をおさめる。〔そのため〕このような馬は、帝王の乗る馬としてふさわしい。ザルデ・ザーグ・チャシュム（青い目で茶色）や、龍涎香色で目が茶色がかっているもの、体に白あるいは茶色っぽい斑点があるもの、鷲〔のような〕ヒング (xing-i ‘uqāb)、あるいは赤ヒング (surx xing) で足が真っ白なもの、クマイトで顔が白い、あるいは四肢が白いもの。これらはみなめでたく、吉兆である。

〔一方〕王たちにふさわしくない馬とは、キジのような毛色の馬や、あるいは顔に巨大な星のある馬である。

ところで、馬にある星の中で吉兆なものの1つは、鼻梁 (ḥakm) に星があるもので、ペルシア人たちはそれを「ゲルドナー (girdnā)¹⁹³」と呼んでおり、め

¹⁹² 現在伝わっているアリストテレスの同書からは、このような話は見当たらない（島崎訳 1968 参照）。

¹⁹³ 原文が若干不明瞭であるが、ミーノヴィーの注釈によると、“girdnā”は「巻いているもの」の意とされる。「旋毛」にあたるか。『カープースの書』では、次のように言われている。

背の頂や後脚のまわりに毛が生えている (girdnā) 馬は不吉である。毛が巻いてい

でたく、祝福されたものである。

毛色が褐色や赤の馬は、寒さに〈55〉弱い。

使徒 —— 彼に平安あれ —— は言った。「もっともよく駆ける馬はアシュカル（鹿毛）である。」

信徒の長アリー —— アッラーが彼に満足されんことを —— は言っている。「もっとも勇敢な馬はクマイト（黒鹿毛）である。もっとも恐れを知らないのはスィヤーフ（青毛）で、もっとも力強く気性がよいのはヒング（芦毛）、そしてもっとも優美な馬はサマンド（栗毛）である。」

ヒングの中では、頭の後ろ、額、脚、腹、睪丸、尾、目がすべて黒いのがよい¹⁹⁴。

ㇿる馬 (mahqū') も同様で、それは後脚のまわりと蹄の下に毛が生えている。もし毛が両方の側に生えていたらいっそう不吉である。また蹄の上部の脚のまわりに内側に毛が生えていたら不吉で、外側ならばよからう (*Qābūs-nāma*: 126; 黒柳訳 1969: 88)。

¹⁹⁴ インドで書かれた『馬の書』では、「馬の毛色」に関する章に次のようにある。

〔馬の〕毛色には2極あり、1つは純粹な黒であり、それ以上に暗い色はなく、もう1つは他の色と全く混じり合っていない純白である。この2つの極の間に、単色や混合色が数えきれないほどにある。そのうちのいくつかは、「スミレ色」や「緑色」のように決まった呼び名があり、いくつかは決まった名称がなく、「ジュズカケバト色」、「蜂蜜色」、「クルミ色」のように、似ているものを当てはめて使用するものもある。またよく知られているように、馬の基本色には、黒 (siyāh)・赤 (surx)・茶 (zard)・青灰色 (kabūd-i xākistārī)・白 (sipīd) の5つがある。残りの色は、これらの色のどれかに当てはまるか、あるいはこれらが混じり合ったものである。以下に、その詳細を述べよう。

黒い馬 —— アラブ人はそれを「アドハム (adham)」と呼んでいる —— は、全身が黒く、象や水牛のような色をしているものが良いとされる。ただし、目が赤いものは別であり、そのような馬は狂暴で、蹴り癖があり、反抗的である。一方、鼻の穴の周りが赤く、腹が褐色がかったもの —— アラブ人はそれを「アフワー (ahwā)」と呼んでいる —— もまた、良いとされる。

赤い毛色のうち、黒に近く、たてがみや尻尾が黒いもの —— それは「クマイト (kumayt)」と呼ばれる —— は、すべての毛色の中で最も良い。それは、暑さにも寒さにも強く、蚊、蠅、蜂、蚤に刺されても丈夫で、空腹や渇きや病氣や苦難に⁷

＼対し、どの毛色の馬よりもよく耐える。この毛色にはいくつかの種類があり、あるものは黒っぽく、あるものは赤っぽい。あるものは明るく、あるものは暗い。総じて分類の基準は次のとおりである。まず、たてがみや尻尾が黒いものは、「クマイト」と呼ぶ。もし赤毛で、白っぽい場合は、「アシュカル (ašqar)」と呼び、アシュカルの中で最も良い毛色は、アルメニア泥（赤みがかった茶色）に近い。アシュカルの馬は速く、よく駆ける。だが、蹄や腰が弱く、空腹や渇きに耐性が無い。クマイトやアシュカルより色が薄くても、他の色と混じり合っていなければ、良い。

「サマンド (samand)」は、卵の黄身の色に近く、体色よりも薄めの 1 ディラム（ディルハム）ほどの斑点がある。（一部テキスト欠落）膝、蹄、たてがみ、尻尾が黒く、たてがみから尻尾まで背中に黒い線が走るものは、非常に良い。

緑や黒の馬はまた、「ヒング (xing)」や「キャブード (kabūd)」とも呼ばれる。それらの毛色は、実際には黒と白の混じり合ったものである。すなわち、体毛の何本かは黒色で、何本かは白色である。このような毛色は良いとされる。とりわけ、1 ディルハムほどの赤みがかった斑点がある場合には。

青灰色は、体毛が灰色のもので、インドでは「スール (sūr)」と呼んでおり、非常に悪いとされる。それは、「スールは厩舎から遠ざけよ」ということわざがあるほどである。

白い馬 —— 「アシュハブ (ašhab)」と呼ばれる —— の中で、口、額、手、脚、目、蹄、たてがみ、尻尾が黒いものは非常に良く、吉兆である。もし手や脚や蹄が白ければ、弱く、怠惰である (Zabardast Khān 1911: 5-7)。

また、『カーブースの書』においても、馬の名称と特徴が挙げられている。毛色の訳語に問題は多いが、訳文の不十分な箇所は原文から [] 内に補いつつ、参考までに挙げる。

色については、[混じりけのない] 栗毛 (kumayt-i bahīm) [実際は「(黒) 鹿毛」] が最もよいと言われ、棗椰子の色 (xurmā-gūn) もまたよい。馬は寒暑に耐え、苦しさをも忍ばねばならぬ [原文では「(そのような馬は) 苦しさを忍ぶ」]。[一方、チャルメ (čarma) は弱い] が、もし陰囊、股の間、肛門、尾、前後の脚、胸、額が黒ければ、よい馬である。焦げ茶色 (zarda) の馬もまたよい。ことに色が濃くて、顔 [原文は「胸」] に黒い斑点があり、胸 [原文では「たてがみ」]、額、尾、陰囊、肛門、股の間、目、唇、これらすべてが黒ければよい。

クリーム色 (samand) の馬も同様に色が混じっていねばならぬ。淡い栗毛 (gul-gūn) は 1 色で、色が混じってはならぬ。黒い馬 (adham) は黒ばかりしていねばならぬ。赤目 (surx-čašma) の馬はよくない。目が赤い馬は一般に狂気で欠点が多い。[ブロンド (būr) の馬は少ないが、よい。斑毛 (abraš) はよくない。とりわけ目、肛門、陰囊、蹄が白いものはよくない。] 四肢が黒く、焦げ茶色の馬について私が述べた形状を有する灰色 (dīza) の馬はよい。白黒斑の馬 (ablaq) は感心

本書では、このくらいのことを記しておこう。

その昔、馬を知り、その長所や欠点を見分けることにおいては、アジャムの者たちより優れている者はいなかった。というのも、彼らの王こそが世界の帝王であり、アラブだろうとアジャムだろうとどこであれ、良馬がいたならば、彼らの宮廷にもたらされていたからである。いまや、[馬の知識において] テュルク人たちよりも優れている者はいない。なぜなら、彼らは昼も夜も馬と生活をともにしており、さらには彼らこそが[現在の]世界の主だからである。

↘しないし、よしとされず、一般に気性が悪い」(*Qābūs-nāma*: 124; 黒柳訳 1969: 87)。

ほか、『2つの馬の書 (*Dū faras-nāma*)』にも、馬の毛色や吉凶の徴について述べられており、参考になる (*Dū faras-nāma*: 18-26)。また Watson 1996 によると、adbas: bay、kumayt: dark bay、ašqar: bright chestnut、ašhab: white grey、adham: pure blackなどの識別が見られるが、基本的に馬の体色は、上は大きな分類から、下は細かな模様や目の色などさまざまな特徴を加味しており、一律に訳出することは困難である。

〈56〉 鷹とその能力およびそれに関して知っておくべき事柄について

鷹は王たちの狩場の友である。彼らは鷹に喜びを見だし、それを好む。鷹には、王に備わっているのと同じような性質がある。すなわち、大いなる度量と、優美さと¹⁹⁵、清廉さである。

先人たちは次のように言っている。「肉食動物の王様は鷹である。草食動物の王様は馬である。熔解しない鉱物の王はルビーであり、熔解する鉱物の王は金である」と。

このような理由で鷹は、他の人々よりも、王にとってこそ、よりふさわしい。鷹には、他の鳥にはない威厳がある。鷲は鷹よりも大きい、鷹の威厳は鷲にはない。

帝王たちは鷹を見て吉凶を占う。もし鷹が疲れも見せず軽やかに王の手にとまり、王の方に顔を向けたなら、王には新しい領地が手に入る、という徴である。これと反対の場合は、逆の結果となる。また、飛び立つときに鷹が頭を下げ、ためらうならば、王権に衰えが生じることを示す。また飛び立っても動きが鈍かったり¹⁹⁶、あるいは獲物を捕らえて運び去るときに鳴き声をあげる場合には、軍の中に動揺が生じる。飛び立つときに糞をしなければ、不備が生じる。さらに、右目で天を仰ぐと王権は高みに至り、左目で仰ぐと災いが生じる。頻繁に〈57〉天を仰ぐのは、勝利と援助の徴であり、地面ばかりを見つめるようであれば、心配事が生じる徴である。鷹がおとなしかったり、狩場に向かって元気なく飛び立ったり¹⁹⁷、あるいは狩場で他の鷹と争うようであれば、新しい敵が現れる。

¹⁹⁵ 校訂本にはないが、ベルリン写本 (fol. 98a) には “nāzikī” の語がある。

¹⁹⁶ ベルリン写本および校訂本では語が不明瞭。“kund” と読む。

¹⁹⁷ 校訂本にはないが、ベルリン写本 (fol. 98b) には “bi-šikārgāh kāhil bar xīzad” の一文がある。

鷹の選び方について

〔鷹の〕種類は豊富にある。しかし、白色や、赤色の鷹や、全身が茶色のものが最も良い。狩りにおいて貪欲なのは白色の鷹であるが、病気がちで気性が荒い。茶色は、白に次いで狩りに貪欲で、〔白色〕より丈夫である。赤色はこの二者よりも丈夫だが気性が荒く、体格も他のものよりも大きい。

我々の時代のある商人から聞いたところによると、マーハーン・メフ・ヴォシュマギール (Māhān-mah Wušmagīr)¹⁹⁸ほど鷹狩りに精通している者はおらず、彼の仕事は、1年に12ヶ月狩りをすることだった。バドル・〔ブン・〕ハサヌーヤ (Badr-i Ḥasanūya)¹⁹⁹の軍司令官であったアリー・カーマ (ʿAlī Kāma) もまた、十分に精通していたが、人々の一致するところでは、マーハーン・メフ以上によく理解している者はいない、ということであった。彼には、山岳地帯の言葉で書かれた『狩るもの (Šikara)』²⁰⁰という名の立派な著作がある。〔その中で〕彼は次のように述べている。「あらゆる動物は、中途半端に混ざり合った色のものよりも、一色のものの方が優れている。さて、鷹を選ぶにあたっては以下のような条件がある。肉は固く、丸みを帯びて締まっていること。体の各部位は、それぞれに均整がとれていること。たとえば、頭は短く小さく、額や眼は〈58〉広く、餌袋は大きく、胸は幅

¹⁹⁸ 10世紀から11世紀にかけて、カスピ海南岸地方を支配したズィヤール家の当主 (?-967年)。ブワイフ朝やサーマーン朝のはざまで勢力争いを繰り広げた。カーブースの父。

¹⁹⁹ ベルリン写本、校訂本ともに、BDRXSTW となっているが、後出のアリー・カーマの活動した時代・地域を考慮すると、バドル・ブン・ハサヌーヤ（あるいはハサナワイフ）のことと考えられる。バドルは、クルディスタン地方を治めたハサヌーヤ／ハサナワイフ家の2代目アミールであり、1014/15年に殺害された。ブワイフ朝とも密接な関係があった。バドル・ブン・ハサヌーヤに関しては、著者不明『歴史物語集成 (Majmal al-tawārīx wa al-qīṣaṣ)』 (Majmal al-tawārīx: 396-400) も参照のこと。

²⁰⁰ この本については何も知られていない。「山岳地帯の言葉」とあるのは、タバリストアン（「山地」の意）などカスピ海南岸の方言のことだろう。なお、11世紀後半のイランで書かれたペルシア語の『鷹の書 (Bāz-nāma)』が現存するが、本書の内容とはまったく一致しない。同書の著者 ʿAlī b. Aḥmad Nasawīは、393/1002-03年にレイで生まれ、8歳の時から鷹匠に興味を持ち、ブワイフ朝や周辺諸王朝に60年以上鷹匠として仕えた経験をもつ。晩年の472/1079-80年に『鷹の書』の執筆を開始するが、鷹の種類・飼育方法・病気について詳細に記される同書からは、当時いかに各地の宮廷で鷹狩りが重視されていたかが窺われる。

広で「真ん中が」くぼんでおり、尾と太ももは厚みがあり、その肉は固く、肢は太く丸く短く、鉤爪は立派で、指は強く、爪は黒く、足は緑がかっている。このような性質を備えた鷹は、その多くは白色であったり、全身が茶色や赤色であったりするが、滅多に手に入らず、いかなる値段にも見合う。」

逸話：次のように言われている。

マーハーン〔・メフ〕は偉大で、聡明かつ才ある君主であった。ある日、自身の鷹匠が、鷹を手にしたままで水を飲んでいるのを目撃した。そこで命じて、その鷹匠を100杖打たせ、言った。「おお、何たることか！己の体にのせている鷹は、鳥の中の王者であり、君主たちの手の親愛なる慰みものであるぞ。王の友人を手にしたままで、水を飲んだり、他のことをするなどという無礼がおまえに許されるというのか？」

鷹匠は言った。「ご主人様の命が永からんことを！狩場でのどが渴いたときには、鷹を手にしたままで、どのようにすればよろしいのでしょうか？」

〔マーハーン・メフは〕言った。「鷹の扱いを知っている別の者に預けよ。そのあとで、おまえは水を飲むなり、しなければならない他のことをすればよい。」

逸話：私は次のように聞いた。

説教師のブー・アブドゥッラー (Bū ‘Abdullāh-i xatīb) は、ファフル・アッダウラの兄弟のアミール・アブー・アル＝アッバース (Amīr Abū al-‘Abbās)²⁰¹ の教育係であった。彼は見晴らしのよい高台に座っていた。アミール・アブー・アル＝アッバースは幼く、彼の傍から「離れて」降りていった。1人のハーディムが手にハイタカをのせていた。〔アブー・アル＝アッバースは〕そのハイタカを求め、手にとませた。そのまま、口からつばを吐き出した。〔アブー・アル＝アッバースが〕ハティーブのアブドゥッラーのもとへ〈59〉戻ると、〔アブドゥッラーは〕彼を咎め、洗面をつくって言った。「あなたはまだ幼く、この嗜みを〔十分〕学んでいませんが、そうでなければ、私は

²⁰¹ ブワイフ朝ルクン・アル＝ダウラの息子 Abū al-‘Abbās Xusraw Fīrūz のこと。アドウド・アル＝ダウラの死後、兄弟ファフル・アル＝ダウラの到着まで、レイにてごく短期間即位した (*Majmal al-tawārīx*, 395)。詩人としても名を知られていたようである (Busse 1969: 507 参照)。

今日、あなたを罰したことでありましょう。何度も言われてきたことなので
すから。」

その後、[つづけて] 言った。「おお、アッラーに讃えあれ！あなたは王子であり、[将来の] 王なのです。王たちの友があなたの手の上にいるときに、無礼にも、口からつばを吐かれるとは。」

このように言った後、[アブドゥッラーは] サンドルを手にした。そして、そのハーディムの頸をサンドルで何度か叩き、言った。「おまえたちは王子たちをこのようにお育てしているのか？鷹を手にしたままつばを吐くという無礼がまかり通るとは！」

〈60〉 ブドウ酒の益〔とそれに関して知っておくべき事柄〕について²⁰²

ガレノス (Jālīnūs)、ソクラテス (Suqrāt)、ヒッポクラテス (Buqrāt)、ブー・アリー〔・ブン〕・スィーナール (Bū ‘Alī-yi Sīnā)²⁰³、ムハンマド・〔ブン・〕ザカリヤー〔・ラーズィー〕 (Muḥammad-i Zakaryā)²⁰⁴、〔ブフティースューウ (Buxtīšū‘)²⁰⁵、サービト〔・ブン〕・クッラ (Tābit-i Qurra)²⁰⁶〕など、医学を修めた者たちは、「人の体にとって、ブドウ酒以上に益のあるものはない。特に渋みがあつて透きとおったブドウ酒には〔益がある〕」と言っている。

ブドウ酒の特性は次のようなものである。気鬱を取り去り、心を楽にさせる。体を太らせ、濃厚な食べ物を消化し、顔色を良くし、皮膚に張りを出し、艶よくさせる。理解力や記憶力を鋭敏にする。吝嗇家を気前よく、臆病

²⁰² ロンドン写本では、本章「ブドウ酒について」は「大麦」の章につづき、94葉bから始まる。

²⁰³ イスラーム世界で最も著名な医学者・哲学者（980-1037年）。中央アジアのブハーラー出身で、イラン各地の宮廷で活躍した。ヨーロッパでは「アヴィセンナ」として知られる。代表的著作に、『治癒の書 (*Kitāb al-ṣifā*)』および『医学典範 (*Qānūn fī al-ṭibb*)』がある。

²⁰⁴ 医者、哲学者、錬金術師（864-925/932年）。イランのレイ出身で、レイやバグダードの病院長を務めた。臨床医学にすぐれ、天然痘や眼病などに関する見解をはじめ、多くの著作を残した。ヨーロッパでは「ラーゼス」と呼ばれる。

²⁰⁵ 8世紀から11世紀にかけて活躍した、シリア・イラン系のネストリウス派の医者の一族。当初は、サーサーン朝期の学術都市ジュンディー・シャープールで病院長を務め、ギリシア語やサンスクリット語の医学書などのシリア語への翻訳事業に携わっていたとされる。765年に一族の1人がアッバース朝カリフ・マンスールによってバグダードに招聘され、以後、カリフの侍医を多数輩出した (EP: “BUKHTĪSHŪ‘”, EIr: “BOḲTĪSHŪ”).

²⁰⁶ 288/901年没。メソポタミアのハッラーン出身。シリア語、ギリシア語に長け、パヌー・ムーサー門下としてバグダードで学ぶ。天文学や数学に関する著作を多数残した (EP: “THĀBIT b. ḲURRA”).

者を勇敢にする。また、酒を飲む者は病気に罹ることが少なく、たいてい身体は健康に保たれる。というのも、熱や病は、体液が滞ったり腐敗したりすることから生じるが、酒を飲む者は、ときに〔嘔吐や〕下痢を生じ、悪い体液が胃の中に溜まらないからである。

知者たちのある者は、ブドウ酒を「男の試金石 (maḥakk-i mard)」と呼び、またある者は「理性を試すもの (nāqid-i ‘aql)」、ある者は「知性を測るもの (ṣarrāf-i dāniš)」、またある者は「徳の計測器 (mi‘yār-i hunar)」と呼んでいる。貴人たちは、酒を「悲しみを洗い流すもの (ṣābūn al-hamm)」と呼んでおり、別の者たちは「悲嘆を喜びに変えるもの (mufarriḥ al-gamm)」と呼んでいる。

混じりけのないブドウ酒を5杯飲むと、誰しも自らのうちにある良い面や悪い面が顕れ、その本質を露わにする。知らない人と親しくなり、〔友人に対しては〕友情を深める。もし彼自身に、友人たちと席をともにする〔のを好む〕〈61〉性質があるならばなおさらであり、酒の美点のひとつである²⁰⁷。

〔また〕世の中にある食べ物はすべて、脂っばい、甘い、美味しい、酸っぱいなど、一度満腹になるとそれ以上は食べられず、たくさん食べると〔うんざりし、〕嫌悪の情がわき起こる。だが酒は、いくら飲んでももっと多く飲め、人はそれで満腹にはならず、嫌になることもない。というのも、ブドウ酒はすべての飲み物²⁰⁸の王様だからであり、〔それは、金が溶解する鉱物の王様であるのと同じである。〕

天国には多くの恩恵があるが、酒は天国の最上の恩恵である。《95a》 そうでなければ、神はそれを自らのものとされなかったであろう。両世界にある恩恵は、いずれも神の定めと意思によるものである。たとえば〔酒について、〕神は自らの書の中ではっきりと、（アラビア語）「主は彼らに純良な飲み物 (ṣarāb) を飲ませられる」²⁰⁹と言及されている。〔だが〕別の場所で

²⁰⁷ ロンドン写本は「もし酒に、友を集わせ、親密にさせるという効能があるならば、それこそは酒のもつ最上の美点である」となっている。

²⁰⁸ ロンドン写本は「すべての食べ物の王様」。

²⁰⁹ クルアーン第76章21節。この章は天国（楽園）の情景が縷々述べられる。

は、(アラビア語)「人間のために(多少の)益もある。だがその罪は、益よりも大である」²¹⁰、つまり(ペルシア語)「その中には人々にとって多くの益があるが、しかし、その罪は益よりも多い」ともおっしゃっている。

〔ゆえに〕知性ある者は、その美味しさ(maza)が弊害(baza)に勝るような飲み方をしなければならない。そうすれば間違いを犯すことはない。それはすなわち、自分自身を律することによって、酒の飲み始めから終わりまで、その言動においてどのような不作法や不快さも生ぜしめず、ただ上品に心地よく過ごす、ということである。そのような域に達すれば、酒を飲むにふさわしい。

酒には多くの美德がある。ここで、賢人ガレノス、ムハンマド・ブン・ザリヤー・ラーズィー、師アブー・アリー・スィーナや偉大な医師たちの言葉から、酒の効能と弊害、および酒の弊害への対処法について記そう²¹¹。

〈62〉酔わせる(強い)ブドウ酒の効能：食事の消化を助ける。基礎熱、つまり生来の熱を増やし、体を強壮にし、尿、汗、気〔を出させること〕で体を清める。その弊害：熱質(garm mizāj)の激しい子供たちには適さない。その対処法：熱質の人がこの酒を飲まねばならないときは、水やバラ水と混ぜると害がなくなる。平安あれ。

白くて軽いブドウ酒の効能：栄養価が低い。熱質の人に適しており、黄胆汁を少しずつ尿中に排出する²¹²。その弊害：黒胆汁質²¹³の胃の持ち主が飲むと、空気が腹に溜まり、関節痛が生じる。その対処法：ヨーグルトスープ(sapīdbā)やハーブ(tawābil)、乾肉(tabāha-yi xušk)と一緒に飲むと害がなく、体に効

²¹⁰ クルアーン第2章219節。

²¹¹ この部分は主にラーズィーの『食べ物の効能とその弊害への対処法 (Manāfi‘ al-ağdīya wa daf‘ maḍārrihā)』の言に基づいている (Manāfi‘: 16-17)。以下、校訂本巻末のミーノヴィーによる用語集 (Mīnovī 2002: 126-128) も参照のこと。

²¹² 黄胆汁過多の人間は熱乾質とされるが、その黄胆汁が排出されることで気質のバランスが良くなると考えられていたことを示すものであろう (前嶋 1996: 214-219参照)。

²¹³ ロンドン写本では「冷たい胃の持ち主」。

く。

重くも軽くもない〔チューリップ色の〕ブドウ酒の効能：できが良ければ、酒の中では最もすぐれている。バランスのとれた体質の人に適している。その弊害：熱質の人には害がある。その対処法：水やバラ水と混ぜ、〔ザクロのつまみ〕と一緒に食べると害がない。

〈63〉 渋みがあり、重いブドウ酒の効能：〔体内の〕空気を分解し、粘液質を取り除く。また、胃痛や腹痛に効果がある。〔その弊害：熱質の人々の中でも、特に熱質が強い場合には、頭痛や発熱や肝臓熱 (garmī-yi jigar) を併発する。〕その対処法：水と混ぜたり、酸味のある食べ物と一緒に飲んだり、酸味のある果物をつまみにすると害がない。

バジル酒 (šarāb-i rayhānī) の効能：心臓や胃を強壮にし、〔体内の〕空気を分解する。病気による発熱に効果がある。《95b》 その弊害：眼痛、頭痛を生じ、すぐに頭に回る。その対処法：樟脳、バラ水、スマレ、〔アオヤナギ、〕酸味のある果物をつまみにする。

新酒の効能：体内の血液を増やし、血管を満たす。その人の〔湿った〕気を増す。その弊害：湿質の人、空気が過多の人、体液が体に充満している人には適さない。その対処法：乾した細切れ肉〔や乾物〕をスパイスとともに摂らなければならない。また、乾した果実をつまみにする。

〔古〕酒の効能：空気質と粘液質の人に良い。胃や肝臓²¹⁴の熱に適し、〔悪い〕気のために〔頭に〕痛みを感じる人によい。〈64〉 その弊害：痩せた人や乾質で瘦身の人には害がある。その対処法：水と混ぜ、乳粥、〔マスティック樹脂 (sikkiz)²¹⁵、オオバコ、〕冷たい食べ物や生の果物を一緒に飲むと、害が

²¹⁴ ロンドン写本は「胃や腎臓」。

²¹⁵ ウルシ科の木から採れる樹液。ガムとして広く使われる。ギリシアのヒオス島のものが有名。

ない²¹⁶。

〔混ぜ合わせていないブドウ酒の効能：胃や腹を快調にする。〔体内の〕空気を分解するのにすぐれ、消化を助ける。その弊害：頭痛や眼痛には良くない。この酒の働きは非常に強い。その対処法：体に合う程度に混ぜ合わせることである。〕

混ぜ合わせ、濾したブドウ酒の効能：ひどい二日酔いの人や、頭痛で苦しんでいる人に良い。熱質の人に適している。その弊害：腹に空気を生ぜしめ、関節痛をもたらす。胃や肝臓を冷やす。その対処法：肉汁スープ（gūštāba）や、ハーブやスパイスをたくさん用いた細切れ肉と一緒に摂る。また、乾した果実をつまみにする。

酸味があったブドウ酒の効能：熱質の胃や肝臓の人に適する。その弊害：性欲が減退する。脚を萎えさせる。その対処法：〔脂を用いた〕ヨーグルトスープ、砂糖菓子、甘いものを一緒に食べると害がない。

太陽に育まれたブドウ酒の効能：すべての飲み物の中で、最も上質で消化吸収がいい。その弊害：血を急速に腐らせ、〔腐敗による熱を生じる。〕〈65〉その対処法：サワースープ（sikbā）²¹⁷、スーマック²¹⁸〔スープ〕、ザクロスープと一緒に摂る。大黄やザクロをつまみにし、あとから酢蜜を食べると、害がない。

干しブドウ酒の効能：なかでも透きとおったもの〔の効能〕は、混ぜ合わせたブドウ酒に似ている。〔それを飲むと〕乾質に傾く。激昂しやすい人に適す。その弊害：これらの中で色の濃いものは、強いブドウ酒に似ており、消化吸収が悪く、黒胆汁を生ぜしめる。また腹に空気を溜め、腹を膨張させる。肝臓の道を閉ざす。その対処法：酢蜜、チコリー水、キュウリの種、ある

²¹⁶ ロンドン写本に従う。校訂本は「害がある」。

²¹⁷ ひきわり麦や肉、香草などを煮込み、酢で味付けしたスープ。

²¹⁸ ウルシ科の灌木。小さな赤い実がスパイスとして使われる。

いはバードラング・キュウリ [をともに摂る]。

ナツメヤシ酒の効能：体を肥えさせ、《96a》血のめぐりを非常によくする。新しいものは、特にそうである。その弊害：濃厚で、消化吸収が悪い。肝臓の道を閉ざし、黒胆汁質の血を生ぜしめる。その対処法：ザクロ酒や酢蜜、黒胆汁質を取り去るような薬を用いれば、害がない。

このことについては、このくらいで十分であろう。次に、ブドウが〔この世界の〕どこで発見されたのか、そしてブドウ酒がどのようににつくり出されたのかを明らかにしよう。

ブドウ酒の発見にまつわる逸話

諸史には次のように記されている²¹⁹。ヘラート (Hirāt) に1人の帝王がいた。成功し、威令があり、〈66〉富や財は多く、軍隊は強大で、ホラーサーン全土が彼の命令のもとにあった。彼はジャムシードの血筋であった。〔高い見識と、光輪をもち合わせていた。〕彼の名はシャミーラーン (Šamīrān)²²⁰といった。ヘラートに今も栄えて残っている「シャミーラーン城 (diz-i šamīrān)」は、彼が造営したものである²²¹。彼には1人の息子がいた。名前を

²¹⁹ 同じような内容の話が、12世紀の他のペルシア語文献にも見られる。*Rāḥat al-sudūr*: 416-28; 守川他訳 2009: 215参照。

²²⁰ バフラーム・グールの母方の祖父の名とされるが詳細は不明。

²²¹ 13世紀の『ヘラート史 (*Tārīkh-nāma-yi Hirāt*)』では、シャミーラーン城を建てたのは、ガユーマルスの末裔であるシャミーラ (Šamīra) という女性だとされている。同書の引く伝承によれば、そもそもタフムーラスの時代に圧制を逃れた部族が現在のヘラート東方のオーベ (Obēh)のまちのあたりに来て定住した。しかし後に人々の間に争いが起こり、一団の者たちが争いに敗れて西に向かい、いまのヘラートのあたりに落ち着いていたが、勝った側から毎年貢納を支払うよう求められていた。シャミーラは一計を案じ、4年分の貢納金を先払いしておき、その4年の間に彼らの居住地に高い壁を持つ強固な城を建設した。「シャミーラーン城」と呼ばれたこの堅固な城のおかげで、それ以降彼らは貢納金を支払う必要がなくなった。その後人口が増えていくに従って、町は拡張され、ヘラートの町となった (*Tārīkh-nāma-yi Hirāt*: 63-73)。Samizay (1981: 113-114) はヘラート旧市街の北壁に近い丘の上にある「イフティヤールッディーン城 (Qal'a-yi Ixtiyārūddīn = Herat Fort)」の場所こそが、かつてシャミーラーン城があった場所ではないかとする。

バーダーム〔・バフト〕(Bādām [Baxt]) といい、たいそう勇猛果敢で、臂力にすぐれていた。その当時、弓を射ることに彼に並ぶ者はいなかった。

ある日、シャミーラーン王は見晴らしのよい高台に座っていた。重臣たちが彼のそば近くに〔仕え〕、また息子のバーダーム〔・バフト〕も父の傍らで〔玉座のわきに立っていた。〕偶然、1羽のホマー鳥 (humā)²²² が飛んできて、鳴き声をあげ、玉座の正面のやや離れたところに降り立ち、地面にうずくまった。シャミーラーン王がそちらを見ると、1匹の蛇がホマー鳥の頸に巻きつき、鎌首をもたげてホマー鳥に咬みつこうとしていた。シャミーラーン王は言った。「おお、獅子のごとき勇者たちよ。〔このホマー鳥は、この大蛇 (izdihā) から逃れようとやってきて、我らに助けを求めているぞ。そなたたちの中で〕矢を命中させて、このホマー鳥を蛇の手から救い出すのは誰か？〔さすれば大蛇は死に、ホマー鳥は助かるぞ。〕」

バーダーム〔・バフト〕は言った。「おお、王よ。〔それは〕わたくしめの仕事です。〔神が望みたまうならば、必ずやわたくしめが成し遂げてみせましょう。〕」

彼は弓に矢をつがえ、目にも止まらぬ早さで〕矢を放ち、蛇の頭を地面に縫いつけた。ホマー鳥には傷ひとつなかった。難を逃れたホマー鳥は、しばらく辺りを飛び回ってから去っていった。

偶然にも翌年の同じ日に、シャミーラーン王は高台に座っていた。〔すると〕かのホマー鳥がやってきて、彼らの頭上を〔しばらく〕飛び、そして地面に舞い降りた。それはまさに、蛇が射抜かれた場所であった。〔ホマー鳥は〕くちばしから何かを地面に置いた。そして何度か鳴いた後、飛び去った。〔シャミーラーン〕王はずっと眺めていたが、一同に言った。「なんと、あれは、我らが〔去年〕蛇から〈67〉救ってやったホマー鳥ではないか！今年、そのお返しに戻ってきて、我らに贈り物を運んできたぞ。くちばしで地面を突いていたからな。行って見てこい。何か見つけたら持ってくるの

²²² イランの伝説の鳥。この鳥の影に入った者は王者になると言われ、名声や幸運のシンボルとされる。

だ。」

数人の者が行き、そこに2、3粒の種が置かれているのを見つけた。拾い上げ、シャミーラーン王の玉座のもとに持ってきた。王は手にとって、《96b》〔3粒の〕種をじっくりと見た。識者〔や重臣〕たちを呼び、それらの種を示して言った。「ホマー鳥はこの種を返礼として我らのところへ運んできた。これについてどう思うか？我らはこの種をどうすればよいのか？」

〔彼らはみな口をそろえて言った。「あの鳥はこの種を良かれと思って持ってきたのでしょうか。いずれにせよ、この中には益があるに違いありません。たとえ私たちがこのような種をこれまで見たことがないとしても、他の種と同様に、この種の恵みはその中にあるはずです。」

そうして〕彼らは口をそろえて言った。「この種を蒔き、よく世話をすれば、年の終わりまでに何か現れるでしょう。」

そこで〔シャミーラーン〕王は種をお抱えの庭師に渡し、命じた。「〔私の庭の〕一隅に〔この3粒の〕種を蒔け。その周囲には〔しっかりと〕囲いをして、家畜が近づけないようにせよ。また鳥たちからも守れ。常に状況を私に報告せよ。」

そこで庭師は言われたとおりにした。ノウルーズの月のことだった。

しばらくして、これらの種から小さな枝が伸びてきた。庭師は帝王に報告した。王は、重臣や識者たちとともに、その苗木のもとにやってきた。〔みなは〕「このような枝や葉は見たことがない」と言って帰っていった。

さらにしばらくすると、枝が生い茂り、葉²²³が大きく広がった。房はまるで粟のように、枝から垂れ下がっていた。庭師は王のもとにやってきて、言った。「庭で、これほどまでに瑞々しい木は他にはありません。」

王は再び、識者たちとともに木を見に行った。すると苗木は〈68〉は成木となって〔多くの葉が茂り、〕いくつもの房が枝から垂れていた。〔王は〕驚いて、言った。「すべての枝に実になるまで待たねばならぬ。一体この木の

²²³ ベルリン写本・校訂本ともに“bilak(g) (ついたばかりの実)” だが、ロンドン写本に基づき、“barg (葉)”と読む。

果実はどのようなものだろうか。」

房が大きくなり、実が完全に熟したが、それでも誰も手を出そうとはしなかった。

やがて秋が訪れ、リンゴやナシやモモやザクロといった果物が熟した。〔シャミーラーン〕王は庭にやってきて、ブドウの木を見た。それはまるで着飾った花嫁のようで、〔すべての〕房が大きくなり、緑色だった〔実〕は黒みがかかり、黒玉のように輝いていた。そして、1粒ずつ実が落ち始めていた。識者たちは口をそろえて言った。「これこそがこの木の果実でしょう。木は完全に成長したのです。実が房から落ち始め〔果汁となっているのがその証拠です〕。この木の恵みはこの果汁の中にあると思われますから、この果汁をしぼって樽に入れ、どのようになるか見定めましょう。」

しかし誰1人として、その実を口に含んでみようとする者はいなかった。もしかするとそれが毒であり、死んでしまうのではないかと恐れたからであった。そこで、庭の同じ場所に樽を置き、ブドウの果汁をしぼって樽を一杯にし、〔それ以上は手を触れなかった。〕〔王は〕庭師に、「〔用心するのだぞ。〕何であれ目にしたなら、私に報告せよ」と命じ、そして《97a》彼らは帰っていった。

果汁が樽の中で発酵し始めたので、庭師は行って、王に伝えた。「あのブドウの果汁は、火にかけた釜のように、グツグツと煮立っております²²⁴。」

〔王は〕言った。「収まったら、私に知らせよ。」

ある日、庭師が〔樽のもとに行き、ブドウの濃い果汁を〕見ると、〔それは〕透きとおって煌いており、紅いルビーのように輝いていた。〔発酵は〕収まっていたので、ただちに〔王のもとに行き、見たとおりのことを〕王に〈69〉報告した。〔王は、その中の1つの樽を持ってくるよう命じた。〔樽が〕王の御前に置かれると、王は重臣や識者たちに参じるよう命じ、その樽を彼らに見せた。〕誰もその透明な色に驚きを禁じえなかった。彼らは〔口をそろえて〕言った。「あの木はまさに、これを利用するためにあるの

²²⁴ ロンドン写本 “ān āb-i angūr hamčūn dīg bar ātaš mī-jūšad wa tīr mī-andāzad” に基づき訳出する。

です。ですが、これが毒であるのか薬であるのか、私たちにはわかりません。」

そこで、〔死刑に処せられることになっていた〕1人の殺人犯を牢から出し、この〔ブドウの果汁からできた〕飲み物をその者に与え、どのような結果が生じるか見極めることになった。彼らはそのようにした。〔王は命じて、殺人犯を牢から出し、〕その飲み物を殺人犯に与えた。男は飲むと、少し顔をしかめた。みなは言った。「もう1杯欲しいか？」

〔男は〕言った。「はい。」

もう1杯が彼に与えられた。男は陽気になり、歌い、尻を振って踊り始めた²²⁵。帝王に対する畏れは、彼の目から薄れていった。〔男は〕言った。「もう1杯ください。その後で、私をどうされようとも構いません。どうせ人は死ぬのですから。」

3杯目が男に与えられた。〔男はそれを〕飲み干すと、頭が重くなり、眠ってしまった。そして翌日まで目を覚まさないままだった。

〔男は〕目覚めると、王の御前に連れて行かれ、次のように尋ねられた。「昨日おまえが飲んだのは、どのようなものであったか？ またおまえ自身はどのように感じたのか？」

〔男は〕答えた。「何を飲んだのかはわかりませんが、美味しいものでした。ああ、今日もまた、あれを3杯飲めたらなあ！ 1杯目は、味が苦かったので、無理やり飲み干しました。ですが、胃に収まったときには、もう1杯欲しいという気持ちになりました。2杯目を飲み干すと、心が楽しく陽気になって〔力が湧き、〕私の慎みは消え去りました。私にとってこの世はとるに足りないものとなり、私と王〔や貴人たち〕の間には、違いなど何もないように思いました。世の中の〔すべての〕悲しみが、私の心から〔すっかり〕忘れ去られて〈70〉しまいました。そして3杯目を飲み干すと、心地よい眠りに落ちたのです。」

王は、この男が犯した罪を赦して釈放した。

²²⁵ ロンドン写本は「足を踏みならし、手をたたき始めた」。

こうして識者たちはみな、ブドウ酒以上にすばらしく、偉大で、〔好ましい〕恩寵はない、ということで一致した。なぜなら他の食べ物や果物には、ブドウ酒に備わるこのような効能や特性がないからである。

《97b》 ブドウ酒を飲むことは、シャミーラーン王によって発見された。〔王は〕宴席の設け方を定めた。その後も、酒のためにルード (rūd)²²⁶が作られ、楽曲が奏でられた。ブドウの種が蒔かれた庭は、今も残っている。その庭をヘラートでは「グーレ²²⁷〔庭園〕([bāg-i] gūra)」と呼んでおり、〔ヘラートの〕町の門のそばにある。

また、次のように言われている。ブドウの苗木はヘラートから世界中に広まった。〔水、空気、土壤に応じて、それぞれの町や地方で多種多様な品種が生まれたが、〕ヘラートにあるようなブドウ〔の品種〕は他の町や地方ではまったく見られない。〔ヘラートでは〕100種類以上のブドウ〔の品種〕に名前をつけて呼んでいるほどである²²⁸。

ブドウ酒の美德は豊富にある〔が、すべてを述べたら冗長になろう。知性ある人々には〔このくらいで〕十分であろう〕。

²²⁶ ルードは堅琴に似た弦楽器の一種。校訂本に若干の乱れがあるが、酒を飲む宴席のために楽器が作られた、と解釈する。ロンドン写本参照。

²²⁷ 「グーレ (gūra)」はもともと「熟していないブドウ」の意である。庭園の位置は不明であるが、本文にグーレ庭園が門のそばにある、と書かれていることから、シャミーラーン城(イフティヤールッディーン城)と、北壁にある2つの門のうち城に近いマリク門の間あたりにあった、ということであろうか。ヤーコートは、簡単に「ヘラートに属す村」と記す(*Mu'jam al-buldān*, iv: 218)。

²²⁸ ニザーミー著『四つの講話 (*Čahār maqāla*)』には、「ヘラートの地域には120種の葡萄があり、それぞれほかのものよりは甘く美味だった」との記述がある(黒柳訳 1969: 236)。

識者たちは、美しい顔を大いなる幸運とみなし、それを目にすることを吉兆と考えている。美しいものを目にするという幸運は、天空の吉星のもたらす幸運と同じ影響を人々に与えると言われている。これは次のようにたとえられる。たとえば香の入った箱の中の衣服は、香から匂いが移り、香がなくなるとよい匂いをあたりに放つ。また、水面に太陽の光が反射すると、日の射さないところでも光が届く。すなわち、人の見目の美しさとは、至高なる神の定めによって人間に付与される、幸運な星回りの結果なのである。

美は、あらゆる言語において賞讃され、あらゆる知性によって褒め称えられている。この世の中には、それを目にすることによって楽しい気持ちになり、心が洗われるような美しいものは数多くあるが、どんなものも美しい顔にはかなわない。なんとなれば、美しい顔からは、いかなる喜びにもまさる極上の喜びが生まれるからである。美しい顔は、この世界がめでたいものであることの証だとも言われている。美しい顔が美しい性質と結びつけば、それはこの上なくめでたいものとなる。外面も内面もともに美しければ、神からも人々からも愛される者となる。

美しい〔顔〕を目にすることには、4つの効用がある。1つめは、〔それを〕見る者に、幸運な1日をもたらすことである。2つめは、〈72〉楽しいひとときを与えてくれること。3つめは、男気や俠気を抱かせること。4つめは、財を増し、地位を高めることである。すなわち、人が1日の最初に美しい顔を見て楽しい気持ちになるというのは、たいそう縁起のよいことであり、その日は1日中よいことばかりである。美しい顔の者と一緒にいると、心地よい時間を過ごすことができ、悲しみも消え失せる。そのようにして美しい者を見続けていると、たとえ俠気がなく卑屈な人間であっても、俠気や男気が生まれてくる。また美しい者と一緒にいるのを見ると、人々はその人

²²⁹ ロンドン写本ではこの章が欠けている。

物に敬意を払うようになり、その人物もまた、良い暮らしをするために一所懸命に財をなそうとする。

美しい顔は、老人を若者に、若者を子供に、子供を楽園の住人にするとも言われている。使徒〔ムハンマド〕—— 彼に平安あれ —— は言っている。
(アラビア語) 「困ったことがあれば、眉目麗しい者に頼みなさい」、つまり
(ペルシア語) 「必要があれば、美しい顔をした者に頼むように」と。

また、いろいろな人が美しい顔を巧みに形容し、呼び名を与えている。ある者は「愛の広場 (maydān-i ‘išq)」と言い、またある者は「喜びの草原 (ṣahrā-yi šādī)」、「愛情の園 (rawḍa-yi mihr)」、「創造の飾り (pīrāya-yi āfarīnaš)」、「楽園の徴 (nišāna-yi bihišt)」と言っている。一方、哲学者たち (xudāwandān-i ‘ilm-i filāsafa) は、「〔美しいものとは〕神の創造の第1の原因であり、知識の探求はそこへと向かう。それは創造主についての目印そのものであり、神の本質の美へと続く道を示す」と言う。自然哲学者 (ṭabī‘iyān) は、「すべてのものには過度、不足、均衡〔の3つの〕状態があるが、整然とした姿は常に〈73〉均衡状態によっている。そこで考えてみるに、均衡状態にあるものこそが最も美しい。それはバランスのとれた姿をしているからである。今あるこの世界も均衡によって成り立ち、それによって繁栄しているのである」と言う。輪廻主義者 (tanāsuxiyān)²³⁰ は、「それは創造主の下賜品であり、前世でなした敬虔な信仰と禁欲に対する報いとして、〔創造主が〕自らの光によって彼に与えられたものである」と言っている。また、真知を求める者たち (xudāwandān-i ma‘rifat) は、「それは灯火の熱であり、灯火を燃え上がらせるものである」と言い、別の人々は、「それは神秘の開示であり、慈悲の雨である。それは真知の園に生気を与え、熱望の木に花を咲かせる」、あるいは、「それは真理者たる神の徴であり、探求者たちに真理を顕示するものである。彼らはその真理でもって神へと帰す」とも言っている。

美しいものを目にするということについてはさまざまなことが言われているが、もしすべてを記したら長くなる。ここではアブドゥッラー・〔ブン・〕ター

²³⁰ 「輪廻」を意味する “tanāsux” は、ヒन्दウ教徒、仏教徒などのほか、過激シーア派 (ḡulāt) を指すこともある (EP: “TANĀSUKH”)。

ヒルについての話を記そう。

逸話：次のように言われている。

アブドゥッラー・ブン・ターヒルは自らの軍の高官の1人を投獄し、どれほど執りなしがなされても機嫌を直さなかった。そうして如何ともしがたい状況になり、誰もが彼のことをあきらめてしまった。この高官には弁の立つ侍女が1人いた。彼女は書簡をしたため、アブドゥッラー・ブン・ターヒルがマザーリム法廷²³¹に出席する日、その侍女は顔を覆って彼のもとに出かけていった。〔彼女は〕書簡を差し出して言った。（アラビア語）「アミールよ、寛容を守りたまえ²³²。持てる者は与え、〈74〉力ある者は赦すのですから」、つまり（ペルシア語）「アミールよ、得る者は与え、力ある者は赦します。」

アブドゥッラーは言った。（アラビア語）「女よ、そなたの主人の罪は、赦しを請うには大きすぎる」、〔つまり〕（ペルシア語）「女よ、おまえの主人の罪は、それを赦すには大きすぎる。」

侍女は言った。（アラビア語）「おおアミールよ、あなたに対する私の執りなしは、拒絶するには²³³大きすぎるでしょう」、すなわち、（ペルシア語）「私のあなたに対する執りなしは、却けるには大きすぎるでしょう。」

彼は言った。（アラビア語）「拒絶できないほどのそなたの執りなしとは何か?」、〔つまり〕（ペルシア語）「却けきれないほどのおまえの執りなしとはどのようなものか?」

侍女は顔から手を離し、顔を彼に見せて言った。（アラビア語）「これが私の執りなしです」、〔つまり〕（ペルシア語）「これこそが私の執りなし

²³¹ シャリーアに関わる案件を扱うカーディー法廷に対し、シャリーアに規定のない行政関連事案を扱う法廷がマザーリム法廷である。カーディー法廷で裁けない官僚の不正、圧政などもこの法廷の取り扱いであった。初期にはカリフが、やがてワズィールやアミール、スルターンがこれを主宰するようになっていった。またカーディー法廷の判決に不服な場合の上級審としての役割も担った。

²³² クルアーン第7章199節。ムハンマドに対してアッラーが呼びかける箇所だが、ここではクルアーンの章句を利用して言葉をつむぐ侍女の見識の高さを示している。

²³³ 校訂本では一部母音点がないが、“minmā yajtabā’ radda-hu”と読む。

です。」

アブドゥッラー・ブン・ターヒルは侍女の顔を見ると、微笑んで言った。
(アラビア語)「なんと尊い執りなしか！そなたをここへ連れてきたものの
なんと偉大なることか！」、[つまり] (ペルシア語)「おまえの持ってきた
執りなしのなんと偉大なことよ。おまえの心がけのなんと健気なこと
よ。」

このように言って、[アブドゥッラー・ブン・ターヒルは] 命じてその隊長を釈放し、賜衣を与え、慰撫して、彼に見合った褒美を与えた。この話は、美しい顔の価値がどれほどのものか、またその尊さはいかほどかを知らしめるために記した。

逸話：次のように言われている。

スルターン・マフムード (Sulṭān Maḥmūd)²³⁴はある日、散策に出かけた。そして郊外から町のほうへと戻ってきた。その頃はまだアミールで²³⁵、父も存命だった。町の門のところまで来たとき、彼は見物人たちの中の1人の少年に目を留めた。汚れた服を着て、年の頃は12歳くらいだったが、たいそう美しい顔で、人目を惹き、優美で、〈75〉完璧な容姿をしており、背丈もちょう

²³⁴ Abū al-Qāsim Maḥmūd b. Sebüktegin. ガズナ朝第3代の王。在位998-1030年。テュルク人グラーム軍団を中核とする強力な軍を率い、東西に大征服を行った。彼が死去する頃には、ガズナ朝の領域は、北はマーワラーナフル、ホラズムから南はアラビア海沿岸まで、西はイラン高原西部から東はパンジャーブ地方にまでおよぶ広大なものとなっていた。特に30年余の在位期間に20回近くのインド遠征を敢行し、多くの町や寺院を征服、あるいは破壊したとされ、後代の資料では「al-gāzī (聖戦士)」の異名を与えられている。精力的な建築活動とともに、各地の学識者をガズニに招いた（あるいは強制的に連行した）ことでも知られ、これによってガズニの町は13世紀まで、東方イスラーム世界の文化、政治の中心となった。

²³⁵ ガズナ朝時代、王国の、特に軍における位階（ステータス）の中では、「アミール (amīr)」は王子や王の兄弟など王族のみに与えられるものであった (稲葉 1988: 28, n.10 参照)。本文中で「まだアミールで」とあるのは、王位 (スルターン位) に就いていなかったという意味であろう。

どよいくらいだった²³⁶。[スルターンは]手綱をひいて言った。「あの少年を私のところへ連れてこい。」

彼が連れてこられると、[スルターンは]言った。「少年よ、おまえは何者で、父親はどこの誰か？」

[少年は]言った。「父はおりません。ですが母はこれこれの街区に住んでいます。」

[スルターンは]言った。「どんな仕事をしているのか？」

[少年は]言った。「クルアーンを暗唱しています。」

[スルターンは]その少年を館に連れていくよう命じた。スルターンは[館に戻って]馬を降りると、少年を呼び、彼にさまざまなことを尋ね、またいくつかの仕事を命じてみた。すると彼はとても賢く、見事にこなしてみせた。運も彼に味方した。[スルターンは]少年の母親を連れてくるよう命じ、そして[彼女に]言った。「そなたの息子は私が引き受けた。私が彼を訓育しよう。息子の件については安心してまかせよ。」

[スルターンは]母親に十分なねぎらいを命じ、息子には美しい服を着させた。そして教師のもとで読み書きや、武器の扱い、騎馬術を学ばせた。

[スルターンは]少年に言った。「毎日早朝、私が謁見の場を開く前に、私のもとに来て、立って控えておれ。」

そこで毎朝、夜が明けるか明けないかのうちに、少年は出仕した。スルターンは私室から出てくると、真っ先に彼の顔を見るのであった。スルターンの意図は、少年の美しい顔を見るという吉兆を試すことにあった。[実際]運気はたいそう良くなった。部屋から出てきて彼を目にした日には、望みがすべてかなうのだった。この少年は[立派な]衣服と厚遇のおかげで、美しさが100倍にもなった。スルターンは日に日に彼を近くに置くようになり、彼もますますそれに応えるようになった。スルターンは彼に富と財産を与え、信頼を〈76〉増し、ねぎらいを加えていった。この少年の富や財は莫大

²³⁶ ミーノヴィーは、これを有名なマフムードの小姓アヤーズ (Ayāz) のことだとしている (Minovi 2002: 109)。マフムードとアヤーズの関係については、その後のペルシア文学の中でもたびたび言及されている。EF: “AYĀZ” 参照。

なものとなった。スルターンは彼を愛でるあまり、[彼なしでは] いつとも我慢できないほどになった。

この少年は18歳になり、その美しさは[さらに] 10倍になった。彼[の美しい顔] を見るというめでたさのおかげで、スルターンは多くの偉大なる実績や征服をなしとげた。ヒンドウスターンの幾多の地方を征服し、ホラーサーンの諸都市を平定し、そしてスルターンの位に就いた。

だがある日、少年はちょっとしたことで遅れて出仕した。スルターンは彼がいなことに不安になっていた。彼が出仕すると、怒りにまかせて叱責して言った。「そらそら！[なんとも] 身のほどをわきまえておることよ。私がおまえをどこから拾い上げ、どれほどの地位につけてやったか、おまえがどれほどの富や財をもっているか、何もわかっていないではないか。大胆にも1時間も私の前からいなくなるとはな。」

スルターンが言い終えると、[少年は] 言った。「スルターンよ、どうかお聞きください。まさにおっしゃるとおりです。[あなたは] わたくしめを地面から拾い上げ、天にまで達せしめてくださいました。わたくしめは一介の賤しき者でありましたが、いまやご主君の王国において、50万ディーナール以上のものを持っています。それも、土地や家畜や奴隷や自由人の配下を除いてです。王はわたくしめに、ご主君の王国において、わたくしめよりも高い位を持つ者がいないほどの地位と威光を与えてくださいました。そしてわたくしめにしてくださったこれらすべてのご厚意や、与えてくださったこれほどの富、達せしめてくださったこのような地位にもかかわらず、わたくしめにいかなる感謝や謝意もお求めにならず、ご自身のうちにおさめられています。というのも、〈77〉 2つの意味において、ご自身のお心のために、わたくしめを遇されているからです。1つは、わたくしめをご覧になることで吉兆としようとする事。いま1つは、わたくしめが王のお心の憩いの場、庭園、果樹園であることです。もし王がご自身の憩いの場を飾りたてようとするのであれば、それへの謝意を誰かに求めてはならないでしょう。もちろん、わたくしめは[いつも王に] 感謝し、良き祈りを捧げる者でありますけれども。」

王は、この少年の返答にいたく感心した。そこで彼をねぎらい、褒美を与

えた。

美しい顔についての、高貴な人々や真実を知る人々の言葉は数多いが、
[ここに] 書き記した程度のことからも、至高なる神からのこの賜り物がどれほど崇高なものであるのか、そして貴人たちが美しい顔をどれほど愛でてきたのかを知ることができよう。この書は、美しい顔についての記述でもって、めでたく締めくくろう。書き手と読み手に祝福あれ！

(アラビア語) アッラーの助力と恩寵により、ここに書き終える。まことに主は、善と幸運と安寧と健全をもって終わらせるお方である²³⁷。

²³⁷ 「最後の文字は、写本においては、文字が続け書きされ、急いで書かれているため、記号のように見える。それゆえ、本来どのような語だったのか推測するのは困難である」(Mīnovī 2002: 77, n. 2)。

参考文献

『ノウルーズの書』校訂および翻訳

Mīnovī, M. (ed.) (2002) *Nawrūz-nāma: dar manšā' wa tārīx wa ādāb-i jašn-i nawrūz*. Tehran: Intišārāt-i Asāṭīr.

Ḥaṣūrī, A. (ed.) (2000) *Nawrūz-nāma*. Tehran: Našr-i Čašma.

Розенфельд, Б. А. (пер.) (1961) 'Омар Хаййām: Трактаты. Москва: Академия Наук СССР.

一次史料略号

'*Ajāyib*: Muḥammad b. Maḥmūd al-Ṭūsī, '*Ajāyib al-Maxrūqāt*. M. Sotūde (ed.), Tehran: Dānišgāh-i Tehrān, 1966.

Bāz-nāma: 'Alī b. Aḥmad Nasawī, *Bāz-nāma*. 'A. Ġaravī (ed.), Tehran: Wizārat-i Farhang wa Hunar, 1975.

Dīwān al-Mutanabbī: Abū al-Ṭayyib al-Mutanabbī, *Šarx dīwān al-Mutanabbī*. 'Abd al-Raḥmān al-Barqūqī (com.), 4 vols., Beirut: Dār al-Kitāb al-'Arabī, 1980.

Dū faras-nāma: anonym., *Dū faras-nāma: manṭūr wa manzūm dar šināxt-i nižād wa parwaraš wa bīmārī-hā wa darmān-i asb*. 'A. Sulṭānī (ed.), Tehran: McGill University Institute of Islamic Studies Tehran Branch, 1987.

Faras-nāma: Zabardast Khān, *The Faras-nāma of Zabardast Khān*. D. C. Phillott (ed.), Calcutta: Asiatic Society of Bengal, 1911.

Historical Astrology: Abū Ma'šar, *On Historical Astrology: The Book of Religion and Dynasties*. 2 vols., K. Yamamoto & C. Burnett (eds.), Leiden & Boston: E. J. Brill, 2000.

Jamāhir: Abū Rayḥān Muḥammad al-Bīrūnī, *al-Jamāhir fī al-jawāhir*. Y. Hādī (ed.), Tehran: Šīrkat-i Intišārāt-i 'Ilmī wa Farhangī, 1995.

Kāmil: Abū al-Ḥasan 'Alī b. al-Aṭīr, *al-Kāmil fī al-tārīx*. 9 vols., C. J. Tornberg (ed.), Beirut: Dār Šādir, 1966.

Maḡātīḥ al-'ulūm: Abū 'Abdullāh Muḥammad al-Xwārizmī, *Kitāb maḡātīḥ al-'ulūm*. G. van Vloten (ed.), Leiden: E.J.Brill, 1968.

Majmal al-tawārīx: anonym., *Majmal al-tawārīx wa al-qīṣaṣ*. M. T. Bahār (ed.), Tehran:

Čāpxāna-yi Xāwar, 1939.

Manāfi‘: Abū Bakr Muḥammad b. Zakariyā al-Rāzī, *Manāfi‘ al-ağḍīya wa daf‘ maḍārrihā*. Beirut: Dār al-Šādir (reprint of 1887-88 ed.).

Mu‘jam al-buldān: Abū ‘Abdullāh Ya‘qūb al-Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*. 5 vols., Beirut: Dār Šādir, 1984.

Murūj al-dahab: Abū al-Ḥasan ‘Alī al-Mas‘ūdī, *Murūj al-dahab*. 7 vols., B. de Meynard, A. P. de Courteille, & C. Pellat (eds.), Beirut: Publication de l’université libanaise, 1966-79.

Qābūs-nāma: Kay Kā‘ūs b. Iskandar b. Qābūs, *Qābūs-nāma*. Ğ. Ḥ. Yūsufī (ed.), Tehran: Intiṣārāt-i Bungāh-i Tarjuma wa Našr-i Kitāb, 1967.

Rāḥat al-ṣudūr: Muḥammad b. ‘Alī al-Rāwandī, *Rāḥat al-ṣudūr wa āyat al-surūr*. M. Iqbāl (ed.), Tehran: Intiṣārāt-i Amīr Kabīr, 1985.

Sīyar al-mulūk: Abū ‘Alī Ḥasan Nizām al-Mulk, *Sīyar al-mulūk*. H. Darke (ed.), Tehran: Intiṣārāt-i Bungāh-i Tarjuma wa Našr-i Kitāb, 1976.

Šubḥ al-a-‘šā’: Aḥmad al-Qalqašandī, *Šubḥ al-a-‘šā’*. M. Ḥ. Šams al-Dīn (ed.), Beirut: Dār al-Kutub al-‘Ilmīya, 1987.

Ṭabarī: Abū Jafar Muḥammad b. Jarīr al-Ṭabarī, *Tārīx al- Ṭabarī*, Cairo: Dār al-Ma‘ārif, 11 vols., 1979-1993.

Tārīx-nāma-yi Hirāt: Sayf b. Muḥammad al-Šayfī, *Tārīx-nāma-yi Hirāt*. Ğ. Ṭabāṭabā‘ī (ed.), Tehran: Asāfīr, 2005.

Zayn al-axbār: Abū Sa‘īd ‘Abd al-Ḥayy Gardīzī, *Zayn al-axbār*. R. R. Malek (ed.), Tehran: Anjuman-i Ātār wa Mafāxir-i Farhangī, 2005.

二次史料

Blankinship, Kh. Y. (tr.) (1993) *The History of al-Ṭabarī*, vol. 11: *The Challenge to the Empires*. Albany: SUNY Press, 1993.

Bosworth, C. E. (1994) *The History of the Saffarids of Sistan and the Maliks of Nimruz*. Costa Mesa, California & New York: Mazda Publishers.

——— (tr.) (1999), *The History of al-Ṭabarī*, vol.5: *The Sāsānids, the Byzantines, the Lakmids, and Yemen*. Albany: SUNY Press, 1999.

ボイス (Boyce, Mary) 著・山本由美子訳(1983) 『ゾロアスター教：三五〇〇年の歴史』, 東京：筑摩書房.

Busse, H. (1969) *Chalif und Grosskönig : die Buyiden im Iraq (945-1055)*. Beirut: Orient

Institut.

Crone, P. (2004) *God's Rule: Government and Islam*. New York: Columbia University Press.

Daniel, E. L. (1979) *The Political and Social History of Khurasan under Abbasid Rule 747-820*. Minneapolis & Chicago: Bibliotheca Islamica.

EF: *The Encyclopaedia of Islam*, New edition. P. J. Bearman, Th. Bianquis, C. E. Bosworth, E. van Donzel and W. P. Heirichs (eds.), Leiden: E.J.Brill, 1960-2008.

EIr.: *Encyclopaedia Iranica*. E. Yarshater (ed.), 1985-.

Göbl, R. (1971) *Sasanian Numismatics*. Braunschweig: Klinkhardt & Biermann.

——— (1973) *Der Sāsānidsche Siegelkanon*. Braunschweig: Klinkhardt & Biermann.

浜畑祐子 (1988) 「ノウルーズ」 『オリエント』 31(1), pp. 116-131.

——— (2004) 「第35章 イスラーム以前の輝かしい時代への賛歌 —— 『ノウルーズ・ナーメ』」 岡田恵美子・北原圭一・鈴木珠里編著『イランを知るための65章』 東京: 明石書店, pp. 192-195.

稲葉稷 (1988) 「ガズナ朝のハージブ」 『西南アジア研究』 29 pp.18-37.

——— (1995) 「ガズナ朝のナディーム」 『東方学』 89, pp.104-118.

伊藤義教 (1980) 『ペルシア文化渡来孝: シルクロードから飛鳥へ』, 東京: 岩波書店.

Khorasani, M. M. (2006) *Arms and armor from Iran: the Bronze Age to the end of the Qajar period*. Tübingen: Legat.

黒柳恒男 (訳) (1969) 『ペルシア逸話集: カーブースの書・四つの講話』, 東京: 平凡社.

Le Strange, G. (1905) *The Lands of the Eastern Caliphate*. Cambridge: Cambridge University Press.

前嶋信次 (1996) 『アラビアの医術』, 東京: 平凡社.

牧野信也 (訳) (1993) ブハーリー著『ハディース: イスラーム伝承集成』全三巻, 東京: 中央公論社, 1993.

Marlow, L. (1997) *Hierarchy and egalitarianism in Islamic thought*. Cambridge: Cambridge University Press.

守川知子 (監訳)・ペルシア語百科全書研究会 (訳注) (2009) 「ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースイー著『被造物の驚異と万物の珍奇』(1)」 『イス

- ラーム世界研究』2(2), pp. 198-218.
- 森本公誠 (訳) (1979-87) イブン・ハルドゥーン著『歴史序説』全三巻, 東京: 岩波書店.
- 岡崎正孝 (1987) 「4 イランの暦法——イラン暦とイスラーム暦と西暦」小島麗逸・大岩川嫩編『「こよみ」と「くらし」』東京: アジア経済研究所, pp. 164-171.
- Pourshariati, P. (2008) *Decline and Fall of the Sasanian Empire*. London & New York: Tauris.
- Rieu, C. (1879-83) *Catalogue of the Persian manuscripts in the British Museum*. 3 vols., London: British Museum.
- Rosenthal, F. (tr.) (1989) *The History of al-Ṭabarī*, vol.1: *General Introduction and From the Creation to the Flood*. Albany: SUNY Press, 1989.
- Sachau, C. E. (ed. & tr.) (1984) *The Chronology of Ancient Nations*. Frankfurt/Main: Minerva Verlag GMBH.
- Samizay, R. (1981) *Islamic Architecture in Herat*. Kabul: Research Section of International Project for Herat Monument, Ministry of Information and Culture.
- Shaban, M. A. (1970) *The ‘Abbāsīd Revolution*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 島崎三郎(訳) (1968) アリストテレス著『動物誌』上巻, 東京: 岩波書店.
- Sourdel, D. (1959) *Le vizirat ‘Abbāsīde de 749 à 936 (132 à 324 de l’hégire)*. 2 vols., Damas: Institut Française de Damas.
- Vorhoeven, J. D., A. H. Pendray & W. E. Dauksch (1998) “The Key Role of Impurities in Ancient Damascus Steel Blades”, *JOM*, 50 (9), pp.58-64.
- Watson, J. C. E. (1996) *Lexicon of Arabic horse terminology*. London & New York: Kegan Paul.
- Wensinck, A. J. (1992) *Concordance et indices de la tradition musulmane : les six livres, le Musnad d’al-Dārimī, le Muwaṭṭa’ de Mālik, le Musnad de Aḥmad ibn Ḥanbal*. 8 vols., Leiden & New York: E.J.Brill.
- 吉田豊 (2007) 「トゥルフアン学研究所所蔵のソグド語仏典と「菩薩」を意味するソグド語語彙の形式の来源について」『仏教学研究』62・63, pp.46-87.
- Zakeri, M. (1995) *Sāsānid Soldiers in Early Muslim Society: The Origins of ‘Ayyārān and Futuwwa*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Zanjānī, J.A. (2005) *Raṣad wa tārīx-guzārī dar Īrān*. Intiṣārāt-i Bahman-burnā, Tehran.

固有名詞索引 (五十音順)

アーダム 1, 47	アリー・ブン・アビー・ターリブ 70, 74
アーファリードウン x, 13-15, 23, 54, 69	アリストテレス 41, 52, 73
アーモル 36	アルダシール・パーバカーン 16
アーラシュ・ヴァハーダーン 54-55	アルプ・アルスラーン iii
アサド・ブン・アブドゥッラー 71	アルブルズ 4-5
アジャム viii-x, 2-4, 6, 14, 17, 19-21, 23-24, 28, 32, 36, 39, 41, 44, 47, 57, 62, 76	アレクサンドロス 16 (イスカンドル) 16, 41, 52
アドウド・アル=ダウラ 35, 65, 79 (パナーホスロウ) 35-36, 65	イーサー・ブン・アリー 66
アナトリア i	イーラジュ 14, 54
アヌーシーラヴァーン x, 16, 24, 34-35, . 46, 59-60, 72 (ホスロウ 1 世) 16	イエメン 51-52, 59
アブー・アル=アッバース 79-80	イスカンドル → アレクサンドロス
アブー・アル=カーシム・ウバイドゥッラー・ ブン・スライマーン・ブン・ワフブ 17	イブラーヒーム (アブラハム) 13
アブー・アル=ムザッファル・ アル=イスファザーリー 18	イブン・ハルドウン 6, 62
アブー・ドゥラフ・ミサル・ブン・ アル=ムハルヒル 66	イブン・アル=アスィール 18
アブー・ムスリム 71	イブン・スィーナ viii, 81, 83
アブドゥッラー・ブン・ターヒル ix, 70, 93-95	イブン・ムカッファア 66
アフラーシイヤーブ x, 54, 69	イブン・ムクラ 66
アブラハ・ブン・サッバーフ 59	イブン・ムハルヒル 66
アミーン → ムハンマド・アミーン	イラン i-iii, viii-xii, xvi, 3-5, 7-8, 10, 12-15, 18, 24, 28, 38, 54, 59, 65, 78, 81, 87, 95
アヤーズ 96	ヴァフリズ 59
アラブ 1-2, 28, 68, 72, 74, 76	ウマル・ハイヤーミー vi-viii, xi
アリー・カーマ 78	ウマル・ハイヤーム ii, v-viii, xii (ウマル・ブン・イブラーヒーム・ アル=ハイヤーム) 1 (ウマル・ブン・イブラーヒーム・ アル=ハイヤーミー) 18
	ウマル 1 世 28

エスファンディヤール	72	ザルトシュト → ゴロアスター	
エチオピア	59	サルム	14
カーディスイーヤ	28	使徒 → ムハンマド	
カーヒル	66	シャープール 1 世	x
カーフ	4	シャープール 2 世	24
カイ・カーウス	47	ジャイフーン	14, 54
カイ・クバード	xii	シャフレヤール	28, 41
カイホスロウ	28, 69	シャミーラ	86
ガズニ	95	シャミーラーン	xii, 86–89, 91
ガユーマルス	4, 7, 10–11, 13, 17, 54, 86	ジャムシード	xii, 3, 11–13, 15, 17, 29, 31, 38, 48, 86
カルカシャンディー	63	シャムス・アル＝マアーリー・カーブース・ブン・	
ガレノス	81, 83	ヴォシユマギール	iv, ix, 46–47, 65, 67, 78
ギャルディーズ	18	ジュンディー・シャープール	81
ギャルディーズィー	14	スイースターン	18
キンディー	51	ズバイダ	42
クタイバ・ブン・ムスリム	71	スライマーン（ソロモン）	39, 68–69
クテシフォン	16	ソクラテス	81
グラーム	ii, 21–22, 28–29, 95	ソルーシュ	28
クルディスターン	78	ゴロアスター	14–15
ケルマーンシャー	69	（ザルドウシュト）	15
コーカサス	i	（ザルトシュト）	14
ゴシュタースプ	15	ゴロアスター教	i–ii, v, x–xi, 4, 7, 12, 14–15, 28
サービア教	4, 10–11	ターケ・ポスターン	12, 69
サービット・ブン・クッラ	81	ターヒル	ix, 42–43, 70
サーム	58	タバリー	11, 39, 59
サイフ・ブン・ズィー・ヤザン	59	タバリスターン	78
ザッハーク	x, 12–14	タフムーラス	4, 7, 10–11, 10–11, 61, 86
サデ祭	14	ダマーヴァンド	5, 14, 54
サディール	58	ダマスクス	51–52
ザルドウシュト → ゴロアスター		チーン（中国）	14

中央アジア	i	ハラフ・ブン・アフマド	18
ディヤル・バクル	20	パルヴィーズ	25, 28, 39, 69, 72
デズフル	24	(ホスロウ 2 世)	39
テュルク	iii, viii, x-xi, 14, 23, 68-69, 76, 95	パンジャープ	95
トゥーラーン	x-xi, 14, 54, 69	ビーヴァラースプ	12-14
トゥール	14	ヒーラ	53, 58
トルキスターン	14, 20, 66	ビールーニー	8, 18, 28, 41
ナクシェ・ロスタム	12	ヒッポクラテス	81
ナスィール・アル=ディーン・トウスィー	xiv	ヒンド	51
ナスル・ブン・サイヤール	71	ヒンドウスターン	13, 97
ナディーム	42	ファールス	38, 64
ニーシャープール	65	ファフル・アル=ダウラ	ix, 65, 79
ニザーミー	39, 53, 91	ブー・サアド・タバスィー	36
ニザーム・アル=ムルク	iii-iv, viii, 20	ブー・アブドゥッラー	79-80
ニハーヴァンド	28	フーシャング	4, 10-11
ヌーフ (ノア)	70	フーゼスターン	24
ヌウマーン・ブン・ムンズィル	53, 58, 70	フルナク (ハワルナク)	58
ノウルーズ	i-ii, iv-viii, xi-xv, 1-4, 7-8, 12, 14-19, 27-29, 45, 47, 57, 88	フェルドウスィー	12
バーダーム・バフト	87	フサーム・アル=ダウラ・ターシュ	65
ハーディム	28, 80	ブハーラー	36, 81
バーバク	60	ブフティーシュウ	81
ハールーン・アル=ラシード	42	フワーリズミー	11
バグダード	ix, 42-43, 45, 67, 81	ヘラート	86, 91
ハッジヤージュ・ブン・ユースフ	71	ボザスプ	4, 10-11
ハッラーン	10, 81	ホスロウ 1 世 → アヌーシーラヴァーン	
ハドラマウト	59	ホスロウ 2 世 → パルヴィーズ	
パドル・ブン・ハサヌーヤ	78	ボゾルグメフル	34-35, 34-35
パナーホスロウ → アドウド・アル=ダウラ		ホラーサーン	18, 41, 43, 70-71, 86, 97
バフラーム・グール	53, 55, 58, 86	ホラズム	95
		ホルムズ 4 世	46

マーハーン・メフ・ヴォシュマギール ...	iii, ix, 78-79	(預言者)	1-2, 6, 14, 39-40, 45-47,
マームーン	iii, ix, 17, 42-43, 61, 70		49, 54, 59, 68
マーワラーンナフル	95	(使徒)	1, 45, 68, 74, 93
マイムーン・ブン・アル=ナジーブ・		ムハンマド・アミーン	ix, 42-43
アル=ワースィティー	18	ムハンマド・パーキル	68
マスウーディー	11	ムハンマド・ブン・アブドウルマリク	17
マスルーク・ブン・アブラハ	59	ムンズィル 4 世	58
マダーイン	16, 24	メディナ	40
マヌーチェフル	54	メフラガン	13-14
マフムード	ix, 18, 95-96	モウベド	4, 28-29
マリクシャー	ii-iii, v, xi-xii, 18	ヤーカート	4, 91
マルヴ	28	ヤズダゲルド 1 世	58
マルワーン	20	ヤズダゲルド 3 世	28, 41
マンスール	66, 81	ヤマ	3
ミスル	51, 67	預言者 → ムハンマド	
ムアイヤド・アル=ダウラ	65	ラーズイー	viii, 81, 83
ムウタスィム	17	ラーディー	66
ムウタディド	xi, 17-18	ルーム	x, 14, 16, 23, 34-35, 41, 68
ムウタミド	17	ルクン・アル=ダウラ	65, 79
ムクタディル	66	レイ	65, 78-79, 81
ムタワッキル	xi, 17-18	ロスタム	58, 72
ムハッラビー	67	ワースィク	17
ムハッラブ・ブン・アビー・スフラ	71		
ムハンマド	1, 39-40, 49, 59, 62, 68, 70, 93-94		

第二部

رساله در تحقیق نوروز

ペルシア語テキスト

قلم بود چون جان بی کالبد
بود که بسی جانی ندارد
و چون قلم بسته شود با کالبد گردد و همیشه بماند چون آتش بود

و الله اعلم و احکم
تمم بالخیر و السعاده م

تمم الكتاب بعون الملك الوهاب المنعم
٨٩٢ هجرية المصطفوية

م

سعد بزرگست، بر مثلثه حمل و اسدست که یکی خانه آفتابست و یکی خانه مریخ و شرف آفتاب. و از روی طب اندر دانستن تیر و کمان منفعت بسیار است که بوی ریاضت توان کرد که اعصاب و اعضا را سخت کند (۱۰۱ب) و مفاصل را گرم و نرم دارد و فرمان بردار و حفظ را تیز کند و دل را قوت دهد و از بیماری سخته و رعشه ایمن دارد. **حکایت** گویند روزی بهرام گور پیش نعمان منذر ایستاده بود که پرورنده بهرام بود، بیکی کمان دو تیر انداخت و بدان دو تیر دو مرغ از هوا فرود آورد. نعمان گفت ای پسر تا جهان بوده است نه چون تو تیر انداز بوده است و نه باشد که نهایت کمانداری و تیراندازی اینست که تو کردی. **حکایت** گویند روزی حکیمی جنگ آور پسر خود را پند همی داد و گفت ای پسر دوست دار اسب را و عزیز دار کمان را و بی حصار و بی مترس [ترس] مباش. گفت ای پدر اسب و کمان دانستم. حصار و مترس چیست. گفت حصار مبارز است و مترس ازو پوشیدن. **حکایت** گویند روزی نوشیروان از بابک ماومن (۹) پرسید، گفت از سلاح داران کدام نام بردارترند. گفت خداوندان تیر و کمان. گفت چگونه باید. گفت چنانکه همه تن شان [شاد] دل باشند و همه دل بازو و کمان، و همه کمانشان و همه تیرشان دل دشمن. گفت چگونه باید دانست این معنی را. گفت چنانکه دل قوی دارد و سخت چون تن و بازو با نیرو و قوت چون دل و کمان بیند و راست (۹) [بندوداست] چون بازو و زره هموار و سخت چون کمان و تیر راست و موافق چون زه، و هر گاه که چنین بود جای تیر خود دل دشمن بیند، همه وقته کامکار و فیروز بود.

و آنچه واجب کند در مرتبت وی. قلم را دانایان

مشاطه ملک خوانده اند و سخن تمامی

من فرود یابد تا شصت [> شست] من از جمله کمان بلند باشد. اما قوت همه کمان که باشد از برتر تا فرودتر همه بر یک درجه فلک نهاده اند، هر درجه شصت دقیقه، و آغاز از دو گروه چنانک دو گوشه کمانست و هر گوشه تا بفسان گاه [> بشان گاه] زه و بار بتضعیف بر رفته اند تا بشانزده، و هر خانه سه بخش کرده و قبضه را چون مرکز نهاده اند که از جای نجنبند، دو گوشه و خانه بوی بر دو پای باشد و این بخش را که فرو از گوشه بود، قوت دو چندان بود که گوشه را و آنک فروتر از وی بود، قوت وی چهار چندان بود که بخش زیر و زبر وی بود، و بخش سوم که با قبضه پیوندد، هشت چندان قوت بود که گوشه را بود و چهار چندان بود که بدو بار (۴) [> برد بار] گوشه بود و چنانک ترازوی بود و عدد وی چهارده است [> چهارست] و شانزده دیگر جمله دو سی باشد. سی بیک نیمه و سی دیگر نیمه و جمله هر دو شصت باشد. و دو حلقه کمان را شش بخش کرده اند از بهر آنکه صورت کمان چون نیمه دایره است و نیمه دایره فلک شش برج است که قسمت پذیرد. و همچنانک انواع کمان فروتر از چرخ است سه است بلند و پست و میانه و همچنین انواع تیر وی سه است دراز و کوتاه و میانه. از آن دراز پانزده قبضه، و میانه دو نیم، و کوتاه ده قبضه. و هر کمانی را پدیدست که وزن چوب و پیکان و تیر وی چندست و چند باید. اگر همه گفته شود دراز گردد و غرض ازین واز کردن سخن است چه مرتبه تیر و کمان پدید کردنت که این چیزها ملوک بنوروز چرا خواستند. و از طریق علم نجوم گفته اند که خداوندان سلاح و آنک تیر اندازان باشند و پیشه دارند سلاح و تیر و کمان را، هرگز تنگ روزی نباشد و هر سپاهی که غلبه سلاح ایشان تیر بود و تیر انداز باشد، کم مغلوب گردند بلکه بیشتر فیروز باشد، خاصه که از سلاح خصم [و] تیر کمان کم بود. و حجت آنکه گفتند قسمت این سلاح بر برج قوس است بطبع آتش و خانه مشتری که

بهرام گور پدید آمد و در تیر اندازی بی عوض شد. کمان را استخوان یار کرد و تیر را چهار پر نهاد و کمان را توز پوشید. و بعد از هر کس از کمانداران و تیر اندازان بتجربه چیزها بر کمان و تیر افزودند تا بحد کمال رسانیدند چنانکه اکنونست. و دانایان صورت کمان را از فلک برداشته اند، چه خداوندان آن علم نجوم دایره فلک را قسی خوانده اند یعنی کمانها و این خطها که از کرانه هر بخشی تا بدیگر کرانه بر خیزد براستی آن را اوتار خوانند یعنی زهها [> راهها]. و این خطها که از میانه دایره فلک بر آید و بمیانه این بخش بگذرد بر پهنای وی، آن را سهام خوانند یعنی تیرها. و چنین گفته اند که هر وتری از تاثیرات کواکب سیاره که بر زمین آید بتدبیر و تقدیر ایزد جل و علا و بشخصی پیوندد و از شخصها مردم این عالم آن همه بدین سهام پیوندد و بدان اوتار قسی گذرد چنانکه پدیدست اندر دست تیر انداز که هر آفتی که بشکار وی رسد از تیر وی پیوندد که بزه کمان وی گذرد. و بیک روی صورت کمان بر صورت مردم نگاشته است از رگ و پی و استخوان و گوشت و پوست. و زه وی چون جانی که بدو زنده بود و کمان تا با زه بود، چون مردم زنده است، که تا با جان بود ازو هنر آید و چون بی زه بود، چون مرده است بی جان که ازو هنر نیاید. چون حقیقت نگاه کنی چون سینه و دو دست مردم است که دستها باز کشد و پشت دست کماندار و قبضه گاه چون سینه و ساعد و بازو، و بازو و ساعد چون دو خانه، و دو گوشه سر دست. و وزن کمان بلندترین ششصد من نهاده اند و این کمان را کشکنجیر خوانند، از قلعهها و حصارها اندازند و فروترین یک من نهاده اند و این کمان را از بهر کودکان خرد سازند و هر چه از چهار صد من برود تا ششصد من کشکنجیر باشد سست تر و سخت تر. و هر چه از چهار صد من تا دویست و پنجاه من باشد آن را چرخ خوانند و هر چه از دویست و پنجاه من فرود آید تا صد [> پانصد] من (۱۰۱ آ) آن نیم چرخ باشد و هر چه از صد

و یکی گوه‌رست که ارسطاطالیس ساخته است تیغها را از بهر اسکندر. آن نیز یاد کنیم که سخت بدیع است. ارسطاطالیس چنان فرموده است که یک جزو مغنیسیاء نیک نباید گرفت با یک جزو بسد بیامیخت نیک. آنگاه یک من آهن نرم بسوهان زده بیارد و بیوته اندر کند، ازین دوازده اوقیه بر وی افکند و در آتش برد تا بگدازد و بیوته اندر بگردد و بعد از آن جزوی حرمل و جزوی مازو و جزوی بلوط و جزوی صدف و چند همه ذرائح بگیرد و خورد بساید و برهم آمیزد. و دو اوقیه از آن بر آن یک من آهن نهد و می دمد تا همه یکی شود و آهن این داروها را بخورد. آنگاه سرد کند و از وی تیغها زند، بنادر آید و بغایت نیک. و علامت سلاح نامۀ بهرام گور چنین خوانده‌ام که چون تیغ از نیام برکشند، از وی ناله آید، علامت خون ریختن بسیار بود و چون فروغ آرد، علامت ظفر خداوند تیغ بود بر دشمن، و چون بذات خویش از نیام بر آید، دلیل جنگ باشد. و چون تیغ برهنه پیش کودک هفت روزه نهند، کودک دلیر آید.

احکام تیر و کمان خواصه آنچه در بارۀ او واجب کند. تیر و کمان سلاحی شایسته است و ادبی بایسته و او را کار بستن هنری پسندیده است و پیغمبر ما صلی الله علیه و سلم گفته است علموا صبیانکم الرمايه و السباحه، معنی آن دارد که بیاموزید کودکان را تیراندازی و شناء کردن. نخستین کسی که کمان ساخت کیومرث شاه بود و کمان در آن ایام چوبین بود بی استخوان مانند کمان حلاجان بیک پاره، و تیر کلکین بود با سه پر و پیکان از استخوان. و چون آرش وهادان [>وهاوان] پدید آمدند بروزگار منوچهر و سپه سالار او بود و تیر اندازی که بهمه جهان مثل نداشت (۱۰۰ب) و بتجربه و دانش تیر و کمان را بجایی رسانید در کمال که جهانیان بشگفت ماندند. کمان را پنج پاره کرد از چوب و آن را پی زد بسرشم تا استوار گشت و پیکان تیر از آهن کرد. پس

پیوسته ترسان باشد و از هر چیزی گریزان و معلوم است که زندگانی به بیم و ترس ناخوش باشد. و شجاعت را بمثال صورتی کرده اند چون نخجیری با قوت را، و چون سر شیری که آهن می خاید و پای او چون پای پیلی که سنگ می کوبد و دم وی چو سر اژدها که آتش می دمد. برین مثال که نگاشته اند و گفته اند که مرد شجاع چنان باید که باول جنگ چون شیر بود و بآخر جنگ چون اژدها بود بخشم گرفتن و گرمی و رنج برداشتن. اکنون انواع شمشیرها بگوییم که بآلت شجاعت از چند گونه است چنانکه معلوم گشت این دانش را چهارده گونه است. یکی یمانی، دوم هندی، و سیم قلعی، و چهارم سلیمانی، و پنجم نصیبی [+بیضی]، و ششم فرنجی، و هفتم سلمانی، و هشتم مولدی، و نهم بحری، و دهم دمشقی، و یازدهم بصری، و دوازدهم حنفی، و سیزدهم نرم آهن، و چهاردهم قراجوری. و باز آن نوع بانواع می شود چنانکه هندی چند گونه است و یمانی چند گونه. اگر همه یاد کنیم دراز گردد، ولیکن یک نوع بر سیل اختصار بگوییم، از یمانی یک نوع آن بود که گوهر وی هموار بود و بر یک اندازه و سبز بود و بوم او بسرخ زرد و نزدیک دنباله نشانهای سفید دارد از پس یکدیگر مانند سیم. این را کلاغی خوانند و دیگر را مشطب و این مشطب چهار نوع باشد با چهار جوی، یکی آنست که نشان جویهای ژرف نباشد و گوهر وی مانند پایهای مورچه باشد و دیگر آنک جویهای ژرف باشد و گوهر (۱۰۰ آ) [و گوهر] او گرد نماید چون مروارید و آنرا لولوی گویند و دیگر جوی او چهار سوی بود و گوهر آن هنگام نماید که او را کژ داری و چهارم آنک ساده بود و اندک مقدار اثر جوی دارد. و درازنای وی سه بدست و چهار انگشت باشد و چهار انگشت پهنا دارد و گوهر وی بسیاهی زرد و آن را بوستانی [>ستانی] خوانند و دیگر از یمانی نوعهای دیگر بود، سه بدست و نیم درازنا و چهار انگشت پهنا و وزن او دو من و نیم بود تا سه من کم ده استار.

جهان آراسته مردم و آهن می تواند بود و از مرتبت که شمشیر راست بهترین پیغمبران صلی الله علیه و سلم را در توریت رب الملحمه صاحب السیف یاد کرده است ایزد تعالی. و این آلت که مرتبت می گیرد، بدان می گیرد که وی آلت شجاعتست که بزرگترین فضیلتی در مردم آنست و در حیوان دیگر نه و حد شجاعتست که نهاده اند هی قوت غضبیه تستعلی بها النفس علی من یعادیها، معنیش چنین باشد که وی نیروی است و خشمی که نفس بر وی برتری جوید بر آن کس با وی دشمنی گیرد. و چنین گویند که فضیلت شجاعت طبیعیست، نه اکتسابی. ولیکن اکتساب از آتش پذیرد و چون آهن برندگی اندر وی طبیعیست ولیکن باکتساب صناعت سلاح گردانند تا از آتش پذیرد. و خانه شجاعت جگر نهاده اند که خانه خونست از آن جهت مرغ شجاع بر خون ریختن دلیرتر بود که شجاعت بخون نیرو گیرد چون چراغ بروغن. هر جوانی که جگرش بزرگتر باشد پر خون تر باشد و دلیرتر بود. و گفته اند که فاعل شجاعت [و] قوت حیوانی دلست و منفعل وی قوت طبیعی جگر که چون حاجت یابد، ازین هر دو فضیلت شجاعت پدید آید، چون آتش که از میان سنگ و فولاد بجهد و چون سوخته بیند بدو در آویزد. و چنین نهاده اند که چون جرم دل قوی باشد و جرم جگر قوی بود، خداوندش شجاعی تمام بود چنانکه هر چه (۹۹ب) شجاعان را به باید اندرو موجود بود و چون جرم دل قوی باشد و جرم جگر ضعیف، خداوندش در اول جنگ دلیر باشد و حریص و بآخر کاهل و سست و چون جرم جگر قوی باشد و جرم دل ضعیف، خداوندش اول جنگ کاهل بود و سست و بآخر دلیر و حریص، و مثال بایستگی حرارت طبع و قوت شجاعت اندر دل و جگر خون مثال بایستگی قوه هاضمه نهاده اند اندر معده و جگر، و گفته اند همچنان که ضعیفی آن قوت عیش بر مردم ناخوش و بی مژه دارد. همچنین ضعیفی قوت شجاعت روزگار بر مردم ناخوش و بی مژه دارد، چه

یفنی. و آن انگشتی در انگشت می گردانید و بدین بیت بمثل می کرد .: تعلق هامما [+تعلق هاهنا] من رجال اعزه علينا و هم كانوا اعق[>احق] و اظلما .: و این معنی مامون را می خواست که او را خلاف کرده بود. اندر آن میان از کنیزکی خشمش آمد، انگشتی بخشم بر وی زد. نگینش بجست و هر دو در حوض افتادند. کسان فرو رفتند و طلب کردند و حوض را از آب تهی کردند. چون باز یافتند، بجای نگین سنگی در وی نشسته بود. پس روزگار برنیامد که طاهر بن الحسین ببغداد آمد و رفت آنچه رفت و محمد امین هم در آن باغ کشته شد.

در وصف شمشیر و آنچه در باره آن واجب آید. شمشیر پاسبان ملک است و معین ملت و تا وی نباشد، دین و ملک آراسته نبود، چه حد سیاست بدو نگاه توان داشت. و نخستین گوهری که از کان بیرون آورده اند آهن بود. زیرا که بایسته ترین آلتی که می بایست آرایش کار [کار] خلق را آهن بود و نخستین کسی که از وی سلاح ساخت جمشید بود. و همه سلاحها بایسته و با حشمت است، ولیکن هیچ چیز بایسته تر از شمشیر نیست و ازو با حشمت تر نه، (۹۹آ) که وی مانند آتش است با شعاع و گزنده. و بزرگان گفته اند که جهان بی آهن چون مرد جوانست که هر گر از وی نسلی نیاید و چون بخرد بنگرند مصالح مردم در بیم و امید است و امید بشمشیر باز بسته است. یکی بآهن بکوشد تا امیدش بر آید و یکی از آهن بگریزد تا هلاک نگردد و بیمش نگاه بان وی شود و تاج بر سر ملوک بآهن و فعل او باز ایستد و گنجهای ایشان که پر می شود بآهن پر می شود و ایزد تعالی همه گوهرها بمردم باز بسته [>سند] است، مگر منفعت آهن که بآدمی بزرگانی او باز بست. و چنین گوید که آهن بشرف کار کرد در گوهرهای دیگر چنانست که شرف مردم بدیگر جانوران. چه این

بمدینه بود و حرب خندق خواست کرد، بمدینه وبا افتاده بود و مصطفی علیه الصلوات و السلام یاقوتی با خویش داشت بقیمت افزون از دو هزار دینار. و نیز تشنگی را باز دارد. و نگین فیروزه از جهت آنکه نامش بفال نیکوست از بهر عروسی و شیرینی دیدارش و خاصیت وی آنست که چشم زدگی را باز دارد و ترسیدن در خواب. و انگشتی در زجر الفال و تعبیر خواب علامتهاست و اندر آن هر کس سخنان گفته اند و انگشتی را در خواب تعبیر بر ملک و ولایت کنند پادشاه را و دیگر مردمان را عمل و صناعت و گروهی بر کرامت بزرگان و گروهی را بعاقبت چیز آنچه اندرو باشد. و چنین گویند که اسکندر پیش از آنکه به پادشاهی بنشست و گرد جهان بگشت، خوابهای گوناگون می دید که بهمراه می برد، آنچه این جهان او را باشد و ملوک را مهر کند. **حکایت** اندر معنی انگشتی و از آن خوابها که اسکندر دید (۹۸ب) یکی آن بود در خواب چنان دید که این جهان انگشتی بودی و بانگشت او درآمدی، ولیکن او را نگین نبود. چون از ارسطاطالیس پرسید، گفت این جهان همه ملک تو گردد، اما ترا از آن بر خورداری نباشد. چه انگشتی ولایتست و نگین سلطان او. **حکایت** چنین گویند که یزدجرد شهریار که آخر ملوک عجم بود روزی نشسته در باغ سرای خویش و یکی انگشتی که نگینش فیروزه بود در انگشت داشت. تیری از هوا فرود آمد و بر نگین انگشتی او زد و نگین خرد شکست و تیر در زمین بنشست و کس ندانست که آن تیر از کجا آمد. هر چند تجسس کردند، معلوم نشد. اندوهگین بنشست و از دانایان پرسید. کس نیارست گفت، تا مدتی بر آمد که ملک از خانه دان او بدر رفت و او کشته شد. هم اندر معنی انگشتی گویند که محمد امین پسر هارون الرشید که از زییده بود آن روزگار که امیر المومنین بود، روزی در باغ بر لب خوض نشسته بود و انگشتی وی که نگینش یاقوت بود در انگشت داشت و نقش آن نگین این بود که الله بقی و غیره

بی مهر باشد، از ضعیفی رای و سستی عزیمت باشد و خزاین بی مهر او خوارکاری و غفلت باشد. و از جهت آنکه سلیمان علیه السلام [علیه] انگشتی ضایع کرد، ملک از وی برفت. شرف آن مهر را بود که بر خاتم بود، نه انگشتی را و سبب آنک مصطفی صلوات الله علیه و سلم انگشتی در انگشت راست کرد آن بود که تا نامها بر جایی که فرستادی بمهر بودی و چنان بود [و چنان بود] که اول که نامه او به پرویز ملک عجم رسید، بی مهر بود. پرویز خشم گرفت و نامه را نخواند و گفت نامه بی مهر چون سر بی کلاه بود و سر بی کلاه انجمن را نشاید. و چون نامه مهر ندارد، هر که خواهد بر خواند و چون مهر دارد، آنکس خواند که بدو فرستاده باشد. (۹۸ آ) و دانایان گفته اند در مملکت تیغ و قلم هر دو خادمان انگشتی اند، از آنچه هر چه ایشان بگیرند، در زیر حکم انگشتی آید و تا او نخواهد ایشان بدو نرسند. و هر زینتی که مرد را بود، شاید که وقتی باشد و وقتی نباشد، مگر زینت انگشتی که هیچ وقت نباید که نباشد. از بهر آنکه وی زینت آن انگشتست که برو یکی بگیرند و یکی دلیل است بر یگانگی خدای عز و جل. و این زینت او راست چون خلعتی و کرامتی از بهر خصوصیت آن حال و این چنان باشد که مبارزی که بزرگی نزدیک گردد بهنری که نماید و آن بزرگ خواهد که او را درخور او کرامتی کند که بدان کرامت میان یاران بدیدار باشد. طوقی زر در گردن او کند، با کمر زر بر میان او بدد، از بهر آن هنر که نموده باشد یا از بهر رنج و میان بستن. و انواع انگشتی بسیار است و نگین فراوان. اما پادشاهان را بجز دو نگین روا نباشد داشتن. یکی یاقوت که از گوهر آفتابست و شاه همه گوهرهای نا گدازنده است و هنر وی آنک شعاع دارد و آتش بر وی کار نکند و همه سنگها [سنگها] را ببرد مگر الماس را و خاصیت او آنست که وبا را باز دارد. **خبر** و در خبر چنانست که مصطفی صلی الله علیه و سلم در آن وقت که

که شرم از چشم من برفت و جهان پیش من سبک آمد. پنداشتم که میان من و پادشاه و بزرگان او هیچ فرقی نیست و غم همه جهان بر دل من فراموش گشت. و سیوم قدح بخوردم، بخواب خوش در شدم. پس همه دانایان متفق شدند که هیچ نعمتی بهتر و نیکوتر و سازگارتر از شراب نیست، از بهر آنکه در هیچ میوه و طعمی این خاصیت و هنر نیست که در شرابست. (۹۷ب) شاه شمیران را معلوم شد شراب خوردن و بزم نهادن آیین آورد و بعد از آن از بهر شراب رودها ساختند و راهها و نواها بنهادند. و آن باغ که درو تخم انگور بکشتند بر جاست و آن باغ را در هرات باغ غور می خوانند و بر در شهر هرات است. و چنین گویند که نهال انگور از هرات بهمه جهان پراکند و بحسب آب و هوا و زمین بهر شهری و ولایتی از لونی دیگر بسیار آورده چنانکه لون انگور که در هرات باشد بهیچ شهری و ولایتی نباشد. چنانکه گویند که زیادت از صد لون انگور را نام بر سر زبان دارند و گویند و فضیلت شراب بسیار است، اگر همه بگوییم دراز گردد، مقداری پسندیده بود خردمندان را.

در صفت انگشتی و آنچه در باره او واجب کند. انگشتی زینتی سخت نیکوست و بایسته انگشت بزرگان را و نه از مروت و کفایت بود که بزرگان انگشتی ندارند. و نخست کسی که انگشتی کرد جمشید شاه بود. و چنین گفته اند که انگشت بزرگان که انگشتی نباشد چون جامه ثوزی (۹) بود بی علم و انگشتی انگشت را همچون کمرست میان را و میان با کمر نیکوتر از میان بی کمر. و انگشتی در انگشت بزرگان بسه چیز را و برو یکی بر مروت تمام و یکی بر رای قوی و یکی بر عزیمت درست که هر کرا مروت تمام باشد، خویش را از زینت بی بهره ندارد و چون با رای قوی باشد، بی علامت و هنر دوست نبود و چون با عزیمت درست باشد، بی مهر نباشد و چون نام بزرگان

دهان نیارست نهاد که نباید که زهر باشد. پس هم آنجا در باغ خمی نهادند و آب آن انگور بگرفتند و آن خم را پر کردند و هم آنجا دست باز داشتند. باغبان را فرمود که احتیاط باش و خبر کن. (۹۷آ) و باز گشتند. چون شیره در خم بجوش آمد، باغبان آمد و شاه را گفت که آن آب انگور همچون دیگ بر آتش می جوشد و تیر می اندازد. گفت چون بیارامد ما را خبر کن. باغبان روزی سر خم شد، آن آب انگور تیره را دید صافی و روشن شده و چون یاقوت سرخ می تافت و آرمیده شده. در حال پیش شاه آمد و چنانک دیده بود صفت کرد. شاه فرمود تا یک خمره از آن بیاورد. و پیش شاه نهاد، شاه فرمود تا بزرگان و دانایان حاضر آمدند و آن خبره بدیشان نمود. همگنان در رنگ صافی او شگفت بماندند و باتفاق گفتند که مقصود و فایده ازین درخت اینست، اما ندانیم که زهرست یا پای زهر. بر آن نهادند که مردی خون کرده را که قتل بر وی واجبست از زندان بیارند و ازین آب انگور شربتی بدو دهند تا چه پدیدار آید. پس شاه بفرمود تا خونی را از زندان بیاوردند و شربتی از آن بدو دادند. و او بخورد. اندکی گره بر ابرو آورد. گفتند دیگر می خواهی. گفت خواهم. شربتی دیگر بدو دادند. در طرب کردن و سرود گفتن و پای کوفتن و دست زدن آمد و شکوه پادشاه در چشمش سبک شد و گفت یک شربت دیگر بدهید و هر چه خواهید با من بکنید که مردان مرگ را زایند. شربت سیم بدادند. پس بخورد، سرش گران شد و بخفت و تا روزی دیگر با خود نیامد. چون باهوش آمد پیش شاه بردندش و ازو پرسید که آن چه بود که دی روز خوردی و خویشتن را چگونه می دیدی. گفت نمی دانم که چه خوردم، اما خوش بود. کاشکی از آن چیز امروز سه قلع دیگر از آن بیافتمی. اما نخستین قلع بدشواری خوردم که تلخ مژه بود. چون در معده ام قرار گرفت، طبع آرزوی دیگری کرد. چون دوم قلع بخوردم، نشاطی و طربی و زوری در دل من آمد

دانه‌ها بدیشان نمود. گفتند همای این دانه‌ها را بمکافات آورده‌است. چیزی می‌بینید اندرین، ما را با این دانه‌ها چه باید کرد. همه گفتند این مرغ این دانه‌ها را بنیکی آورده‌است. بهمه حال درین فایده‌تواند بود. هر چند ما هرگز این دانه‌ها را ندیده ایم، واجب کند که فایده‌این تخم دربر بود، چنانک در تخمهای دیگر. پس برآن متفق شدند که این تخمها را ببايد کشت و نیک نگاه داشت تا آخر سال چه پدید آید. پس شاه شمیران تخمها را بباغبان خویش داد، گفت در گوشه بیکسو در باغ من این سه دانه تخم را بکار و گرداگرد او از کر پرچین محکم بکن تا ستوری بدو راه نبود و از مرغان نگاه دارش و بهر وقت احوال او می‌نمای. پس باغبان چنان کرد و سال نوروز ماه بود. یک چند برآمد، شاخی ازین تخمها برجست. باغبان پادشاه را خبر کرد. پادشاه با بزرگان و دانایان بر سر آن نهال شدند. همه گفتند ما چنین نهال و برگ ندیده‌ایم. باز گشتند. چون مدتی برآمد، شاخه‌اش بسیار شد و برگه‌اش پهن گشت و خوشه خوشه بمثال گاورس ازو آویخته و در باغ هیچ درختی ازو خرمتر نبود و دیگر نباشد. شاه دیگر باره با دانایان بهم بدیدار درخت شد، نهال را دید درخت شده و برگ فراوان و خوشها ازو در آویخته. شگفت بماندند، گفتند صبر باید کرد تا همه درختان را بر قرار شد تا به بینیم که بر این درخت چگونه بود. چون خوشها بزرگ شد و دانه‌های غوره بکمال رسید، هم دست بدو نکردند تا خریف درآمد و میوها چون سیب و امرود و شفتالو برسید. شاه شمیران بباغ آمد، درخت انگور را دید چون عروس آراسته هر خوشه بزرگ شده و از سبزی بسیاهی آمده و چون شبه همی تافت و یک یک دانه ازو همی ریخت. همه دانایان متفق شدند که میوه این درخت اینست و در پختکی بکمال رسیده‌است و دلیل آنست که دانه از خوشه آغاز ریختن کرده‌است و بر آبست. اندیشه آنست که فایده درین آبست، آب این ببايد گرفت و در خمی کرد تا چه پدید آید. و هیچ کس دانه آن در

چگونه ساخته اند. **حکایت** در معنی پدید آمدن شراب در تواریخ نوشته است که در شهر هرات پادشاهی بوده است کامکار و فرمان روا، با گنج و خواسته بسیار و لشکر جرار و همه خراسان در فرمان او بود و از خویشاوندان جمشید بود، سخت با رای و با فر، و نام او شمیران بود و این دز[از] شمیران که بهراه است و هنوز آبادان و برجایست و او عمارت کرد. و او را پسری بود نام او بادام بخت، دلیر و مردانه و با زور بوده، در آن روزگار تیراندازی چون او نبود. مگر روزی شاه شمیران بر منظر نشسته بود و بزرگان پیش او و پسرش بادام بخت پیش او بر کران تخت ایستاده، قضا را همایی بیامد و بانگ میداشت و برابر تخت پاره دورتر بنشست. شاه شمیران نگاه کرد، ماری دید در گردن همای پیچیده و سرش در آویخته و آهنگ آن میکرد که همای را بگذرد. شاه شمیران گفت ای شیر مردان این همای از دست این اژدها بزهار آمده است و از ما داد می خواهد. کیست از شما که این همای از دست اژدها برهاند و تیری بصواب بیندازد چنانکه اژدها هلاک شود و بهمای گزندگی نرسد. بادام بخت گفت این کار منست. انشا الله که این کار بدست بنده بر آید. تیری در کمان نهاد و بفرصت بینداخت چنانکه سر اژدها در زمین بدوخت و بهمای گزندگی نرسید و همای خلاص یافت و زمانی همه آنجا پرید و برفت. قضا را دیگر سال همین روز شاه شمیران بر منظر نشسته بود. آن همای بیامد و بر سر ایشان همی پرید زمانی و پس بزمین آمد هم آنجا که مار را بتیر زده بودند و چیزی از منقار بر زمین نهاد و بانگی چند بزد و به پرید و برفت. شاه شمیران آن همی دید، پس گفت پنداری که آن همای است که پارسال ما او را از آن مار برهاندیم. امسال بمکافات آن چیزی آورده است. بروید و بنگرید و آنچه بیابید بیارید. برفتند بجملگی دو سه آنجا نهاده دیدند، برداشتند و پیش شاه شمیران آوردند. شاه نگاه کرد، (۹۶ب) سه دانه تخم سخت دید. دانایان و بزرگان را بخواند و آن

که از بخار سر برنج باشد. مضرتش مردمانی لاغر و خشک و نزار را زیان دارد. دفع مضرتش با آب بیامیزند و کشکاب خورند و سکز و اسبغول و طعامهای سرد و میوه‌های تر خورند، تا زیان ندارد. **منفعت** شراب صرف معده و شکم را موافق بود و باد شکن تر و گوارنده ترست. مضرتش درد سر و درد چشم را بدست و کار این شراب بسیار بر سر بشود. دفع مضرت کردنش ممزوج کردن آن مقدار که تن را موافق آید. **منفعت** شراب ممزوج و مروق کسی را که خمار سخت گیرد یا از درد سر برنج باشند، نیک بود و مردمان گرم مزاج را شاید. مضرتش باد شکم انگیزد و درد بندها آرد و معده و جگر را سرد کند. دفع مضرتش با گوشت آبه و قلیه با توابل بسیار خورند و بنقل میوه خشک کنند. **منفعت** شرابی که ترش مژه باشد مردمانی که معده و جگر گرم دارند، شاید. مضرتش آرزوی مجامعت برد و پیها را سست کند. «دفع» مضرتش با سپید باهای چرب خورند و حلوها تا زیان ندارد. **منفعت** شراب آفتاب پرورده لطیف تر و زود گوارتر بود. مضرتش خون را بزودی عفن کند و تبهای عفن آرد. دفع مضرتش با سکباها و سماقبا و ناربا خورند و نقل ریاس و انار کنند و از پس آن سکنگین خورند تا زیان ندارد. **منفعت** شراب مویزی آنچه ازو صافی باشد، مانند شراب ممزوج باشد، میل بخشکی دارد و محروزانرا موافق است. مضرتش آنچه تیره بود، مانند شراب سیاه باشد و بد گوار بود و سودا انگیزد و باد شکم اندازد و راه جگر به بندد. دفع مضرتش بسکنگین پروری (؟) و آب کاسنی و تخم خیار و خیار بادرنگ. **منفعت** شراب خرما تن را فربه کند (۲۹۶) و خون بسیار زاید خاصه که نو باشد. «مضرتش» غلیظ و بد گوارست و راه جگر به بندد و خون سودایی انگیزد. دفع مضرتش را سکنگین و شراب انار و داروها که سودا را براند بکار دارد تا زیان ندارد. و درین باب این مقدار کفایت باشد. اکنون پیدا کنیم که انگور در جهان از کجا پیدا آمد و شراب

درجه رسید، شراب خوردن او را شاید. و فضیلت شراب بسیار است. اکنون فصلی در منفعت و دفع مضرت شرابها یاد کنیم از گفتار محمد زکریای رازی و از گفتار جالینوس حکیم و اطبای بزرگ. **صفت شراب** مست کننده طعام را هضم کند و حرارت غریزی را بیفزاید و تن را قوی کند و پاک گرداند و عرق و بخار. مضرتش نشاید کودکان را که سخت گرم مزاج باشند. دفع مضرت آن اگر حاجت آید مردم گرم مزاج را بخوردن آن، بآب و گلاب ممزوج کنند تا زیان ندارد. **صفت** شراب سفید و تنک غذا کمتر دهد و مردمان گرم مزاج را بشاید و صفرا براند بیول اندک اندک. مضرتش خداوندان معدۀ سرد را از آن شکم باد گیرد و درد مفاصل آرد. دفع مضرتش با سفید بادهای یا توابل و طباهه خشک خورند تا زیان ندارد. **منفعت** شراب لعل گونه تیره بود و نه تنک چون نیکو آید موافق ترین شرابهاست. مردمان معتدل مزاج را بشاید. مضرتش مردمان گرم مزاج را زیان دارد. دفع مضرتش ممزوج کنند بآب و گلاب و نقل ناردانی کنند، زیان ندارد. **منفعت** شراب تلخ و تیره باد بشکند و بلغم را ببرد و درد شکم و درد معده را سود دارد. مضرتش گرم ترین مردمان گرم مزاج را از درد سر و تب و گرمی جگر را بهم باشد. دفع مضرتش بآب ممزوج کنند و با طعامهای ترش خورند تا زیان ندارد. **منفعت** شراب ریحانی دل و معده را قوی کند و بادها بشکند و تبها که از بیماری خواسته بود سود دارد. (۹۵ب) مضرتش درد چشم و درد سر آرد و زود بر سر رود. و دفع مضرتش بکافور و گلاب و بنفشه و چند بید سبز و میوههای ترش بنقل کردن. **منفعت** شراب نو خون در تن بیفزاید و رگها پر کند و بخار تر ازو بر سر شود. مضرتش نشاید مردمانی را که تری دارند و باد بر ایشان غلبه دارد و بدنهای پر [>بر] خلط دارند. دفع مضرتش با قلیها و طعامهای خشک خورند با افراط تمام بنقل میوه خشک کنند. **منفعت** شراب کهن خداوند باد و بلغم را نیک بود و معده و کلیه گرم را بشاید و آنرا

و دل را خرم گرداند و تن را فربه کند و طعامهای غلیظ را بگوارد و گونه روی سرخ گرداند و پوست تن را تازه و روشن کند و فهم و خاطر را تیز کند و بخیل را سخی گرداند و بد دل را دلیر کند. و خوردن شراب را بیماری کمتر افتد و اغلب تن درست باشد از جهت آنک تب و بیماری از خلطهای لزج و فاسد تولد کند، از جهت آنک شراب خواره را گاه قی افتد و گاه اسهال بگذارد که خلط در معده گرد آید. و زیرکان و بزرگان گروهی شراب را محک مرد خوانده اند و گروهی ناقد عقل و گروهی صراف دانش و گروهی معیار هنر. هر که پنج قدح شراب ناب بخورد، آنچه در نهاد اوست از نیک و بد ازو نیز آید و گوهر خویش پدید کند و بیگانه را اشنا گرداند و دوست را در دوستی بیفزاید. اگر شراب را همین هنر است که دوستان را بهم گرد آرد و موانست دهد، تمام است از لطیفی که در شراب است. از همه خوردنیها که در جهانست از چرب و شیرین و ترش بیش از آنک در سیری توان خورد و اگر بیشتر خورده شود بملال خیزد و طبع ازو نفور گردد. و وی شاه همه غذاهاست چنانک زر شاه همه گرهره‌اء گدازنده است و شراب را هر چند بیش خوری بیش باید و مردم ازو سیر نگردند و طبع نفرت نگیرد. و در بهشت نعمت بسیار است و اگر شراب (۹۵آ) بهترین طعامهای بهشت نبودی، بخود مخصوص نکردی. هر چند نعمتهای دو جهانی بتقدیر و ارادت اوست چنانک در محکم کتاب خویش یاد کرده است که و سقیهم ربهم شراباً طهوراً و جای دیگر می گوید و منافع للناس و اثمهما اکبر من نفعهما. مردمان را منفعت بسیار است اندرو و لیکن بزه او بیشتر از نفع اوست و خردمند باید که چنان خورد که مژده او بیشتر از بزه او باشد تا برو وبال نگردد و این چنان باشد که بریاضت کردن نفس خود را بجایی رساند که از اول شراب خوردن تا بآخر هیچ بدی و ناهمواری ازو در وجود نیاید بگفتار و کردار الا به نیکویی و خوشی. چون بدین

بدرگاه آمده است و اسبی برهنه آورده و می گوید این اسب در کشت خویش نکرده ام و کشت من بخورده است. قابوس پرسید که کشت جو بوده است یا گندم. گفت جو بوده است. بفرمود تا خداوند اسب را حاضر کردند و چندانکه قیمت جو آن مرد بود بوقت رسیدگی از وی ستدند و بخداوند کشت دادند و گفت خداوندان زمین را بگویند که دهقانان چون خواهند که جو ایشان نیکو آید باسبان دهند تا بخورند، تا همه اسبان فربه شوند و هم جو ایشان نیکو آید و ما این تاوان از بهر تادیب فرمودیم تا خداوندان اسبان اسب خویش نگاه دارند از کشت زار مردمان. و نیز پندی بود کسانی را که جو را خوار دارند و ندانند که جو توشه پیغامبر است و توشه پارسایان که دین و ملک بدیشان درست بود و قضم ستوران که دین و ملک بدیشان بر پای بود. **حکایت** هم در فضیلت جو چنین گویند که چون آدم علیه السلام از بهشت بیرون افتاد و بزمین آمد سبب گندم خوردن، ایزد تعالی (۹۴ب) هم گندم را غذای او گردانید و هر چند گندم همی خورد سیر نمی شد و اشتهايش زيادت می بود. بر ایزد تعالی بنالید. برو رحمت کرد و جو بفرستاد تا از آن نان کرد و بخورد سیر شد و آتش معده اش بیارامید. جو را بفال گرفت و هر گاه که چشمش بر جو افتادی، شادی و خرمی بدل او در آمدی. از آن گاه باز این آیین ملوک عجم بکار می داشتند که هر سال روز نوروز جو رسته پیش خواستندی از بهر منفعت و مبارکی که درو باشد.

یاد کردن شراب: و آنچه در باره او واجب آید دانایان طب چون جالینوس و بقراط [+بقراط] و سقراط [+سقراط] و بو علی سینا و محمد زکریا و بختیشوع و ثابت قره و مانند این طایفه چنین گفته اند که هیچ چیز در تن آدمی نافع تر از شراب نیست خاصه شراب انگوری تلخ. و خاصیت آن آنست که غم را ببرد

گیرند و بخویشتن بردارند، نیک شود. و چنین که اگر شبی که خسوف ماه باشد و وقت کاستن جو بود و آن شب جو بکارند و آن جو را به پزند و دیوانه را دهند تا بخورد، بهتر شود. و چون ماه زاید النور بود اندر ماه نوروز و بزهره نگران بود، جو بکارند، هر اسبی لاغر که از آن جو بخورند فربه شود. و نیکی سال و بدی سال دهقانان هم از جو اندازه گیرند. چون راست بود و هموار، دلیل بود بر فراخی سال و چون چکاوک زیر جو پرواز کند و بانگ کند، دلیل فراخی سال باشد و چون سمانه بمیان خوید جو آرام بسیار کند، دلیل فراخی بود. **خبر** و خبرست از مصطفی علیه الصلوات و السلام که در معنی جو گفته است. نعم الرغفان رغفان الشعير لمن قنع بها و شبع بها فانها خبزی و خبز غیری من الانبیا. گفت نیکا گردها که گردهای جوست آنکس را که (آ ۹۴) بدو خرسندست و از وی سیر گردد، چه وی نان منست و نان پیغمبران دیگر. هر زمان جو زنند و بدان فال گیرند و از نیک و بد خبر دهند و هیچ حبوب دیگر را این خاصیت نیست. و خداوند افسون آرخ بدان افسون کنند بکاست ماه و آرخ پیوشند و فرو ریزد. و گروهی زنان بماء فروردین از آب پاک جو را تر کنند و بنام دختران بکارند. چون آن جو برسد، از آب آن جو موی دختران را بشویند، گیسوهاشان دراز گردد بقدرت خدا. **حکایت** هم درین معنی شنیدم که هرمز شاه پسر نوشیروان عادل یکی خویدزاری بگذشت و آن خویدزار را آب می دادند و آب از آن خویدزار بیرون آمد و راه را می گرفت و ماه فروردین بود. بفرمود تا از آن آب یک مشربه پر کردند و بخورد و گفت از پدرم شنیدم که گفت جو دانه مبارکست و خویدش بدیدن خجسته و آبی که از وی بیرون آید، هر که از آن آب بخورد ماندگی را برد و خشکی معده بردارد و ایمن بود تا دیگر سال که جو برسد، از رنج و بیماری و تشنگی نبودش. **حکایت** هم درین معنی روزی بشمس المعالی قابوس بن وشمگیر آگاه کردند که مردی

زر و درستی سیم از گهواره او در آویختندی و گفتندی خدایان مردمان این هر دواند اعنی زر و سیم درین گیتی با این هر دو باد از جهت فال نیک و اغلب همچنان آمدی.

یاد کردن جو: ملوک عجم جو نو رسته را بهمه حال بفال سخت نیکو داشتندی بهمه روزگار بجمله آنک در وی منافع بسیار است. و از همه حبوب که پیوسته غذا را شاید جو باشد و از همه زودتر برسد و پدید آید (۹۳ب) و خرم است و بدو مثل زنند که بچهل روز در رسد [و] بانبار و انبار شود. و بهر جای که اندازی بروید و ببالاید و جو است که هم در اول دارو را شاید و هم غذا را. حکما و زهاد غذای خود را جو اختیار کرده اند و گفته اند که از خوردن جو خون کثیف و خون فاسد نزاید که باستفراغ و بطیب حاجت اند و نیز از بیماری دموی و صفراوی و سودایی ایمن بود و اطباء عراق جو را ماء المبارک خوانده اند و او آنست که بیست و اند گونه بیماری معروف را سود دارد، بدین گونه سرفه را و ذات الحیت را و تب مطبقة را و تب محرقه را و سرفه تاب (۹) را سرسام گرم و سل و دق و تپش جگر را و خفقان گرم را و تپش گرده را و تنور (۹) [شور] معده را و طلی سینه و طلی نفرس را که از گرمی بود. و روغن جو قوای صفراوی را ببرد و روغن گندم قوای سوداوی را ببرد. و سبوس جو دردیگ کنند و نیکو بجوشانند کسی را که پیه‌های پای سست شده باشد و روانی ازو شده که بر نتواند خواست و یا پیوندهای پای و زانو بگیرد، پای را در آب جو نهد تا مهره زانو، بصلاح باز آید و سبوس گندم همین فعل کند و مجربست. و بشهر بغداد جو را بجوشانند و آب او به پالایند و با روغن کنجد بجوشانند چنانکه آب برود و روغن بماند، آن روغن را در آماس صفراوی مالند، بهتر شود و زنان آماس رحم را ازین روغن به پنبه بر

فارغ کنم. چون بجای دیگر شد آن حدیث را منکر شد. بوزرجمهر بفرمود تا آن جایگاه که حجام قدم نهاده بود بکنند. گنجی پدید آمد که آن مال را اندازه نبود. نوشیروان را (۹۳آ) گفت او بقوت زر آنچنان سخن می گفت و هم بقوت آنک دست بر سر خدایگان داشت. و این حدیث را بتازی مثل کردند. .: من یری الکنز تحت قدمیه یسال الحاجه فوق قدره. .: **حکایت** هم در خاصیت زر چنین گویند که صاحب خبران خبر دادند ملک فنا [ما] خسرو را که عضد الدوله کنیت او بود که مردی در حدود اندک زمینی خریده است و اندر آن زمین برنج میکارد، از آن زمین چندانی برنج بر می آید که از هیچ زمین بدان نیکویی چندانی برنج بر نمی آید که از آن زمین بر می آید. و هر سال او را از آن زمین هزار دینار دخل می باشد. فنا خسرو آن زمین را [زمین را] بچندان که آن مرد بها کرد بخرید و بفرمود تا آن زمین را بکنند. چهل خم دینار خسروانی یافتند. **حکایت** هم اندر خاصیت زر تالیف کننده کتاب را دوستی بود که او را بو سعد طبسی گفتندی، مرا گفت ببخارا زنی دیوانه بود و مردمان او را بخانه بردندی و با ایشان سخنان گفتی که از آن خنده آمدی. وقتی او را بخانه بردند از بهر مزاح و گفتند ترا عروس کنیم. زینتها و زیورها برو بستند و جامهای دیا در وی پوشیدند و او را بر تختی نشاندند. آغاز کرد سخنان عاقلانه گفتن [کرد] تا بخویشتن می نگریست و آن جامها و زیورها میدید، بعقل می بود و چون زیورها و جامها از وی بدر کردند، همچنان بحال دیوانگی باز شد. **حکایت** هم در معنی زر در کتاب دانایان چنین خوانده ام که بزرگان عجم چون تا زنی یا کنیزکی خواستندی کرد، کمر زرین در میان بستندی و زن را بفرمودندی تا جامها از خویش جدا کردی و همه پیرایها بر خود نگاه داشتی. گفتندی چون چنین کنی فرزند دلاور آید و خوب صورت و نیکو روی و خردمند و در دل مردمان شیرین بود و چون پسر بزادندی، درستی

دراج را بینند که هر روز بیکجا فرود آیند و در آنجایگاه نشاط کنند، بدانند که آنجا دفینی است و چون زنبور عسل یعنی نحل بی وقت خویش بموضعی گرد آیند، بدانند که آنجایگاه دفینی است و چون درختی بینند با شاخهای بسیار و از جمله شاخهای او یک شاخ روی بجا آورده باشد یا بار گشته باشد سوی دیگر شاخها، بدانید که آنجا دفینی است و اندر زمین ریگ بوم مقدار یک مراغه گاه اسب گل نرم باشد چنانک مهر را شاید، بدانید که آنجا دفینی هست. این همه زیرکان بجایگاهها نشان کرده باشد تا بوقت حاجت بر سر آن توانند شد. و هر که زر را بی آنک در مسینه یا در خنبره و آبگینه کند و همچنان در زمین کند، چون بعد سالی سر آن زر رود زر را در آن مقدار زمین باز نیابد. پندارد که کسی دیده است و آنرا بر گرفته. زر گران باشد هر روز فروتر رود و اگر زمین نمناک باشد، هر روز فروتر می رود تا بآب رسد و بدان جانب گراید که زمین نمکی تر بود. و اندر وزن زر حکایتها بسیار است اندکی یاد کنیم. **فصل** اندر خاصیت زر چنین گویند که روزی نوشیروان عادل در بوستان حجام را طلب کرد تا موی سر او باز کند. چون حجام حاضر آمد و دست بر سر او نهاد، گفت ای خدایگان، دختر خویش را بمن ده تا من دل تو از جانب قیصر روم فارغ کنم. نوشیروان را از آن سخن سخت عجب آمد که حجام نه باندازه گلیم خویش پا دراز کرد. ولیکن از بیم ستره که حجام بر سر وی داشت سخن نیارست، بجز آنکه گفت چنین کنم چون موی برداری. چون حجام موی برداشت، نوشیروان بوزرجمهر را بخواند و این احوال با وی باز گفت. بوزرجمهر فرمود تا حجام را حاضر کردند. از وی پرسید که از وقت موی باز کردن با خدایگان چه گفتی. حجام گفت هیچ چیز نگفتم. بفرمود تا هم بدان موضع باز بردندش که موی باز کرده بود و از وی پرسیدند که در وقت موی باز کردن با خدایگان چه گفتی. گفتم که دختری را بزنی بمن ده تا دل تو از شغل قیصر

باشد و در بصر روشنائی زیادت کند. و باز را چون زنگل زرین در پای بندند، بر شکار دلیرتر باشد و خرم شکارتر بود. و هر جراحی که از زر افتد زودتر بهتر گردد، اما جراحی که از زر بر سر افتد سر بهم نیارد و از بهر این خاصیت بزرگان عراق گوش دختران و پسران بسوزن زرین سوراخ کنند تا آن سوراخ هرگز بهم نیاید. و از کوزه زرین آب خوردن از استسقا امان دهد و بدین سبب اطبا زر و سیم و مروارید اندر مفرح بکار برند و مشک و عود و ابریشم و هر ضعیفی که مردم را افتد از غم و اندیشه، آنرا بگوهر زر و سیم بتوان برد و آنچه از جهت انقباض افتد بمشک و عود و ابریشم بتوان برد و آنچه از جهت خشکی (۹) [>نکی] خون بود بکهریا و بسد شود و آنچه از ستبری خون افتد بمروارید و ابریشم بصلاح توان آوردن. **یاد کردن** علامات دفین: بدانکه هر زمینی که اندر وی گنجی یا دفینی بود برف و باران که بدان زمین بیارد زود بگدازد و از علامات یکی آنست. دیگر از علامات دفین یکی آنست که چون زمینی خراب بیابند بی کشتمند و اندر آن زمین سپرغم نیکو دمیده بود، بدانید که آنجا دفین است. دیگر اگر بر دامن کوه شاخ کنجد بیند رسته یا شاخ ریحانی که از آبادانی دور باشد خاصه درو شاخ بادنجان بینند، بدانید که آنجا دفین است. چون انبوه کرکسان بیند که در گرد زمینی می گردند و از آنجا مردار نباشد، بدانند که آنجا جایگاه دفین است و چون زمینی شورناک یابند و بر آن زمینی مقدار یک پوست گاو یا پوست اسبی و یا نمی بینند که مهر را بشاید، آنجا دفینی باشد و چون باران آید بیک پاره زمین هموار و بیکجا آب گرد آید بی آنک مغاکی بود، بدانید که آنجا دفین است و چون بزمستان که زمین برف گیرد همه جای و یکجای گداخته باشد و برف نه پذیرد و زود بگدازد، بدان که آنجا دفینی است و چون موش و راسو (۹۲ب) بیکجا گرد آیند و بازی کنند و بر پای خیزند، بدانید که آنجا دفینی است و چون تذرو و

یاد کردن زر: زر اکسیر آفتاب است و سیم اکسیر ماه، و نخست کسی که زر از کان بیرون آورد جمشید بود. چون زر حاصل گشت، بفرمود تا او را چون قرص افتاب کردند و بر هر دو روی او صورت آفتاب بنگاشتند. پس گفت این زر کدخدای مردمانست در زمین چنانک آفتاب در آسمان. و زر را خداوندان کیمیا شمس نهار الجد خوانده اند یعنی آفتاب روز بخت و سیم را قمر لیل الجد یعنی ماه شب بخت و مروارید را کوکب سماء الغنی یعنی ستاره اسمان توانگری. و گروهی زیرکان در روزگار زر را نیز نار شتاء فقر خوانده اند یعنی آتش زمستان درویشی، و گروهی فرح قلوب الاجل خوانده اند یعنی خرمی دل‌های همه بزرگان، و نرجس روضه الملک یعنی نرگس بوستان پادشاهی، و گروهی قره العین یعنی روشنایی چشم دین. و شرف او در گوهرهای گدازنده چنان نهاده اند که شرف آدمی بر حیوانات. و از خاصیت‌های زر یکی آنست که دیدار وی چشم را روشن کند و دل را شاد دارد و داشتن زر خرد را زیادت کند و فهم را تیز کند و مردم را دلیر کند و اندیشه رای صواب نماید و دانش را قوه دهد و صوره نیکویی زیادت کند و جوانی را بر جای بدارد و به پیری دیرتر رساند و عیش را خوش دارد و زندگانی و عمر بیفزاید و بچشم مردمان عزیز دارد و آرزوها حاصل گرداند. و از بزرگی از ملوک عجم که زر داشته اند دو چیز زرین کس را نداده اند، یکی جام و دیگر رکاب. (۹۲آ) و دو چیز دیگر از زر تا بزرگی و سپاه سالار بزرگی نبودی، بوی ندادندی، یکی کمر شمشیر و دیگر حمایل برز. و در منافع زر چنین یاد کرده اند که کودک خرد را چون بدارودان زر شیر دهند، آراسته سخن آید و در دل مردمان شیرین بود و بتن خویش مردانه آید و از بیماری صرع ایمن باشد و در خواب نترسد. و چون بمیل زرین سرمه در چشم کشندش، از شب کوری و آب دویدن چشم ایمن

تیری و کمانی و دواتی و قلمی و اسبی و بازی و غلامی خوب روی، و پادشاه را ثنا گفتندی بزبان پارسی چنانک یاد کرده می شود بعبارت ایشان و چون موبد موبدان از آفرین پرداختی و این خدمتها پیش کشیدی، پس بزرگان دولت پیش آمدندی و خدمتها پیش آوردندی. **آفرین موبد موبدان** شاهها جشن فروردین و بماه فروردین آزادی گزین، یزدان دین کیان سروش آورد پا کردن دانا کرد و بینا بکاردانی و دین دیوند (۴) با خوی هژیر و رسم هژیر و شاد باش و تخت زرین و انوشه خور بجامی جمشیدی و رسم نیاکان در همت بلند و نیکو کاری و خوب کرداری و ورزش داد و رای نگاه دار. سرت سبز باد و جوان باد چون خوید سبز، و اسب کامکار تو پیروز تازی بر دشمن، و تیغت تیز و روشن و کاری بدشمن، و بازت گیرا و پی خجسته بشکار، و کارت راست چون تیر و چیزی با وی [+حیری ل وی]، جامه همه کشوران بگیر نو، بر تخت با درم و دینار، پشت خیری [+چزی] و دانا گرامی (۹۱ب) و زیباء خواه، و سرات آباد بگذر (۴) [+بکده] و زندگانی خوب. این بگفتی و چاشنی کردی و جام بملک دادی و خوید در دست دیگر نهادی و دیناری و درمی در پیش او بر تخت نهادی. و بدین معنی آن خواستی که روز نو از سال نو هر چه بزرگان اول دیدار چشم بر آن افکنند، تا بدیگر سال خرم و شادمان با این همه چیزها در کامرانی بمانید بکام دل و آن سال بر ایشان مبارک گردد که خرمی و آبادانی درین چیزهاست که پیش آوردی روز نوروز.

فصل یاد کردن زر و سیم و خوید و شراب و انگشتی و شمشیر و تیر و کمان و دوات و قلم داشت و باز و غلام خوب روی که روز نوروز بمبارکی پیش پادشاه بردندی. اول خاصیت و فایده زر آغاز کنیم و سخن از وی گویم که زر شاه همه گوهرهای گدازنده است. و الله اعلم (۴) [واه م]

فرمودندی و گفتندی که همه چیزی که پادشاه دارد از نعمتهای دنیا مردمان هم دارند. فرق میان مردمان و پادشاه فرمان رواییست. چون پادشاه چنان باشد که فرمان او بر کار نگیرند، چه او و چه دیگر مردمان، و هزار خلل و تخلیط در کارهای او پدید آید و کار مملکت بزیان آرد. و دیگر در بیابانها و منزلهای، رباطها فرمودندی و چاهها کنندندی و هر کجا نا ایمن بودی از دزدان و مفسدان، دیده گاهها ساختندی و چنان کوشیدندی که در مملکت دزد و مفسد نمی آمدندی. و هر کرا معیشتی و رسمی فرمودندی، هر سال (۹۱آ) بدو رسانیدندی بی تقاضا و اگر از عمال کسی بر مال ولایتی یا ناحیتی یا دیهی برافزودی زیادت از قانون که این عمل بمن دهی تا هر سال زیادت از قاعده چندین بدهم، سخن او نشنودندی و آن عمل بدان کس ندادندی [+ندانندی] تا کس دیگر را این رغبت نیوفتد. گفتندی بهمه حال آن از خانه چیزی نخواهد آورد و بر سال مال این موضع نهادن این زیادتی هم از مردمان خواهد گرفت و بر کار دیوان کرد، چون نگاه کنی اندک روزگار آن ولایت خراب گردد و مردمان آواره شوند. و هر که از خدمتکاران که خدمتی شایسته کردی، هم در آن حال او را نواخت و انعام فرمودندی بر قدر او. و اگر گناهی یا تقصیری از او وجود آمدی، تادیب فرمودندی حق خدمت او را. اما بزندان بازداشتندی تا چون شفاعت کردند عفو فرمودندی و ازین معنی بسیار است و اگر همه یاد کنیم دراز گردد و این مقدار کفایت باشد.

فصل در یاد کردن آیین ملوک عجم. از گاه کیخسرو تا بروزگار یزدجرد شهریار آخر ملوک عجم رسم چنان بوده است که در روز نوروز بامداد خادمی که در سرای بودی و موبد موبدان پیش پادشاه آمدندی با جامی زرین پر از می و انگشتی و درمی و دیناری خسروانی و یکدسته خوید سبز و شمشیری و

همچنان رغبت داریم. اما پسر پادشاه درین معنی حریص تر بودی از جهت چند معنی. و گفتی بر پسر فریضه تر نیم کرده پدر را تمام کردن از جهت آنکه پادشاهی ازو بمن رسیده است. و نیز گفتی پدرم این عمارت یا از جهت عمارت (۹۰ب) و آبادانی جهان می کرد یا از جهت بزرگی همت یا از جهت نزهت و خرمی یا از جهت چیزی تقربا بالله تعالی. مرا نیز آبادانی مملکت باید کرد و همت بزرگ دارم و نزهت و خرمی دوست دارم و مرا نیز رضای حق تعالی چنانکه پدرم را می باید. و گفتی بهیچ حال پدر خویش را خلاف نکنم، خاصه در کار خیر. پس در تمام کردن آن بنا فرمان دادی و اگر در عهد او نیز تمام نشدی، هر کس که بر اثر او بر تخت پادشاهی او را بفال ارجمند داشتی و مبارک گرفتندی و گفتندی که خدای تعالی این بنا در روزگار او تمام گردانید. و ایوان کسری بمداین شاپور [+نیشابور] ذوالاکتاف بنا کرد و از بعد او چند پادشاه آن عمارت همی کردند تا بر دست نوشیروان عادل تمام شد. بنام خود باز خواند و پل اندیمشک همچنین و مانند این بسیار است. و عادت ملوک عجم آن بوده است که هر که پیش ایشان چیزی بردی که پسندیده بودی و قبول افتادی و یا مطربی سرودی گفتی و یا رای بزدی و یا کسی سخنی گفتی در هر معانی که ایشان را خوش آمدی، گفتندی زه یعنی احسنت. چون بر زبان ایشان رفتی، در وقت حرمت دار هزار درم بدان کس دادی و سخن خوش را بزرگ داشتندی. و دیگر عادت ملوک آن بوده است که از سر همه گناهان در گذشتندی الا از سر سه گناه. یکی آنک راز ایشان آشکارا کردی و دیگر آنک یزدان را ناسزا گفتی و سیم آنک فرمان ایشان را حالی بر کار نکردی و تکاسل کردی و تقصیر نمودی. گفتندی که چون راز نگاه نداشت، اعداء از وی بر خواست و آنکه یزدان را ناسزا گفت، کافر گشت و آنکه فرمان پادشاه را انقیاد نمود، با پادشاه برابری کرد و مخالف او شد. این هر سه را در حال سیاست

که ایشان نهادند از بزرگ همتی حد و اندازه ندارد و در سیر ایشان نوشته است. و دیگر آیین ملوک عجم داد دادن و عمارت کردن و دانش آموختن و حکمت ورزیدن و دانایان را گرامی داشتن، همتی عظیم بوده است و دیگر صاحب خبران که ایشان را کاراگهان خوانند در مملکت بهر ولایتی و شهری گماشته بودند تا هر خبر و بشر که میان مردمان حادث گشتی پادشاه را خبر کردند تا آن پادشاه بموجب مصلحتان فرمان دادی. چون حال چنین بودی، دستها دراز کوتاه بودی و صاحب طمعان و مقطعان و عمال و گماشتگان با هیچ کس ستم نیارستندی کردن و یک حبه بنا حق از حق نتوانستندی گرفت و غلامان بیرون قاعده از قانون و قرار خویش یک جوذر و یک من غله از رعایا نتوانستندی گرفت و خواسته و زن و فرزند مردمان در حفظ و امن بودند و هر کس بکار و کسب خود مشغول بودند از بیم پادشاه. و نان پاره که خدم و حشم و لشکریان را ارزانی داشتندی از ایشان باز نگرفتندی و بر عادت بوقت خویش بهر سال و هر ماه رسانیدندی و اگر کسی نماندی و فرزند داشتی که همان کار و خدمت توانستی کرد، نان پاره پدر بدو دادندی. و در کار عمارت و زراعت عظیم راغب و حریص بودند و هر پادشاه که بر تخت مملکت بنشستی، شب و روز در آن اندیشه بودی که کجا آب و خاکی خوش است تا آنجا شهری بنا افکنند، تا ذکر ایشان در آباد کردن مملکت سایر گشتی. و عادت ملوک عجم و روم و ترک [و روم] که این هر سه خاندان نژاد افریدون اند، چنان بوده است که اگر پادشاهی سرائی مرتفع بنا افکندی یا پلی بر رودهای بزرگ یا شهری یا رباطی یا دهی یا دزی و آن بنا در روزگار او تمام نشدی و پسر او بجای بر تخت نشستی یا برادر او یا خویشاوند او، چون کار جهان و جهانیان برو راست شدی، هیچ شغل برو فریضه تر از آن نبود که آن بنای نیمه کرده آن پادشاه را تمام کردی. یعنی تا جهانیان بدانند که ما نیز بر آباد کردن مملکت

نام محمد عبد الملک، او را گفت طلب خراج در وقتی می باشد که مال در آن وقت از غله دور باشد و مردمان را رنج می رسد و آیین ملوک عجم آن بوده است که کیسه کردند تا سال بجای خویش باز آید و مردمان را بمال گزاردن رنج کمتر رسد، چون دستشان بارتفاع رسد. متوکل اجابت نکرد و هم بدان جمله بماند تا بروزگار معتضد. وزیر وی ابو القاسم عبید [عبد] الله بن سلیمان بن وهب حال کیسه با وی باز راند. اجابت کرد و کیسه آفتاب را از سرطان فرمود بفروردین باز آوردند و مردمان در راحت افتادند و آن آیین بماند. و پس از آن شنید که خلف بن احمد امیر سیستان کیسه دیگر بکرد. اکنون شانزده روز از نوروز تفاوت از آنجا کرده است، اما چگونگی آن مرا مقرر نگشت. و سلطان سعید معز الدین و الدین ملک شاه انار الله برهانه را ازین حال نیز معلوم گردانید. فرمود تا کیسه کنند و سال را بجای خویش برند. علما و حکمای عصر را از خراسان بیاوردند و هر آلتی که رصد را بکار آید بساختند از دیوار و ذات الحلق و مانند این. و نوروز بفروردین بردند ولیکن پادشاه را زمانه زمان نداد و کیسه تمام نکرده بماند. اینست حقیقت نوروز و آنچه از کتابهای متقدمان و گفتار دانایان شنوده ایم بر سبیل اختصار.

فصل آیین ملوک عجم و ملوک ترکستان آنست که ترتیبی داشته اند در خوان نیکو نهادن هر چه تمامتر بهمه روزگار. چون نوبت بخلفا رسید، در معنی خوان نهادن نیکو نه آن تکلف کردند که وصف بتوان کرد، خاصه از خلفای بنی عباس از آشها و قلیها و حلواها و گوناگون در جمله فقاع مروانیان نهادند و پیش از آن نبود و از آن جهت که فقاع نهادنی [+نهادانی؟] نیست، شیعیان نخوردند. و اغلب حلواهای نیکو چون هاشمی و صابونی و لوزینه و مانند آن و اباه و طبخهء نافع (۹۰آ) و نیکو همه خلفای بنی عباس نهاده اند. و آن رسمهای نیکو

ماچین توژ را داد و زمین روم چنانکه هست سلم را داد و زمین ایران و تخت
 خویش ایرج را داد و ملوک ترک و روم و عجم همه از یک گوهراند و
 خویشان یکدیگراند و همه از فرزندان افریدون اند. و جهانیان را واجبست آیین
 پادشاهان بجای آوردن که ایشان را میراثست، از بهر آنکه از تخمه وی اند. چون
 روزگار افریدون بگذشت و از آن پادشاهان دیگر که از پس او بودند تا
 بروزگار گشتاسب دین او پذیرفت. و از گاه افریدون و جشن او بآن عهد نهصد
 و چهل سال گذشته بود و افتاب نوبه خویش بعقرب آورد. گشتاسب بفرمود تا
 کیسه کردند و فروردین آن روز آفتاب باول سرطان گرفت و جشن کرد و
 گفت آن روزگار را نگاه دارید و نوروز کنید، چه سرطان طالع عالم است و
 دهقانان و کشاورزان را بدین وقت حق بیت المال آسان تر بود دادن. و بفرمود
 که هر صد و بیست سال کیسه کنند تا سالهای بر جای خویش بماند و مردمان
 اوقات خویش بگرما و سرما بدانند. پس این آیین تا بروزگار اسکندر رومی که
 او را ذوالقرنین خوانند و تا این مدت کیسه کرده بود و مردمان بر همان آیین
 همی رفتند تا بروزگار اردشیر بابکان که جشن کیسه افتاد، او کیسه نکرد و
 جشن بزرگ ساخت و عهدنامه بنیشت و آن روز بر خواند. و بر همان آیین همی
 رفتند تا بروزگار انوشروان عادل. چون ایوان مداین تمام گشت، نوروز کرد و
 جشن نهاد و آنکه رسم بود بجای آورد، چنانکی آیین ایشان بود. اما کیسه
 نکرد. گفت این آیین بجای مانید تا سر دور (۸۹ب) که آفتاب باول فروردین
 آید. چه مقصود اندر نهاد نوروز اصلی نه این بوده است که آفتاب باول سرطان
 آید، تا آن اشارت که کیومرث و جمشید کردند از میانه برخیزد. این بگفت و
 بیش کیسه نکرد تا بروزگار مامون خلیفه، او بفرمود تا رصد کردند و پس
 سال از نوروز که آفتاب بحمل آید فرمود گرفتن و زیج مامونی بر جاست و
 هنوز ازین زیج تقویم می کنند، تا بروزگار متوکل علی الله. متوکل وزیری داشت

شیرین گردانید و بخویش منشی مشغول شد و بیدادگری و بزرگ منشی آغاز کرد و از خواسته مردمان گنج نهادن گرفت و جهانیان ازو در رنج افتادند و شب و روز از یزدان زوال ملک او خواستند. آن فر ایزدی ازو برفت و تدبیرهایش همه خطا می آمد. بیوراسب که او را ضحاک خوانند، از گوشه درآمد و او را از پادشاهی بیرون کرد. و مردمان او را یاری و مدد کردند از آنک ازو بتنگ آمده بودند. و از زمین بهندوستان گریخته و بیوراسب بر تخت او پادشاهی بنشست و عاقبت او را بدست آورد و بدو نیش کرد. و بیوراسب هزار سال پادشاهی کرد و باول دادگر بود و بآخر بیدادگر شد و هم دیو او را راه زد و مردمان را رنج نمود، تا افریدون شاه از گوشه درآمد و او را بگرفت و بکشت و پادشاهی بنشست و افریدون از تخمه جمشید بود، پانصد سال پادشاهی کرد و مبارک پی و دادگر بود و با فر پادشاهی. و چون صد و شصت و چهار سال از پادشاهی افریدون بگذشت، دور دوم از تاریخ کیومرث تمام شد و او دین ابراهیم علیه السلام [علیه] پذیرفته بود و پیل و شیر و یوز را مطیع، و گویند که خر را بر اسب او ترکیب کرد و خیمه و ایوان او ساخت و تخم درختان میوه دار و نهال و عمارات و باغها او آغاز کرد و ترنج و نارنج و بادرنگ و لیمو و گل (۸۹آ) و بنفشه و نرگس و نیلوفر و سوسن و شاه اسپرغم و مرزنگوش و مانند آن در بوستان آورد. و هر سال همان روز که ضحاک را بکشت و ملک بر وی راست گشت، جشن سده کرد و مردمان را که از رنج و جور و ستم ضحاک رسته بودند پسندیده داشتند و از جهت فال نیک آن روز جشن کردند تا بدین عهد آن آیین او و پادشاهان نیک عهد در ایران و توران بجای می آرند. و چون دور آفتاب بفروردین خویش رسید، آن روز افریدون نیز جشن کرد و از همه جهان مردمان گرد آورد و عهدنامه نبشت و گماشتگان را داد فرمود و ملک بر پسران بخش کرد، ترکستان از لب جیحون تا چین و

آنجا بودند و از آنجا روان شدند بفرمان ایزد تعالی حالهای عالم دیگرگون گشت و چیزهای نو پدید آمد، مانند آنک در خورد حال عالم را گردش باشد. پس چون این وقت را دریافتند، ملوک عجم از بهر بزرگ [+درک] داشت آفتاب را و از بهر آنکه هر کس این روز را درنتوانست (##) دبیری آموخت و او را طهمورث دیوبند خواندندی. و پادشاهی پس از او به برادرش جمشید رسید و از تاریخ کیومرث هزار و چهل سال گذشته بود و آفتاب باول روز فروردین تحویل کرد و برج نهم آمده و چون از پادشاهی جمشید چهار صد و بیست و یک سال بگذشت، این دور تمام شده بود و آفتاب بفروردین خویش باول حمل باز آمده و جهان بروی راست گشته بود و مردمان را مطیع خویش گردانید. بفرمود تا کرباس بکردند و دیبا ببافتند و دیبا را پیش ازین با دیو بافت خواندندی. اما آدمیان بعقل و تجربه و طول روزگار بدینجا رسانیده اند که اکنونست. و خر و اسب و استر را در کار آورد، خر را بر اسب افکند تا استر پدید آمد و جوهرها از معدنها بیرون آورد و سلیحها و پیرایها او ساخت (۸۸ب) و زر و نقره و مس و ارزیز و سرب از کانهها او بیرون آورد و تخت زرین و تاج و طوق و یاره او کرد و مشک و عود و کافور و زعفران و عنبر و دیگر حلیها او بدست آورد. و درین روزگار که یاد کردیم جشن ساخت و نوروز نام نهاد و مردمان را بفرمود که هر سال چون فروردین نو گردد جشن کنند و آن روز نو داند تا آنگاه که دور بزرگ باشد که نوروز حقیقت بود. و جمشید شاه در اول پادشاهی سخت عادل و بخشاینده و خدای ترس و مبارک پی بود و جهانیان او را دوست دار بودند و پادشاهی او خرم و شادمان و ایزد تعالی او را فری و عقلی داده بود که چندین چیزها بیرون آورد و جهان و جهانیان را بزر و گوهر و دیباها و عطرها و چهارپایان بیاراست. و چون از پادشاهی او چهار صد و اند سال بگذشت، دیو بدو راه یافت و دنیا را بچشم او و دل او عزیز و

مردمانرا (#) بنگریست آنروز بامداد که آفتاب باول دقیقه حمل آمد، مؤبدان عجم را گرد کرد و بفرمود تا تاریخ نهند. چنین گفته اند مؤبدان عجم این روز و ماه را نام نهد بدوازده نام و تاریخ ازینجا آغاز کند. مؤبدان گرد آمدند جمله و تاریخ نهادند و چنین گفته اند مؤبدان عجم که دانایان که بروزگار بوده اند که ایزد تبارک و تعالی را دوازده فرشته است، از آن چهار فرشته را بر چهار گوشه جهان گماشته است تا اهرمنانرا گذر ندهند که از کوه قاف بر گذرند و چنین گویند که چهار فرشته دیگر را فرموده که در آسمانها و زمینها همی گردند و اهرمنانرا دور همی دارند از خلاق. و چنین گویند که این جهان چون خانه ایست نو اندر سرای کهن برآورده. و ایزد تعالی آفتاب را از نور خویش بیافرید (۸۸ آ) و آسمانها و زمینها را بدو روشن گردانید و نباتها را بدو پرورش داد و جهانیان چشم بدو دارند که نوریست از نورهای ایزد عز و جل و اندر وی با جلال و تعظیم نگرند و در آفرینش وی ایزد تبارک و تعالی را بیشتر از دیگران عنایت بوده است و گویند که مثال این چنانست که ملکی بزرگ را اشارت کنند بخلیفی از خلفای خویش که او را بزرگ دارید و حق هنر وی بدانید و هر که وی را بزرگ داشت، ملک را بزرگ داشته است. و گویند که چون ایزد تبارک و تعالی آن هنگام که فرمان فرستاد که ثبات [و] برگیرد تا منفعت آنچه در تو نهادم بهمه چیزها برسد و بآسمان بزرگ فرمان داد که آفتاب را بر گردان تا تابش او و منفعتش بهر چیزی برسد، آفتاب از سر حمل برفت و آسمان او را بگردانید و تاریکی شب از روشنایی جدا شد و شب و روز پدید آمد. و آن وقت آغازی شد تاریخ آیین جهان را. و پس از آن بهزار و چهار صد و شصت و یک سال بهمان دقیقه و همان روز باز رسید و آن مدت هفتاد و دو قران کیوان و اورمزد باشد که آنرا قران صغری گویند و این قران بهر بیست سالی باشد و هر گاه که آفتاب سیری کند و بدین جایگاه رسید و زحل و مشتری

تابستان بود. **مهر ماه** این ماه را مهر بدان خوانند که مهربانی بود مردمان را با یکدیگر از هر چه رسیده باشد از غله و میوه، یکدیگر را نصیب دهند و بهم خوردند و آفتاب اندرین ماه برج میزان باشد و آغاز پاییز بود یعنی خریف. **آبان ماه** این ماه را بدان سبب آبانماه گویند که آبها اندرین ماه زیادت گردد از بارانها که آغاز کند و مردمان آب گیرند از بهر کشت کردن و این ماه میانه خریف بود و نوبت آفتاب برج عقرب باشد. **آذر ماه** بزبان پهلوی آذر آتش بود و هوا درین ماه سرد گشته بود و بآتش حاجت باشد و نوبت آفتاب درین ماه برج قوس را باشد. (۸۷ب) **دی ماه** بزبان پهلوی دی دیو باشد و بدین سبب این ماه را دی خوانند یعنی درست باشد و زمین از خرمنها دور مانده باشد و مردمان درین ماه چون دیوان باشند در خانهاء آتش و تاریکها و این ماه نوبت آفتاب برج جدی باشد و اول زمستان بود. **بهمن ماه** و بهمن یعنی این ماه بهمان ماند و مانند بود بماه دی و خشکی و بکنج اندر ماندن. و نیز اندرین ماه آفتاب بخانه زحل باشد یعنی برج دلو و با جدی پیوند دارد. **اسفندارمد ماه** این ماه را بدان اسفندارمد ماه خوانند که اسفند بزبان پهلوی میوه بود یعنی اندرین ماه میوها و گیاهها دمیدن گیرد و نوبت آفتاب بآخر برجها یعنی حوت رسد. پس کیومرث شاه این مدت را بدین گونه بدوازده بخش کرد و ابتدای تاریخ پدید کرد. پس از آن چهل سال بزیست و چون از دنیا برفت، هوشنگ شاه بجای او بنشست و نهصد و هفتاد سال پادشاهی کرد و دیوانرا قهر کرد و آهنگری و درودگری و بافندگی ابریشم پیشه کرد و ابریشم از پيله و انگبین از زنبور بیرون آورد و جهان بخرمی بگذاشت و بنام نیک ازین جهان بیرون شد. و از پس او طهمورث شاه بنشست و سی سال پادشاهی کرد و دیوانرا بطاعت آورد و بازارها و کویها بنهاد و ابریشم و پشم بتافت و بوداسف در ایام او پدید آمد و دین صابیان آورد و او دین او پذیرفت و زنار بر بست و آفتابرا پرستید و

را چهار قسمت کرد، هر قسمتی سیصد و شصت و پنج سال و ربعی از سال چنانکه مدت سال خردست سیصد و شصت و پنج روز و ربعی از شبانروزی و آنرا سال بزرگ نام کرد و چون چهار قسمت ازین سال بزرگ بگذرد، نوروز بزرگ و نو گشتن احوال عالم باشد و بر پادشاهان واجبست آیین و رسم ملوک بجای آوردن از بهر مبارکی و از بهر تاریخ را و خرمی کردن باول سال. و دانایان گفته اند که هر که نوروز را جشن کند و بخرمی پیوندد و عمر (۸۷ آ) در شادی و خرمی گذراند. **فروردین ماه** فروردین بزبان پهلوی است، معنی چنان باشد که این آن ماه است که آغاز رستن نبات اندر وی باشد و این ماه برج حمل راست، سراسر آفتاب اندر وی باشد. **اردیبهشت ماه** اردیبهشت ماه را اردوهشت نام کردند، یعنی آن ماه است که جهان در وی بهشت ماند و خرمی و ارد بزبان پهلوی مانند باشد، وهشت بهشت باشد و آفتاب اندرین ماه بر دور راست برج ثور باشد و میانه بهار بود. **خرداد ماه** خرداد ماه را خوردار نام کردند، یعنی آن ماهی که خورش دهد مردمانرا از گندم و جو و میوه و این ماه برج جوزا راست که آفتاب درین برج باشد. **تیر ماه** تیر ماه خوانند که اندرو جو و گندم و دیگر ترها قسمت کنند چون تیر، و نیز آفتاب از بلندی فرود آمدن گیرد چون تیر پرتاب که بر هوا اندازی و بزیر آمدن گیرد و این ماه برج سرطان را باشد و اول ماه از فصل تابستان بود. **مرداد ماه** و مرد بزبان پهلوی خاک باشد و این ماه را مرداد نام کردند، یعنی که خاک داد خویش بداد از ترها و میوها پخته در وی بکمال رسید و نیز هوا از غبار مانند خاک باشد و این ماه میانه تابستان بود. قسمت او از آفتاب برج اسد را باشد. **شهریور ماه** و این ماه را از بهر آن شهریور خوانند، یعنی ریو شاهان که دخل پادشاهان درین ماه باشد که ایشان ده یک از غلها درین ماه خواهند و درین ماه کدیوران را دادن خراج آسان تر باشد و آفتاب را درین ماه بنوبت برج سنبله باشد و آخر

(۸۶آ) رساله در تحقیق نوروز

(ب ۸۶)

بسم الله الرحمن الرحيم توکلت علی الله وحده و به نستعین

این کتابیست که تالیف کرده اند در کشف حقیقت نوروز که بنزدیک ملوک عجم کدام روز بوده است و کدام پادشاه نهاده است و چگونه بوده است و چرا بزرگ داشته اند آنرا و دیگر در آیین پادشاهان و عادت و سیرت در هر کاری مختصر است. **اما بعد** اما سبب نهادن نوروز آن بوده است که چون آفتاب را دو دور بود، یکی آنکه هر سیصد و شصت و پنج روز و ربعی از شبانروزی باول دقیقه حمل باز آید، آن وقت را نوروز و نوسال خوانند. و دیگر آنکه هر هزار و چهار صد و شصت و یکسال بهمان دقیقه باز آید. بهمان وقت و روز که رفته بود بدین دقیقه باز نتواند آمد، چه هر سال یک ربع از مدت کم میشود و چون جمشید این روز اندر یافت، نوروز نهاد و جشن آیین آورد و پس از وی پادشاهان و مردمان بدو اشارت کردند و قصه این چنانست که چون کیومرث اول ملوک عجم بیادشاهی بنشست خواست که ایام و سال و ماه را نام نهد و تاریخ سازد تا مردمان آنرا بدانند (#) یافت نشان کردند و عالمیان را خبر دادند تا همگنان او را بدانند و آن تاریخ را نگاه دارند و چنین گویند که چون کیومرث این روز را آغاز تاریخ کرد، سال افتاب را چون یک دور آفتاب گشت در مدت سیصد و شصت و پنج روز و ربع شبانروزی این ربع را بجای ماند و سیصد و شصت و پنج روز را بدوازده قسمت کرد بر قیاس دور قمر. هر بخشی سی روز و هر یکی را از آن نامی نهاد و بفرشته باریست. آن دوازده فرشته که ایزد تبارک و تعالی ایشان را بر عالم گماشته است. آنگاه دور بزرگ

【凡例】

- 以下に校訂するテキストの底本は、大英図書館（British Library）所蔵Add. 23568写本（本書では「ロンドン写本」と呼ぶ）である。該当する写本葉数は fols. 86a – 101bである。
- 太字で示された箇所は、底本において赤色（赤インク）を用いて書かれていることを示す。
- 底本にはピリオドやカンマはなく、改行もまったくなされていないが、校訂では適宜ピリオド（.）とカンマ（,）を付し、章の変わり目などには改行を加える。
- ∴ で囲んだ部分は、写本中に対句、半句として示される箇所である。
- 底本の語句が必要ないと判断される箇所は [] を付す。
- 底本の語句を修正する場合には、元来の表記を [○○+] として [] 内に示す。
- 底本の語句を補う場合には、《》を使用する。
- 〈پ〉 〈ج〉 〈ز〉 〈گ〉などは、底本では点が打たれていないが、現代表記に準じてあらわす。

سلسله انتشارات متون خاورشناسی

۱۹

رساله در تحقیق نوروز

مربوط به حکیم عمر خیّام

به اهتمام

تومو کو موریکاوا

مینورو اینابا

مرکز پژوهش انفورماتیک آسیای شرقی

مؤسسه مطالعات علوم انسانی

دانشگاه کیوتو

۲۰۱۱

〔東方學資料叢刊 第19冊〕

伝ウマル・ハイヤーム著 ノウルーズの書（附ペルシア語テキスト）

著 者 守川知子・稲葉 穰

発行日 2011年3月28日

制作者 中西印刷株式会社

発行者 京都大學人文科學研究所附屬東アジア人文情報學研究センター

〒606-8265 京都市左京區北白川東小倉町47

Tel. 075-753-6997 Fax. 075-753-6999

<http://www.kita.zinbun.kyoto-u.ac.jp>

ORIENTAL STUDIES REFERENCE SERIES

No. 19

The Book of Nawrūz

allegedly being written by

‘Umar Xayyām

(with the Persian Text)

Translation, Commentary, and Edition

by

MORIKAWA Tomoko and INABA Minoru

CENTER FOR INFORMATICS
IN EAST ASIAN STUDIES
INSTITUTE FOR RESEARCH IN HUMANITIES
KYOTO UNIVERSITY

2011